

2. 年度計画及びプロジェクト報告

1. 年度計画（平成 13 年度）と各種プロジェクトとの対応一覧表

凡 例

- (1) この対応表は、年度計画と予算化された各種プロジェクトとの対応関係をあらわしたものである。
- (2) 各種プロジェクトのなかで、東京文化財研究所に関わるものは、対応する区画に掲載し、成果報告から逆引き参照の便をはかるため、各区画に Area 番号を付した。
- (3) プロジェクトには、下記にしたがって、分類項目と担当部門の記号を併記し、あわせて予算項目にしたがって背番号（二桁）を付した。

分類項目	担当部門
プロジェクト研究	A 協力調整官 情報調整室
国際協力・交流等	B 美術部
資料作成・公開	C 芸能部
研究集会・講座等	D 保存科学部
研究指導・研修等	E 修復技術部
刊行物	F 国際文化財保存修復協力センター
	G 共通
	H 管理部

例 画像形成技術の開発に関する研究（ A01 ）

協力調整官 - 情報調整室が担当するプロジェクトで、 のプロジェクト研究の掲載頁に研究成果が報告されていることをしめしたもの。

・ただし、科学研究費・受託研究等の研究調査は、研究および業務の性格上、この対応表には掲載していない。

- (4) 背番号のないプロジェクトは、日常業務のなかで実施、または他のプロジェクトの一環として総合的に実施しているもので、適宜、必要な場合に注記を付した。

独立行政法人文化財研究所の年度計画（平成 13 年度）

独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三号）第三十一条の規定により、平成 13 年 4 月 2 日付け 13 庁財第 15 号で認可を受けた独立行政法人文化財研究所中期計画に基づき、平成 13 年度の業務運営に関する計画（年度計画）を次のとおり定める。

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務の効率化を進め、次の措置を講ずることにより業務の効率化を図る。

1 国際協力、国際共同研究の「国際文化財保存修復協力センター」への一元化による業務の効率化のため、東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センターと奈良文化財研究所埋蔵文化財センター国際遺跡研究室の業務について連絡調整を行い、国際協力事業等を効率的に実施する体制の構築を図る。

2 両文化財研究所の共通業務の効率化のため、予算決算事務、共済組合事務の一元化を行う。

3 両文化財研究所の組織の見直しによる経費の削減のため、研究部門及び事務部門の改組を行い効率的に業務、事務を実施する。

（本部機能として総務部を新設、東京文化財研究所の研究部門に協力調整官を新設、事務部門を部制化し 1 部・1 課に改組、奈良文化財研究所の研究部門に文化遺産研究部を新設、事務部門の部制を 2 課体制から 3 課体制に改組）

4 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進を目的として、複写機の利用節約を図るため部局ごとの複写機使用枚数を測定するとともに、それに応じた予算の差引を行う。またコピー用紙は再生紙を使用し、古紙をリサイクルに利用して再資源化を図る。さらに所内LANを活用し回覧文書等のペーパーレス化を推進する。

5 セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用を推進するため、セミナー室、講堂等一般の利用に供することが可能な施設の有料貸付を実施する。

6 連絡システムの構築等による事務の効率化を推進するため、インターネット、所内LAN、会計システムネットワーク等を活用した連絡体制を構築する。

7 業務の外部委託、事務のOA化の推進等による効率的な事務の執行を推進するため、奈良文化財研究所の受付業務、事務連絡便等を外部委託し、また、独立行政法人会計システムの導入による会計処理を実施するとともにファームバンキングの導入による銀行取引業務を実施する。

8 法人の自己点検評価のあり方についての検討と適切な自己点検評価を実施するとともに、今後の法人運営の改善に反映させるため、外部有識者等による両文化財研究所の点検評価について検討し、外部評価を踏まえた上での法人として自己点検評価を実施する。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するための措置

1、文化財に関する調査研究

次に掲げる調査・研究及びそれに関連する国際交流協力等を計画的に進めるとともに、外部機関との共同研究を実施する。また、客員研究員の積極的な活用等により、調査・研究の推進を図る。

1) 文化財に関する基礎的な調査研究を推進するため以下の研究課題に取り組む。

我が国及び諸外国の美術及び美術史、演劇、音楽、民俗芸能に関する調査・研究を実施する。

Area1

ア 東アジア地域における美術交流の歴史や日本美術に及ぼした影響について解明するため、重要美術作品資料集成に関する報告書を平成 13 年度に刊行することを目指して研究・執筆を行い、また、日本における外来美術の受容に関する報告書を平成 14 年度に刊行することを目指し資料の収集や分析・研究を行う。さらに、日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究について、平成 16 年度に『日本・東洋古美術文献目録』を刊行することを目指して資料の収集、分析・研究を行うとともに、近世輸出工芸品に関する報告書及び中国壁画の研究に関する報告書を平成 17 年度に刊行することを目指し、それぞれの研究に関する資料の収集や分析・研究を行う。

イ 我が国の近代美術の発達に関して、時代を追って調査研究を進めるとともに黒田清輝に関する調査研究を進めるため、平成 15 年度に報告書を刊行することを目指して明治期博覧会出品目録に関する調査研究を実施し、また、平成 16 年度に報告書を刊行することを目指して昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究を行う。さらに平成 17 年度の報告書の刊行を目指して現代美術資料の調査研究及び黒田清輝の再評価に関する調査研究のため、資料収集や分析研究を行う。

重要美術作品資料集成に関する研究 (B01)

日本における外来美術の受容に関する調査研究 (B02)

日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究 (B03)

近世輸出工芸品に関する調査研究 (E05)
で包括的に実施

中国壁画の研究 (B04)

明治期博覧会出品目録に関する調査研究 (B05)

昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究 (B06)

黒田清輝の再評価に関する調査研究 (B08)

現代美術資料の研究 (B07)

ウ 伝統芸能に関する調査及び外国との比較研究に関し平成 17 年度に報告書を刊行することを目指し、歌舞伎・文楽の上演稀少演目の上演実態及び能・狂言の特殊技法に関する現地調査及び記録作成、分析研究を行う。

エ 伝統楽器の変遷に関する資料目録や報告書を平成 17 年度に刊行することを目指して、資料の収集及び分類、分析を行う。

オ 民俗芸能の本来の意義を明らかにすることを目的に、民俗芸能の上演目的や上演場所の歴史的変遷に関する資料収集、現地調査、記録作成を行う。

- 1 伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究 能・狂言の特殊技法、歌舞伎・文楽の稀少演目の上演実態に関する調査研究 (C01)
- 2 日本伝統楽器の変遷研究 (C02)
- 3 民俗芸能の上演目的や上演場所の歴史的変遷に関する調査研究 (C03)

文化財研究所芸能部所蔵の歌舞伎番付の整理と目録化

近代歌舞伎台帳の調査と目録化

歌舞伎・文楽の裏方資料の所在調査

能楽「三番叟」等の技法記録と比較譜作成

1 いずれも (C01) として総合的に実施。

博物館・社寺の所蔵楽器調査

琉球楽器復原のための調査研究

楽器の変遷研究

三の丸尚蔵館の楽器調査

2 いずれも (C02) として総合的に実施。

歴史的意義の解明が不十分な民俗芸能の調査研究

民俗芸能のイベント出演と現地公開の比較調査

3 いずれも (C03) として総合的に実施

国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構に関する調査研究及び文化的建造物に関する基礎的調査研究を実施する。

ア 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡について、平成 17 年度に古代都城の実体解明に関する報告書を刊行することを目指し、それに資するため本年度は以下の地区の発掘調査を実施する。

(平城宮跡) 第一次大極殿地区、第二次朝堂院地区

(藤原宮跡) 宮朝堂院跡、京内条坊街区

イ 上記アの発掘調査と比較研究を行うため、これと密接な関係を有する平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡以外の遺跡について、本年度は以下の地区の発掘調査を実施する。

(平城宮跡地区) 興福寺中心伽藍、興福寺大乘院、興福寺一乘院、平城宮東院南方遺跡

(飛鳥・藤原宮跡地区) 石神遺跡

ウ 上記発掘調査による出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施することを目的として、平成 13 年度及び平成 13 年度以前の発掘により出土した出土品(木・金属製品・土器・土製品・木簡・瓦等)の分類及び分析研究を実施し、また、同発掘の出土遺構図面の作成など基礎的研究と景観の考察など修景に関する研究を行う。さらに平成 14 年度に報告書を刊行することを目指し、吉備池廃寺発掘調査成果の分析と総合的研究を進めるとともに、平成 15 年度の報告書の刊行を目指して、平城宮・平城京出土の古代官銭の調査研究、日本各地出土の畿内土師器の調査研究、飛鳥池遺跡発掘調査の分析と官営工房に関する総合的研究、富本銭鑄造技術の復原的研究をそれぞれ実施する。このほか平成 17 年度の報告書の刊行を目指し、全国出土文字資料の収集・研究及び藤原京域と条坊に関する復原的研究を実施する。また平成 14 年度に古代飛鳥に関する復元模型や、コンピュータグラフィック、出土品レプリカを作成するため、古代飛鳥のイメージ再現に関する研究を実施する。

エ 文化財建造物の保存及び修復のための指標となる報告書を平成 17 年度に刊行することを目指し、古代建築、伝統建築、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、木造建造物の保存修復に関する報告書を平成 14 年度に刊行することを目指し調査研究と執筆を行う。

オ 文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿復原に関して、専門的・技術的な援助助言を行うため、第一次大極殿復原設計計画に沿った実践的研究及び第一次大極殿正殿の復原施工段階における実践的研究を行う。

カ 古代庭園に関する報告書を平成 17 年度に刊行することを目指して、本年度は飛鳥時代以前の庭園に関する資料の収集と分析・検討を行う。

キ 飛鳥地域の歴史の解明を目指すとともに、その研究成果を飛鳥資料館での展示により有効活用する方法を検討す

るため、アジア史の中の飛鳥文化の研究及び飛鳥時代の工芸技術の研究をそれぞれ実施する。

文献の面から日本の歴史、文化の源流等の実態を探るため、奈良の興福寺、東大寺、薬師寺、法隆寺及び西大寺の所蔵する歴史資料・書跡資料等に関する報告書及びデータベースを平成 17 年度に作成することを目指し、本年度は下記寺院の所蔵資料等の原本調査、記録作成を行う。

(調査対象) 興福寺、東大寺、薬師寺、法隆寺

(2)文化財に関する基礎的研究を基に、文化財の保存・活用の充実に図るために必要な調査・保存・修復・整備・活用に関する実践的な調査・研究を実施する。

文化財の調査・研究方法の開発等に関する調査研究を進め、文化財を生み出した文化的・歴史的背景を明らかにするため以下のとおり実施する。

ア 発掘調査及びそれらに関連する作業の手法・技術開発・改良に関する調査・研究として、平成 14 年度の報告書の刊行を目指し、官衙遺跡発掘調査法の研究を実施するとともに、遺跡発掘の迅速化を図ることを目的とする遺物・遺跡の調査技術に関する研究並びに深層遺構探査法の開発・研究をそれぞれ実施する。

イ 年輪から建築や美術の年代測定や自然災害発生の確認を行う年輪年代測定法に関して、平成 15 年度を目途に自動年輪計測機器の開発を行うための調査・研究を行い、また、平成 17 年度に報告書の刊行を目指して、年輪年代学と考古学に関する研究、年輪年代学と建築・美術・自然災害に関する研究をそれぞれ実施する。

ウ 遺物の分布状況、分類、編年及び当時の生活環境を解明する環境分析法を開発するため、平成 17 年度には動植物遺存体による環境考古学研究に関する報告書、遺物の形式・分類・編年に関する報告書及び遺物の製作技法に関する報告書を刊行することを目指し、それぞれの研究のための資料となる考古資料、出土品、動植物遺存体等を全国各地から収集し、整理・分析する。

エ 保存科学および考古科学に関する国際会議の開催により、「考古科学の総合的研究(COE)」のまとめを行い、研究報告書を作成する。

科学的手法を用いた新たな保存修復技術・方法の開発に関する調査研究を以下のとおり実施する。

Area3

ア 文化財の彩色材料に関する非破壊測定法の実用化のための基礎研究として、平成 17 年度に報告書を刊行することを目指し、画像形成技術の開発に関する調査研究、美術工芸品の彩色に関する光学的調査研究、非破壊調査法に関する調査研究を実施する。

イ 臭化メチル燻蒸代替法及び殺菌・防カビ法の開発のため、平成 15 年度に臭化メチル燻蒸代替法に関する報告書を刊行することを目指し調査・研究を実施する。

画像形成技術の開発に関する研究 (A01)
光学的手法による美術工芸品の彩色にについての調査研究 (B09)
非破壊測定法の改良研究及び新手法の研究 (D01)

臭化メチル燻蒸代替法の開発に関する研究 (D02)
殺菌・防カビ法の開発に関する研究 (D02)
で包括的に実施

Area4

ウ 文化財施設の保存環境に関する状況調査や分析研究及び周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究を行い、その報告書を平成 17 年度に刊行することを目指す。

5 周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 (E03)

文化財施設の保存環境の研究 (D03)
臼杵磨崖仏における周辺環境の影響等に関する研究
巖島神社における周辺環境の影響等に関する研究
日光の社寺における周辺環境の影響等に関する研究
5 いずれも (E03) として総合的に実施

エ 大型木製品、有機質遺物、無機質遺物の保存処理法及び調査法を平成 17 年度を目途に開発するため、大型木製品の劣化と保存処理に関する調査研究、有機質遺物の材質分析と保存処理に関する調査研究及び無機質遺物の非破壊構造調査のデジタル化と応用研究を実施する。

Area5

オ 古糊などの伝統的な修復材料の素材に関する物性の解明及び文化財修復の新たな素材と技法並びにレーザーによる文化財クリーニング法について平成 17 年度を目途に開発・研究を行い、また、平成 14 年度を目途に焼損文化財の保存修復法を開発するための調査研究を実施する。

6 伝統的修復素材に関する調査研究 (E06)

古糊の物性に関する研究
漆の製造工程に関する基礎的研究
伝統的焼付け漆に関する調査研究
膠の物性に関する研究
6 いずれも (E06) として総合的に実施
レーザーによる文化財クリーニング法の開発研究 (E07)
焼損文化財の保存修復に関する研究 (E08)

カ 古代遺跡に関する保存修復指針及びデータベースを平成 17 年度に作成公開することを目指し、古代遺跡の保存科学的研究のため資料の収集、分析・研究等を実施する。

Area6

キ 近代の文化遺産の保存修復に関する報告書を平成 17 年度に刊行することを目指し、これらに関する資料の収集、分析・研究等を実施する。

近代の文化遺産の保存修復に関する研究 (E01)

文化財の活用手法に関する調査・研究を以下のとおり実施する。

ア 平城宮跡、藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究のため、文化庁の行う平城宮跡第一次大極殿院地区の復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施するとともに、「宮跡整備構想」に基づく具体的整備方針の再検討に関する報告書及び全国の大規模遺跡の整備・管理状況に関する報告書を平成 17 年度に刊行することを目指し、情報収集や調査・分析を行う。

イ 出土遺構及び遺物の公開活用に資するため、遺跡の公開のための新たな保存法として、平成 17 年度を目途に遺跡の露出展示法を開発するための調査・研究を実施する。

(3)文化財に係る調査・研究に関する国際交流・協力等を推進する。

次に掲げる文化財の調査・保存・修復に関する国際機関及び諸外国との研究協力・国際共同研究・情報交換・専

門家養成等の支援を行う。

Area7

ア 諸外国の文化財の保護制度に関する調査・研究として、平成 17 年度に報告書を刊行することを目指し、ヨーロッパの文化財保護制度と保存活用事例に関する調査研究を平成 13 年度に実施する。

イ 文化財を取り巻く自然環境とレンガ等材料の劣化原因に関する共同研究として、平成 16 年度の報告書の刊行を目指し、日韓共同による石仏、木造彩色建造物等の文化財に対する自然環境と環境汚染に起因する劣化とその対策について第 2 期目の調査研究を実施するとともに、平成 17 年度の報告書の刊行を目指し、カンボジア、ラオスの屋外文化財の自然環境と劣化状況及び保存処理に関する調査並びにタイの遺跡におけるレンガの劣化現象及び保存処理に関する調査研究を実施する。

ウ 中国及び中南米諸国との文化財の保存修復に関する調査・研究、技術移転並びに人材育成の実施のため、敦煌莫高窟の文化財に関する第 3 期目最終年次の現地調査及び研修生の受け入れを実施するとともに、龍門石窟の文化財に関する第 1 期初年度の現地調査及び研修生の受け入れや、パナマの歴史地区に関する保存修復協力事業を 5 年計画の初年度として実施する。またユネスコの行う中国クムトラ千仏洞の文化財の調査に関する研究協力を 2 年計画の初年度として行う。

エ 在外日本古美術品修復についての諸外国博物館等との協力事業及び研究機関・専門家との学术交流について 10 件の事業を行う。

ヨーロッパの文化財保護制度と保存活用事例に関する調査研究 (F01)

日韓共同研究 (E03) の一環として実施

国際共同研究 (タイ・カンボジア他) (F03) の一環として実施

文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査・研究 (F02)

敦煌莫高窟壁画の保存修復研究 日中共同研究 (E02)

龍門石窟の保存修復に関する調査研究 (F04)

パナマの歴史地区に関する保存修復協力事業 (F05)

在外日本古美術品保存修復協力事業 (E05)

文化財保護に関する日独学术交流 (D04)

スミソニアン研究機構との国際研究交流 (D05)

オ 環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査・研究について、平成 17 年度の報告書の刊行を目指し、カンボジア・アンコール遺跡及びタニ寮遺跡群の発掘調査・研究並びにイースター島の石造文化財に関する調査研究を実施する。

カ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、古代庭園及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、平成 17 年度の報告書の刊行を目指し、唐長安城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同発掘調査、中国の生産遺跡に関する中国河南省文物考古研究所との共同研究、韓国の生産遺跡に関する韓国国立文化財研究所との共同研究、藤原京・平城京並びに百済・新羅王城の形成と発展過程に関する比較調査・研究、東アジア陶磁器の比較研究を実施する。

文化財保存修復に関する国際研修等を次のとおり実施する。

Area8

ア 文化財保存修復研究国際センター (ICCROM) との国際修復研修事業の共同開催

イ 文化財の保存・修復に関する国際シンポジウムの実施

国際研究集会 漆の保存と修復 (E04)

第 25 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 (G01)

Area9

- ウ アジア文化財保存セミナーの実施
- エ 国際文化財保存修復研究会の実施

アジア文化財保存セミナーの実施 (F06)
 国際文化財保存修復研究会の実施 (F09)

- オ 国際協力事業団、ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所等の研修事業への協力

Area10

文化財保存修復に関する指導・助言・協力のため、諸外国へ職員を派遣し国際研究交流を実施する。

国内においても文化財の保存科学等の分野において、各種研究機関、民間企業等と共同で調査・研究を行う。

外部機関等からの求めに応じて、文化財の保存・修復に関する実践的研究を実施する。

その他の研究活動を参照

受託調査研究及び外部機関との共同研究の報告を参照

受託調査研究及び外部機関との共同研究の報告を参照

2 調査研究に基づく資料の作成・公表

次のとおり調査・研究に基づく資料を作成するとともに、定期的な刊行物の発行、講演会・シンポジウムの開催等により積極的に公表し、国民が容易に研究成果を入手できるよう努める。

- ア 研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行

定期刊行物

- 『美術研究』(年3冊)
- 『日本美術年鑑』(年1冊)
- 『芸能の科学』(年1冊)
- 『保存科学』(年1冊)

年報

- 『東京文化財研究所年報』
- 『奈良文化財研究所年報』

Area11

定期刊行物『美術研究』(B15)
 定期刊行物『日本美術年鑑』(B16)
 芸能部出版関係事業 (C04)として実施
 『保存科学』(D07)

広報企画事業 (A03)として実施

研究報告書、研究論文

- 文化財害虫事典
- 近代の文化遺産の保存修復に関する報告書
- 発掘調査報告書

Area12

『文化財害虫辞典』(D08)

国際研究集会報告書

アジア文化財保存セミナー報告書

国際文化財保存修復研究会報告書

Area13

文化財保護法 50 周年記念国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」報告書の出版 (F11)
 第 7 回アジア文化財セミナー「アジア諸国の世界文化遺産 - 持続的発展と保存 - 」の報告書の出版 (F12)
 第 8 回アジア文化財セミナー「考古遺跡の活用しながらの保存」の報告書の出版 (F13)
 国際文化財保存修復研究会報告書の出版 (F14)

Area14

文化財保存修復研究協議会報告書
 民俗芸能研究協議会報告書
 近代歌舞伎の伝承に関する研究報告書

X線透過映像集
 林忠正宛書簡集
 大正期美術展覧会出品目録
 在外日本古美術修復協力事業報告書

蔵書目録

『文化財保存修復研究協議会報告書』(G02)
 芸能部出版関係事業 (C04)として実施
 『近代歌舞伎の伝承に関する研究』 (C01)で
 包括的に実施
 X線透過映像集の刊行 (E)
 『林忠正宛書簡集』(B17)
 『大正期美術展覧会出品目録』(B18)
 在外日本古美術品保存修復協力事業 (E05)で
 包括的に実施
 所蔵目録出版・バーコード化 (A05)
 『黒田清輝《智・感・情》- 美術研究作品資料 - 第1
 冊』 (B01)で包括的に実施
 『日韓共同研究報告書』 (E03)で包括的に実
 施
 『敦煌莫高窟壁画保存修復に関する日中共同研究報
 告』 (E02)で包括的に実施
 『日中壁画修理用語集』 (E02)で包括的に実
 施
 ユネスコ「無形の文化遺産の保存に関する国際ワー
 クショップ」報告書 (C07)

研究論集等奈文研資料
 飛鳥資料館図録

ニュース

埋蔵文化財ニュース
 東文研ニュース
 奈文研ニュース

Area15

広報企画事業 (A03)として実施
 東京文化財研究所概要 (A03)で包括的に実
 施

イ 公開学術講座、講演会、発掘現地説明会の開催

公開講演会 (年6回)
 発掘調査結果の現地説明会 (年6回)
 唐長安城等海外発掘調査報告会
 国際シンポジウム (年1回)
 公開学術講座
 夏期学術講座

Area16

文化財の保存及び修復に関する国際研究集会の開
 催 (前出 G01)
 美術部オープンレクチャー (B13)
 芸能部研究集会・講座 (C05)として実施
 芸能部研究集会・講座 (C05)として実施

ウ データベースの充実と順次公開

公開及び公開予定のデータベース

木簡データベース

遺跡データベース

古代地方官衙・居宅・寺院関係遺跡データベース

Area17

日本・東洋美術史研究文献データベース

美術作品画像データベース

文化財関連雑誌データベース

文化財基礎資料データベース

黒田清輝仮想ギャラリーデータベース

広報企画事業（ A03 ）として実施

写真室運営費（ A06 ）として実施

広報企画事業（ A03 ）として実施

広報企画事業（ A03 ）として実施

広報企画事業（ A03 ）として実施

エ 黒田記念館、飛鳥資料館、平城宮跡資料館、飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室における展示公開の充実

黒田清輝記念館における作品の展示公開

常設展（毎週木曜日午後開館 無料公開）

地方巡回展（年1回）

所蔵作品の貸与（3件）

飛鳥資料館における展示公開

常設展（月曜日、年末年始休館 有料公開）

特別展（年2回）

展示品の貸与

平城宮跡資料館における展示公開

常設展（月曜日、年末年始休館 無料公開）

展示品の貸与

飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室における展示公開

常設展（土日祝日、年末年始休館 無料公開）

展示品の貸与

Area18

黒田記念館の公開（ B10 ）

黒田清輝巡回展（ B11 ）

所蔵作品の貸与（ B12 ）

オ 研究成果の公表に関するアンケート調査等の実施

文化財に関する協議会、研究集会等の開催

ア 民俗芸能研究協議会

イ 文化財保存修復研究協議会

ウ 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会

エ 保存科学研究集会

オ 在外日本古美術品修復技術研究会

Area19

芸能部研究集会・講座（ C05 ）として実施

文化財保存修復研究協議会の開催（ F10 ）として実施

近代の文化遺産の保存修復に関する研究（ E01 ）として実施

在外日本古美術品保存修復協力事業（ E05 ）で包括的に実施

3 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供
文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供

Area20

ア 文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供について充実を図るための方策を検討し、前年度実績を越える目標を設定して、その実施に努める。

イ 文化財関係データベースを継続的に作成し充実するとともに順次公開する。

資料閲覧室運営 (A04)
国際資料室の整備・公開・活用 (F08)
広報企画事業 (A03)として実施
伝統芸能の画像・音声・映像資料のデジタル化 (C06)
文化財保存に関する国際情報の収集及び研究 データベースの作成・公開 (F07)

文化財情報の電子化及びシステムの構築に関する研究成果を活用した文化財情報基地としての基盤整備並びにホームページの充実

Area21

システム管理 (A02)として実施
広報企画事業 (A03)として実施
写真室運営費 (A06)として実施
写真室設備・調査等 (A07)として実施

4 文化財に関する研修等
文化財に関する研修

ア 埋蔵文化財発掘技術者研修

一般課程、専門課程、特別課程を計 12 回実施、研修人数のべ 200 人

Area22

イ 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修
期間 2 週間、受講生 25 名程度

博物館・美術館等の保存担当学芸員研修、資料保存地域研修、フォローアップ研修 (D06)

連携大学院教育の推進等

ア 東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進

Area23

東京芸術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学）

連携大学院 (G)

京都大学：人間・環境学

奈良女子大学：人間文化学

イ 博物館学実習

Area24

期間 1 週間 実習生 10 名（東京）

期間 2 週間 実習生 10 名（奈良）

博物館学実習 (B14)

5 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言

文化庁の実施する平城宮跡及び藤原宮跡の整備復原事業関係

ア 平城宮跡第一次大極殿院正殿復原事業に関する技術的助言

イ その他平城宮跡、藤原宮跡等の整備事業に関する技術的助言

地方公共団体等の実施する文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業関係

ア 史跡の整備・復原事業等に関する技術的助言

イ 文化財の保護に関する調査

ウ 文化財の材質に関する調査

Area25

エ 文化財の修復及び整備に関する調査

オ 無形民俗文化財の復活・伝承に関する調査

文化財の材質に関する調査 (D)
文化財の修復及び整備に関する調査 (E)

- ア 博物館・美術館等館内の環境調査
- イ 文化財の虫害等に対する調査

博物館・美術館等館内の環境調査(D)
文化財の生物被害に対する調査指導(D)として
実施

6 前各項の業務に附帯する業務

- (1)平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力・積極的支援及び文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に対する積極的協力

平城宮跡等公開活用支援事業の実施

- 東院庭園の公開と維持管理
- 遺構展示館の公開及び付属駐車場の警備
- 朱雀門の公開
- 宮跡内トイレの清掃
- 宮跡内の巡視及び美化管理

文化庁平城宮跡等管理事務所との連絡調整及び連携協力

- (2)平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等への来訪者に対するサービスの充実

平城宮跡解説ボランティア事業の運営

ボランティア登録者 約 100 名、年間約 3 万人を対象に解説事業を実施

各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等への支援

ミュージアムショップの運営委託

飛鳥資料館のミュージアムショップを委託により運営

平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等への来訪者に対する満足度の調査

予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画

- (1)予算
別紙のとおり(p.21参照)
- (2)収支計画
別紙のとおり(p.21参照)
- (3)資金計画
別紙のとおり(p.22参照)

短期借入金の限度額

短期借入金の限度額は、6億円。

短期借入が想定される理由は、運営費交付金の受け入れに遅延が生じた場合である。

重要な財産の処分等に関する計画

重要な財産を譲渡、処分する計画はない。

剰余金の使途

決算において剰余金が生じた場合は、調査・研究、出版事業及び国民に対するサービスの向上に必要な展示施設・設備の整備等に充てる。

その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1 人事に関する計画

(1)方針

職員の適正な配置と計画的な人事交流の実施

職務能率の維持・増進

ア 福利厚生の充実

イ 職員の能力開発等の推進

(2)人員に係る指標

常勤職員については、その職員数の抑制を図る。

(参考1)

年度初の常勤職員数 126人

年度末の常勤職員数の見込み 126人

(参考2)今年度中の人件費総額

今年度中の人件費総額見込み 1,194百万円

ただし上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過勤務手当、退職者給与及び国際機関派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

2 施設・設備の整備を計画的に推進する。

III 予算（人件費の見積を含む）、収支計画及び資金計画参照資料

(1) 予算（平成13年度予算）（単位：百万円）

区 分	金 額
収 入	
運営費交付金	3,333
展示事業等収入	20
受託収入等	16
計	3,369
支 出	
運営事業費	3,353
人件費	1,389
物件費	1,964
うち一般管理費	315
うち調査研究事業費	967
うち情報公開事業費	149
うち研修事業費	39
うち国際研究協力事業費	301
うち展示出版事業費	116
うち平城宮跡等公開活用支援事業費	77
受託事業費	16
計	3,369

【人件費の見積り】

今年度中1,194百万円を支出する。

ただし上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過勤務手当、退職者給与及び 国際機関派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

(2) 収支計画（単位：百万円）

区 分	金 額
費用の部	
経常経費	3,585
人件費	1,389
物件費	1,964
うち一般管理費	315
うち調査研究事業費	967
うち情報公開事業費	149
うち研修事業費	39
うち国際研究協力事業費	301
うち展示出版事業費	116
うち平城宮跡等公開活用支援事業費	77
受託事業費	16
減価償却費	216
収益の部	3,585
運営費交付金収益	3,333
展示事業等の収入	20
受託収入等	16
資産見返運営費交付金戻入	33
資産見返物品受贈額戻入	183

(3) 資金計画 (単位: 百万円)

区 分	金 額
資金支出	3,369
業務活動による支出	3,369
投資活動による支出	0
資金収入	3,369
業務活動による収入	3,369
運営費交付金による収入	3,333
展示事業等による収入	20
受託収入	16
投資活動による収入	0

2. プロジェクト報告

凡 例

(1) プロジェクトは、年度計画との対応表の規定（9～19 頁参照）にしたがって、①～⑥の分類項目ごとに年度計画の記載順として配列し、担当部門と掲載頁を明記した。

(2) 各プロジェクト報告の掲載頁では、分類項目と担当部門の記号・背番号（二桁）のほかに、業務実績の該当年度及び該当年度が計画年数の何年目の報告にあたるか判別できるよう配慮し、記号を追記した。

例 重要美術作品資料集成に関する研究（①B01-01-1/5）

①→プロジェクトの分類項目

B01→担当部門の記号とプロジェクトの背番号

01→業務実績の該当年度の下二桁、2001 年度の実績であることを示す。

1/5→5 年計画の第 1 年目の報告であることを示す。

(3) 背番号のないプロジェクトは、日常業務のなかで実施、または他のプロジェクトの一環として総合的に実施しているもので、適宜、必要な場合に注記を付した。

(4) 年度計画との対応表への逆引き参照の便を図るため、プロジェクト報告の掲載頁の上部に対応表の Area 番号を付記した。

①プロジェクト研究に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
重要美術作品資料集成に関する研究（B01）	美術部	25
日本における外来美術の受容に関する調査研究（B02）	美術部	26
日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究（B03）	美術部	27
近世輸出工芸品の実証的研究（*E05）	修復技術部	28
中国壁画の研究（B04）	美術部	29
明治期博覧会出品目録に関する調査研究（B05）	美術部	30
昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究（B06）	美術部	31
現代美術資料の研究（B07）	美術部	32
黒田清輝の再評価に関する調査研究（B08）	美術部	33
伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究（C01）	芸能部	34
日本伝統楽器の変遷研究（C02）	芸能部	36
民俗芸能の上演目的や上演場所の歴史の変遷に関する調査研究（C03）	芸能部	38
画像形成技術の開発に関する研究（A01）	情報調整室	40
光学的手法による美術工芸品の彩色についての調査研究（B09）	美術部	41
非破壊測定法の改良研究及び新手法の研究（D01）	保存科学部	42
臭化メチル燻蒸代替法の開発に関する研究（D02）	保存科学部	43
文化財施設の保存環境の研究（D03）	保存科学部	44

プロジェクト名	担当部門	頁
周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 (E03)	修復技術部	45
伝統的修復材料に関する調査研究 (E06)	修復技術部	46
レーザーによる文化財クリーニング法の開発研究 (E07)	修復技術部	47
焼損文化財の保存修復に関する研究 (E08)	修復技術部	48
近代の文化遺産の保存修復に関する研究 (E01)	修復技術部	49
文化財保存に関する国際情報の収集及び研究 (F01)	国際文化財保存修復 協力センター	50
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査・研究 (F02)	国際文化財保存修復 協力センター	51

*注 近世輸出口芸品の実証的研究は、在外日本古美術品保存修復協力事業 (②E05) の中で包括的に実施した。

重要美術作品資料集成に関する研究 (①B01-01-1/5)

目 的

美術の研究は個々の造形物を対象とするが、どのような場合にも、類似する造形物どうしの比較対照と、関連資料の網羅的な収集とが、研究を具体化するための不可欠な手順になる。ここに、さまざまな形の資料を蓄積する意義と重要性がある。さらに近年は、歴史学をはじめ、美術への関心が多様化し、質の高い資料を幅広く提供することがあらためて求められるようになってきた。

このような見地から、この研究は、新しい美術資料の可能性を探り、その実現を目的にしている。具体的には、①記録媒体、分析手法などの新たな技術に対応し、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たす資料の在り方を研究し、②それを例示する資料の収集と蓄積を実践し、成果を報告書として公表する。

成 果

1. 作品調査と資料収集

1) 近代絵画については、石橋美術館所蔵の青木繁「海の幸」と「海」、藤島武二「天平の面影」、当研究所所蔵の黒田清輝「智・感・情」の油絵6点について作品調査を行い、情報調整室・写真室の協力を得て、可視光励起による蛍光撮影、反射赤外線撮影、透過赤外線撮影を行った。とくに後者の作品では下書きの描線が検出できた。(田中・山梨・鈴木・勝木・井手・塩谷)

2) 彫刻作品については、埼玉県吉川市清浄寺の所蔵する親鸞聖人坐像1点の調査を行い、成果を『美術研究』に発表した。(津田)

3) 在外日本古美術品保存修復協力事業の一環として行った絵画の作品調査

今年度の修復作品として輸入された、ネルソン・アトキンズ美術館所蔵の海北友松筆「琴棋書画図屏風」など6点。イタリア・ブレシア美術館所蔵の平福百穂「荒磯」1点(於ホテル・オークラ)。チェコ・ナールステク博物館所蔵の「保元物語図屏風」1点(於京都国立博物館)。また、サンフランシスコ・アジア美術館所蔵の「十一面観音菩薩像」など8点、シアトル美術館所蔵の俵屋宗達画・本阿弥光悦書「鹿下絵和歌巻」など19点、ホノルル美術館所蔵の「芭蕉図屏風」など11点について現地調査を行った。

今年度の修復作品のうちミネアポリス美術館所蔵の伝狩野山楽筆「四季耕作図屏風」については、京都大覚寺の障壁画調査を行い、この屏風がもと正寝殿竹の間の障壁画であることがわかった。また、クリーヴランド美術館所蔵の「二河白道図」など2点については、保存科学部化学研究室の協力を得て、蛍光X線分析とX線回折分析を行い、顔料などの特性を調べた。(中野・鈴木・津田)

2. 研究発表

1) 山梨絵美子 黒田清輝筆「智・感・情」の光学的調査報告 美術部研究会 01.11.21

2) 鈴木廣之 美術資料学の現状と課題 東京文化財研究所総合研究会 02.2.5

3) 山梨絵美子 黒田清輝筆「智・感・情」についてどのように考えるか 同研究会 02.2.5

3. 論文

1) 津田徹英 親鸞の面影—中世真宗肖像彫刻研究序説— 『美術研究』375 02.3

2) 山梨絵美子 赤外線の眼で見る黒田清輝《智・感・情》 東京文化財研究所美術部編『黒田清輝《智・感・情》—美術研究作品資料—第1冊』 02.3

4. 報告書

今年度は黒田作品の光学調査の成果をまとめ、「美術研究作品資料第1冊」として刊行した。

『黒田清輝《智・感・情》—美術研究作品資料—第1冊』(A4判、カラー図版13・モノクロ図版43)

研究組織

○鈴木 廣之、勝木言一郎、島尾 新、田中 淳、津田 徹英、中野 照男、山梨絵美子(以上、美術部)、井手誠之輔、塩谷 純(以上、情報調整室)、岡田 健(国際文化財保存修復協力センター)

日本における外来美術の受容に関する調査研究 (①B02-01-4/5)

目 的

日本の美術史にとって、中国や西洋などの美術の受容が極めて重要であることは言うまでもない。この問題については、様々な時代やジャンルについて語られているが「受容」や「影響」の語のもとに一面化されるきらいがあり、また無前提に設定された語りの枠組みが視野を狭め、問題の広がりとその解明を阻害している部分もある。

この研究では、美術に見られる異文化受容にかかわる諸現象と、それについての語りの枠組みを点検・整理しながら、時代やジャンルにおける差異と共通性を明らかにし、全体の見取り図を描くことを目指す。具体的には、1)時代別の受容の実態とそれについての言説の問題点を横軸に、2)時代を通じて現れる事象、例えば異文化を伝えたメディアや異文化接触の場、異文化イメージとメタ受容などの問題を縦軸として、共時的分析と通時的分析を綴り合わせ、3)さらに異文化受容の特異点ともいえる事象を加えて研究を進めている。

概 要

1)本研究では、「異文化受容と美術」のもとに連続ミニシンポジウムを行い、それぞれの時代ごとの問題点を議論している。

第1回ミニシンポジウム 2001年7月25日(水) 参加者120名

鎌倉・南北朝時代における外来美術の受容－「宋風」の問題を中心に－	
初期水墨画と宋風	島尾 新(東京文化財研究所)
宋風彫刻の基本的問題	山本 勉(東京国立博物館)
仏教絵画における宋風について	林 温(文化庁)
鎌倉地方における宋風	津田徹英(東京文化財研究所)
ディスカッション「宋風」概念の問題点	司会 井手誠之輔(東京文化財研究所)

第2回ミニシンポジウム 2002年3月27日(水) 参加者51名

江戸時代後期から幕末・明治初期における「漢」と「洋」－南蘋派と洋風画を中心に－	
司馬江漢の風景画をめぐって	金子 信久(府中市美術館)
江戸時代の異国趣味－南蘋風大流行	伊藤 紫織(千葉市美術館)
開成所画学局再考	山梨絵美子(東京文化財研究所)
幕末に人はなぜ絵を見たか	ロバート・キャンベル(東京大学)
ディスカッション	司会 鈴木廣之(東京文化財研究所)

2)また美術部のオープンレクチャーを本研究と関連させて「日本における外来美術の受容について」とのタイトルで開催した。内容の詳細については、81頁参照。

3)本研究に関する発表論文は、下記の通りである。

津田徹英 「滋賀錦織寺天安堂毘沙門天像と天台系所伝『北方毘沙門天王随軍護法真言』の周辺」『日本宗教文化史研究』9 2001.5

勝木言一郎 「林出賢次郎と波多野養作による西域踏査」『アジア遊学』32 2001.10

田中淳 「後期印象派考――一九一二年前後を中心に(中の三)――」『美術研究』374 2002.2

永井隆則 「日本のセザンヌ――一九二〇年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について――」『美術研究』375 2002.3

島尾新 「雪舟等楊の研究(四)――秋冬山水図の情報学(下)――」『美術研究』376 2002.3

研究組織

○島尾 新、津田 徹英、中野 照男、鈴木 廣之、勝木言一郎、田中 淳、山梨絵美子(以上、美術部)、井手誠之輔、塩谷 純(以上、情報調整室)、岡田 健(国際文化財保存修復協力センター)

日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究 (①B03-01-1/4)

目 的

過去 10 数年の間に「美術」に対する関心は著しく多様化し、人文・自然・社会科学のさまざまな分野が「美術」と関わるようになった。美術作品あるいは美術に関する諸現象を直接、間接の対象にした研究の範囲はそれまでの「美術」の枠組みを大きく越えるようになり、その結果、研究の全体像を把握することがむずかしくなっている。この研究は、論文など、もっとも具其他的な形で個々の研究成果が表現される「文献」を素材にして 1960 年代後半から 20 世紀末までの研究の動向を探り、あわせて、これら「文献」の有効な活用を実現して「美術」への関心の多様化に応えることを目的にしている。

具体的には、この研究は、①昭和 41 年 (1966) から平成 12 年 (2000) まで、35 年間の『日本美術年鑑』の「定期刊行物所載文献・東洋古美術」欄に収録された文献の書誌データ (推定約 35,000 件) を扱い、②文献内容に関わる項目 (地域、時代、ジャンル、制作者、産地など) を横軸に、文献の分野 (美学・芸術学、考古、美術史、建築史、歴史一般、文学など) を縦軸に取り、両者の相関関係から全体の傾向と推移を明らかにする。これらの成果を活かして、③必要な文献を効率よく取り出せる検索の指標 (インデックス、分類、キーワードなど) を検討しながら、④『日本・東洋古美術文献目録—昭和 41 年～平成 12 年定期刊行物所載—』(仮称) を編集し、最終年度 (平成 16 年度) に刊行する。

成 果

今年度は、次年度以降の編集作業を効率よく進めるために欠かせない準備作業にあてた。まず、①対象になる大量の書誌データを扱うための正確で効率的な編集手順について研究を行い、それに基づいて、②重複データの除去などの基本的なを進めながら、③入力済みデータの確認を行い、④書誌データの数量を把握した。

1. 編集上の問題点の検出

まず、対象になる『日本美術年鑑』の分類項目を年度ごとに点検した結果、①項目の立て方に相違が見られ、採録文献の取捨選択に一貫性がないこと、②文献の掲載年次の異動や表記の省略があることがわかった。また、コンピュータによる『日本美術年鑑』の編集が始まった昭和 61 年 (1986) 以前の文献については、年鑑の紙面から遡及的に入力した書誌データを点検したところ、③未入力の書誌データが相当件数あり、④用字や表記などに不統一があるなど、かなりの校正作業が必要ながわかった。これらの問題は、いずれも編集作業上の大きな障害になるので、次年度に具体的な方針を立て、個々の作業のなかで解決していく必要がある。

2. 書誌データの全体量

今年度の準備作業によって、今後扱う書誌データの全体量が明らかになった。

①昭和 41 年 (1966) から平成 9 年 (1997) の『日本美術年鑑』「定期刊行物所載文献・東洋古美術」欄に収録された書誌データ数 32,608 件

②昭和 41 年 (1966) から平成 9 年 (1997) の入力済み書誌データ数 31,021 件

③上記のうち、未入力の書誌データ数 1,587 件 (これらは次年度に入力作業を行う予定)

研究組織

○鈴木 廣之、勝木言一郎、中野 照男 (以上、美術部)

近世輸出工芸品の実証的研究 (①E05-01-1/2)

目 的

海外の美術館、博物館に所在する日本工芸品の保存と修復に対する関心の高まりの中で、海外から所蔵工芸品に関する問い合わせが多く寄せられている。また、海外での乾燥した環境下で長時間保管されてきた工芸品は、木地の割れや塗料の剥離など損傷が顕著になってきた作品も多く、保存のために工芸品の基礎知識や修復方法についての協力依頼が後をたたない。しかし、従来江戸時代に日本から輸出した工芸品の研究は国内でも十分に行われておらず、詳しい調査もできていない状態である。在外日本古美術品修復協力事業の修復対象として、近世輸出工芸品が日本に里帰りをする機会を捉えて調査研究を行うものである。

概 要

平成13年度は、アメリカ・フィラデルフィア美術館から「花枝蒔絵木彫筆筒」を2年継続の1年目が終了した。また、メトロポリタン美術館から75口の刀剣類を輸入して修復事業を行った。さらにアシュモリアン美術館より1801年製作の「風景蒔絵ナイフボックス」1基とハンブルグ工芸美術館所蔵の「逢来蒔絵手箱」1合の2年間の修復が終了した。

刀剣の修復は、錆化した刀身を研磨し、白鞘とつなぎを作り、刀と鞘を別々に保管する。鞘や柄巻（鯨の髭巻）などの修復についてはできるだけ現状をとどめ、最小限の補修をした。アシュモリアン美術館のナイフボックスは、クリーニングに続いて塗膜の張りもどしおよび復元をおこない、表面全体に漆固めを行って修復を終了した。また、ハンブルグ工芸美術館の「逢来蒔絵手箱」は、昨年に引き続き細かい塗膜の張りもどしを丹念におこない漆がためを行って修理作業を終了した。フィラデルフィア美術館の「蒔絵筆筒」は、湿度70%の風呂の中で約3ヶ月間放置したところ、背面の亀裂の幅が約1mm狭まった。また、汚れていた木彫部分のクリーニングを行い当初の朱漆の状態が甦った。

保存修復の調査から、ナイフボックスは寄木造りで複雑な木地構造をしており、布着せはなく直接膠下地を付けている。従来、膠下地は水分に弱いとされて来たが、乾燥している海外の環境に適した下地と再評価された。また、蒔絵手箱は蓋と身の蒔絵の技法が違い、破損した身をもとに作り直されたことが判明した。平成13年9月5日（火）に、これらの新発見をもとに修復の中間発表として在外日本古美術品修復技術研究会を開催した。

さらに、平成13年11月13日（火）海外から研究者を招聘し、沖縄浦添市美術館において「近世初頭の日蘭交易について2（長崎商館長日誌から）」（ライデン大学調査員 シンシア・フィアレ氏）を開催した。

<学術雑誌等への掲載>

「海を渡った日本漆器3 技法と表現」（加藤）、『日本の美術』426、至文堂

<報告書>

在外日本古美術品保存修復協力事業（工芸品／絵画）

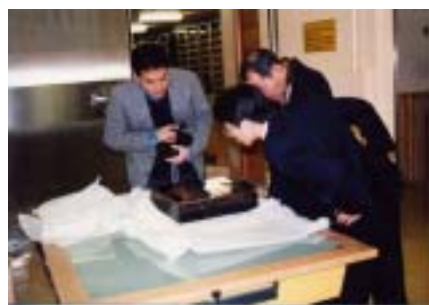
近世輸出工芸品の保存と修復2

研究組織

○加藤 寛、川野辺 渉、早川 典子（以上、修復技術部）、永島 明子（京都国立博物館研究員）、五味 聖（三の丸尚蔵館学芸員）、小池 富雄（徳川美術館普及課長）、金子 皓彦（東京女学館短期大学教授）

備 考

本研究は「在外日本古美術品保存修復協力事業」の一環として行われている。



長崎市立博物館での調査

中国壁画の研究 (①B04-01-1/5)

目 的

中国に所在する壁画、たとえば寺観壁画、古墳壁画、石窟寺院壁画などについて、現地調査の成果をもとに、保存科学や修復技術の研究者と協力しつつ、その保存と修復に対して美術史の面から寄与する事を目指す。併せて、中国壁画について以下の基礎的な調査・研究を行い、中国壁画研究のための基本資料を整備する。①壁画の技法、材料、とりわけ顔料や色料に関する分析と考察を行う。②顔料、色料の変色、退色に関する資料を収集し、その原因を想定し、考察する。③壁画の主題や図像構成、様式的特徴を記述し、その解釈と比較研究を行う。④修復すべき作品を選定し、その美術史的価値付けを行う。⑤技法や材料等に関する文献資料を読解し、現存する壁画と文献資料とを比較、研究する。

成 果

1. 現地調査

①南京地区における石窟壁画の調査

2002年3月18日から20日まで、南京地区の棲霞山石窟、湯山石窟において調査を行った。日本側からは東京文化財研究所の石崎武志、勝木言一郎、中国側からは南京師範大学の黄征、應武燕、南京芸術学院の阮榮春が調査に参加した。棲霞山石窟は南朝、もしくは隋末唐初に造営されたと考えられている石窟で、飛天図が残る。湯山石窟は明代の石窟で、飛天図、菩薩像頭部などの壁画の存在を確認した。調査には、揚子晩報の記者が随行し、調査成果を同紙3月22日付夕刊に「中日学者発現“湯山飛天”」と題して発表した。

②クムトラ石窟の調査

2001年8月24日から9月2日まで、ユネスコのクムトラ石窟保存修復事業の一環として、現地調査を行った。参加者は、奈良文化財研究所沢田正昭、東京文化財研究所中野照男ほか。中国側研究者と修復方針について討議し、測量やボーリング調査の実施箇所、各石窟の現状の記録方法などを検討した。

2. 研究協議会

調査・研究の成果を公表するとともに、今後検討すべき問題の共有化を目指して、中国壁画研究協議会を開催した。

2002年2月20日 於東京文化財研究セミナー室

- | | | |
|--------------|-------------------------------|-------------------------|
| 中野照男 (美術部) | 「中国壁画の研究」の目的と研究対象 | —北京智化寺の壁画を例として— |
| 早川泰弘 (保存科学部) | 蛍光X線による壁画顔料のその場分析 | |
| 山崎淑子 (成城大学) | 敦煌莫高窟・唐前期窟における仏龕の形状変化とそれを巡る問題 | |
| 勝木言一郎 (美術部) | 浄土景観を構成するモチーフとしての鐘楼 | —敦煌壁画の阿弥陀浄土変相・観経変相を中心に— |

3. その他の研究発表

中野照男 Conservation and Restoration of Kumtura Caves, Tokyo Symposium for Digital Silk Roads, National Center of Sciences, Tokyo, 2001年12月13日

中野照男 基調報告 2)美術史から、シンポジウム「歴史的遺産との共生を考える —保存と活用のシステム—」、舞鶴市政記念館、2002年3月2日

4. 関連作品の調査

唐代の顔料、色料の使用の実例として、東京国立博物館保管の地藏菩薩像幡 (敦煌出土、ペリオ将来、TA158) の光学的手法による調査を情報調整室・写真室の協力を得て行った。

5. 中国壁画のデータベースの作成

省別所在データベース入力件数：河南省 254 件、吉林省 49 件、湖南省 93 件、広東省 52 件、青海省 53 件、計 501 件

研究組織

○中野 照男、勝木言一郎 (以上、美術部)、渡邊 明義 (所長)、斎藤 英俊、岡田 健、朽津 信明 (以上、国際文化財保存修復協力センター)、石崎 武志、早川 泰弘 (以上、保存科学部)、川野邊 渉、早川 典子、森井 順之 (以上、修復技術部)

明治期博覧会出品目録に関する調査研究 (①B05-01-1/3)

目 的

博覧会は、博物館とならぶ西洋近代の制度として明治期に輸入され、政府の殖産興業政策を支えたが、一方では、同じく明治になって新たに西洋から受容された「美術」の成長を促すうえでも重要な役割を果たした。この研究は、明治期の博覧会の動向と特色を探ることによって、「美術」あるいは「美術作品」という概念の形成過程を実証的に研究することを目的にしている。

とくにこの研究では、これまで論じられることの少なかった、全国の各府県で開催された博覧会を取り上げ、政府の主催した内国勸業博覧会などとの比較を通じて、その特色や役割を明らかにしたい。具体的には、博覧会の出品目録に注目し、展示品の名称、内容、分類、種別、出品者、数量など、具体的な観点から考察を行えるよう、全国の各機関に所蔵される博覧会出品目録を調査・収集し、その成果をまとめた『明治期府県博覧会出品目録』（仮称）を最終年度（平成15年度）に刊行する。

成 果

以上に述べた目的と方針に沿って、明治期博覧会の研究は、先年度に終了した研究「日本における美術史学の成立と展開」（一部科研）の分担研究としてこれまで進められ、博覧会出品目録の所在調査と資料収集も継続的に進められてきた。また、その成果の一部は、科学研究費報告書『日本における美術史学の成立と展開』（平成12年度）に発表されている。

今年度は、これまで進めてきた作業の継続に重点を置き、先年度に入力を行った府県博覧会出品目録46点のうち、12点の目録について校正作業を完了した。目録資料の所在についても調査を続けているが、今年度は現地調査を行うことができなかった。次年度は、奈良県立奈良図書館、尼崎市教育委員会など、現地調査を実施したい。

また今年度は、日本美術協会が主催した「美術展覧会」の出品目録について、これまでに所在が確認できた明治21年（1888）から昭和17年（1942）にいたる時期の目録63点を編纂することができた。日本美術協会は、明治12年（1878）に内務省の官僚を中心に結成された龍池会を前身にして、明治20年（1886）に発足したが、殖産興業を図るための美術の振興を活動の目的にした協会は、まさに博覧会と不即不離の関係にある重要な役割を担った。「美術展覧会」は春と秋の年2回開催され、出品目録は会の活動を具体的に知ることで資料としてその活用が期待される。なお、目録は、青木茂監修・東京文化財研究所編纂『日本美術協会』第1～10巻（近代日本アート・カタログ・コレクション016～02.5）ゆまに書房 2001.11（10冊）として刊行された。

研究組織

○山梨絵美子、鈴木 廣之（以上、美術部）



明治8年（1875）熊本『博覧会品物録』上、下 東京文化財研究所蔵

昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究 (①B06-01-1/3)

目 的

官展、および既成の在野の美術団体に加え、今日まで存続する美術団体が創設されるとともに、戦時体制化に美術家が糾合された昭和戦前期・戦中期に焦点をあて、作品、美術家、美術団体、美術ジャーナリズム等について基礎調査をおこない、今日的な視点から研究をすすめることを目的としている。

成 果

本研究は、昨年度までの研究計画としてあげていた「明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究」を継続し、またその成果のとりまとめとともに、「昭和期」に時代を設定した研究をおこなった。そのため、本年度は、下記の5項目にわたる研究とその成果をあげることができた。

1 大正期美術展覧会出品目録のデータ集成と研究協議会

平成11年度、12年度に各1回、「大正期美術展覧会等の基礎資料集成のための研究協議会」を、他機関の研究者をまじえておこなってきた。そこで、これまで収集し、データ化した資料の検討とその成果報告である『大正期美術展覧会出品目録』の内容と構成について、とりまとめと今後の課題について協議をおこなった。今年度は、これを継続するとともに、重要でありながら、出品目録のない団体について、個別に研究協議会を下記のとおり実施し、資料のとりまとめについて協議した。

円鳥会出品目録研究協議会 6月14日～15日

佐々木一成(岩手県立美術館)、平澤広(萬鉄五郎記念美術館)、名方陽子(九州大学大学院)

珊瑚会出品作品研究協議会 8月6日

井澤英理子(山梨県教育委員会)、菊屋吉生(山口大学)、北島健(茨城県立歴史館)、庄司淳一(宮城県美術館)、湯本豪一(川崎市市民ミュージアム)、野地耕一郎(練馬区立美術館)、青木茂(美術部調査員)、塩谷純(情報調整室)

2 木村荘八「日記」研究

大正期から昭和期にかけて、多岐にわたり活動した美術家木村荘八の未公開の「日記」が発見され(小杉放庵記念日光美術館所蔵)、美術ばかりでなく、文学、芸能、演劇、風俗にわたる記録として資料的に価値の高いものであることから、下記にあげる各分野の研究者の参加をおおぎ、「木村荘八「日記」研究協議会」を発足させ、今年度は8月30日、11月30日の2回にわたりおこなった。同研究協議会のメンバーは、下記のとおりである。

福島さとみ(調布市立武者小路実篤記念館 日本近代文学)、伊藤陽子(同前)、横山泰子(法政大学 芸能史)、児玉竜一(芸能部研究員)、田中正史(小杉放庵記念日光美術館)、森登(中央公論美術出版)、青木茂(美術部調査員)

3 展覧会開催への企画協力

市立枚方市民ギャラリー(大阪府枚方市)で開催された「松本竣介」展(2002年3月1日～13日)にあたり協力を要請され、その企画構成等について、助言をおこなった。

4 資料の調査収集

美術史家故吉沢忠(1909-1988)が収集保管していた戦前期の展覧会目録等400件をデータ化し、整理し、研究所が所蔵する資料の補完をはかった。『昭和前期美術展覧会出品目録』刊行のための準備にはいった。

5 成果の公表

『大正期美術展覧会出品目録』刊行(刊行事業の項を参照)

田中淳「後期印象派考—一九一二年前後を中心に(中の三)」『美術研究』374号 pp.25-64 02.3

田中淳「松本竣介のまなざし」『松本竣介展』図録(市立枚方市民ギャラリー) pp.2-5 02.3

研究組織

○田中 淳、山梨絵美子(以上、美術部)、児玉 竜一(芸能部)、塩谷 純(情報調整室)

①プロジェクト研究 Area1

現代美術資料の研究 (①B07-01-1/5)

目 的

戦後期から今日にいたる、日本の現代美術を対象に、展覧会図録、目録等の印刷物を中心とする資料を収集・調査し、多様化する現代美術の動向を研究し、あわせて日本の近現代美術の保存記録のあり方と公開の方法について研究することを目的としている。

成 果

個人で収集し、研究者への公開をつづけてこられた笹木繁男氏主宰「現代美術資料センター」所蔵資料の寄贈をうけ、その資料の整理作業と並行して、情報調整室・資料閲覧室の協力を得ながらデータ入力し、それを統合編集した「寄贈目録」(CD-ROM)を刊行することが出来た。今後は、研究者等に活用してもらうため、資料の公開と保存にむけて、既存の資料との補完をはかりながら、継続的に研究をすすめていくこととしたい。なお、『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録』の内容と構成は、下記のとおりである。

美術一般	図書 (1226 冊)、雑誌 (100 種、3391 冊)、図録 (2956 冊)
戦争画資料	図書 (246 冊)、雑誌 (536 冊)、図録 (102 冊)
具体美術資料	図書 (45 冊)、雑誌 (75 冊)、機関誌 (12 冊)、図録 (30 冊)、その他 (53 件)
ファイルINDEX	作家ファイル (342 件)、画廊ファイル (340 件)、その他ファイル (144 件)
付属資料	笹木繁男編「藤田嗣治年譜文献資料」(PDF 版)

<成果の公表>

CD-ROM『笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料目録』刊行 2002年3月

研究組織

○田中 淳、山梨絵美子(以上、美術部)、塩谷 純(情報調整室)



ボナール展(国立西洋美術館他、1968年)カタログ
—笹木氏寄贈資料より—



『笹木繁男氏主宰現代美術センター寄贈資料目録』

黒田清輝の再評価に関する調査研究 (①B08-01-1/5)

目 的

黒田清輝、および関連美術家の作品、資料等の総合的な調査、研究を行うものであり、黒田のもつ美術教育者、美術行政家としての面を大正期の美術の動向との関連から調査・研究することを目的としている。

成 果

本年度は、一年次であるため、これまでの調査研究の見直しを多角的におこなうことにした。そのため、黒田清輝周辺の資料の調査をすすめ、また新しい光学的調査の技術を応用した作品調査をおこない、その結果、下記の6項目の成果を得た。

1 『林忠正宛書簡集』刊行

研究所が保管する、明治期に日仏間で活動した美術商林忠正宛の書簡（フランス語、約 860 通）の読みおこし作業が、小山ブリジット（武蔵大学教授）、馬淵明子（日本女子大学）の研究協力をあおぎ完了し、ひきつづき編集作業に入り、その成果報告を『林忠正宛書簡集』として、今年度 6 月に刊行することができた。これによって、基礎資料として、今後の日仏のジャポネズリー研究におおいに寄与するとおもわれる。

2 黒田清輝通り命名にとまなう、現地調査

平成 13 年 10 月 7 日、黒田清輝がフランス留学中、約 2 年間にわたって滞在したグレー・シュル・ロワン村において、これを記念して黒田清輝通りの命名式がとりおこなわれた。当研究所からは、所長の名代として田中淳が出席し、その後、当地の関係者と黒田の事跡と作品について協議し、またパリにおいても、クリストフ・マルケ（フランス国立東洋言語文化研究所助教授）と協議し、今後の黒田清輝をはじめとする、フランス留学の日本人画家に関する研究交流について次年度より開始することを決定した。

3 「パンテオン会」研究協議会

フランスに滞在した日本人美術家、文化人等が集まってつくられていた「パンテオン会」の総合的な研究を開始し、同会会員の回覧誌の翻刻作業をすすめるとともに、下記にあげる他機関の研究者の参加をあおぎ、平成 13 年 10 月 26 日、12 月 4 日、同 14 年 1 月 22 日の 3 回にわたる研究協議会を開催した。

今橋映子（東京大学）、高階秀爾、手塚恵美子（日本女子大学）、馬淵明子（同前）、三浦篤（東京大学）、ロバート・キャンベル（同前）

4 白馬会展出品目録の調査

黒田清輝が中心となって、1896（明治 29）年に結成された美術団体「白馬会」の出品目録、記念画集等を編纂することができた。これによって、明治中期の美術界におおきな足跡をのこした同会の活動の全容が把握できるようになり、今後の研究にとって基礎資料としての活用が期待される。なお、この目録は、青木茂監修・東京文化財研究所編纂『白馬会』第 1～3 巻（近代日本アート・カタログ・コレクション 013～125）ゆまに書房 2001.11（全 3 冊）として刊行された。

5 黒田清輝作品の光学的調査

情報調整室・写真室の協力を得て、今年度は、9 月 10、11 日、平成 14 年 3 月 4 日に黒田清輝作「智・感・情」の赤外線撮影等の光学的調査を実施した。この調査の結果、これまで明らかではなかった黒田の制作過程を、画像をもとに推測することが可能となった。

6 成果の公表

山梨絵美子“Regard sur la position de Hayashi Tadamasu dans le monde de la peinture occidentale à l'époque Meiji” 『林忠正宛書簡集』 pp.76-84 東京文化財研究所 2001.6

山梨絵美子 「白馬会の活動とその意義」 『近代日本 アート・カタログ・コレクション 013 白馬会 第 1 巻』 ゆまに書房 2001.11 pp.1-11

山梨絵美子 「赤外線的眼で見る黒田清輝《智・感・情》」 『黒田清輝《智・感・情》—美術研究作品資料—第 1 冊』 pp.59-65 東京文化財研究所 2002.3

研究組織

○田中 淳、山梨絵美子（以上、美術部）、塩谷 純（情報調整室）

伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究 (①C01-01-1/5)

伝統芸能には、伝承上の問題や社会的な趨勢などによって、上演が稀少となった演目や技法が数多くある。さらには、秘伝とされて外部には伝承の詳細が明らかにされずにきた特殊な技法なども存在する。

能楽、歌舞伎・文楽の中から、そうした特殊な上演や演目・演出・技法に関して、総合的に収集した基礎的な資料やデータをもとに、調査・研究をおこなうことを目的とする。また、海外との比較研究をめざし、日本の伝統芸能を世界の芸能の中に位置づけるための調査・研究を行う。

成 果

外国との比較研究の一環として、無形文化遺産保護の国際的な環境について考察を発表した。

掲載論文数 1 星野 紘「世界的な無形文化遺産の保存について」『月刊文化財』8月号

1 文化財研究所芸能部所蔵の歌舞伎番付の整理と目録化

目 的

歌舞伎の番付は、過去の上演を知るための一次資料となる根本資料である。芸能部では早くから番付研究の重要性を指摘し、番付研究に基づく作者年表などを刊行してきた。

現在、芸能部には、上方の役割番付、約 3000 点が収蔵されている。近年、諸機関で番付の整理と目録化がなされており、芸能部でも、これらの成果に基づく形で整理調査を行い、目録を刊行する。

成 果

来年度の目録刊行をめざし、整理と調査をすすめた。併せて従来の歌舞伎番付の研究史を整理するとともに、故浦山政雄によって進められた文化財研究所芸能部による番付研究を研究史の中に位置づける試みを発表した。

発表件数 1 児玉竜一「歌舞伎の基礎資料—研究史と展望—」 芸能部夏期学術講座

2 近代歌舞伎台帳の調査と目録化

目 的

芸能は上演とともに消え去る運命にあるが、書き残された台本は、内容を文字として伝える基礎的な資料であり、近世期の歌舞伎台帳については、『国書総目録』に基づく所在目録が作成されている。

本調査では、等閑視されてきた近代期の歌舞伎台帳の所在を調査し、あわせて上演が稀少な演目や演出の上演実態に関する資料収集と調査研究をおこなう。

成 果

本年度は、松竹大谷図書館と早稲田大学演劇博物館に収蔵される台帳・書抜の調査を進めた。併せて上演が稀少な演目や歌舞伎・文楽の現状に関する論考・口頭発表を行った。

収集資料数 369 (台帳関係データ)

掲載論文数 2 鎌倉恵子「浄瑠璃と歌舞伎における知盛像の変遷」『芸能の科学』29号

児玉竜一「新世紀のはじまり」『歌舞伎 研究と批評』28号

発表件数 2 鎌倉恵子「近世演劇にみる道真像」 芸能部公開学術講座

児玉竜一「二代目左団次の思い出」 歌舞伎学会フォーラム

3 歌舞伎・文楽の裏方資料の所在調査

目 的

文献中心の歴史的研究とは別に、上演の実態に即した芸能としての研究にとって、芸能の裏方資料は、上演の実態を知る上で不可欠のものといえる。

本調査では、歌舞伎の音楽的演出や衣裳・小道具・化粧などに関する資料の所在を調査し、併せて、従来ほとんど研究のない文楽の裏方資料の所在と実態調査をおこなう。

成 果

本年度は、松竹大谷図書館と早稲田大学演劇博物館に収蔵される、演出資料および竹本床本の調査を進め、文楽の演出資料に関する調査をおこなった。とりわけ竹本床本に関する調査は従来皆無に等しく、歌舞伎義太夫として初の無形文化財保持者個人認定をうけた故竹本雛太夫の床本を中心に、調査に着手した。同旧蔵の床本には上演稀少となった演目のものも多く含まれ、詳細なメモとともに、演出資料としての活用も期待される。

収集資料数 103 （関連書籍 24 ・ 竹本床本関係データ 70 ・ 附帳関係データ 9）

4 能楽「三番叟」等の技法記録と比較譜作成

目 的

能楽には秘伝化され、楽譜や所作が公刊されていない曲が多い。鎌倉時代から記録のある「三番叟」はその最たるものである。本研究では、こうした秘曲について実演記録室において実技の収録を行い、文献資料とあわせて技法を解明し、資料集の作成をおこなう。

成 果

金春流桜間派の謡には、家元系とは異なる独特の謡いかた、節が残っている。シテ方金春流の金春晃實師の謡で、「翁」を含む6曲の録音をおこなった。また、山本東次郎家所蔵の「間拍子舞」は、大蔵流 13 世虎明の自筆本で現在上演されない間狂言の詞章を収録した貴重な伝書である。その翻刻を『芸能の科学』に掲載した。

収集資料数 7 （狂言伝書 1 金春晃實録音資料 6）

記録作成数 1

掲載論文数 1 小田幸子「資料紹介 間拍子舞」 『芸能の科学』 29 号

研究組織

○星野 紘、高桑いづみ、鎌倉 恵子、児玉 竜一、宮田 繁幸、俵木 悟（以上、芸能部）、小田 幸子、野川美穂子、小野寺節子（以上、調査員）



文政五年一月二十九日初日 天満天神社内芝居（名代亀谷眉弾）
役割番付（東京文化財研究所芸能部所蔵）



金春晃實氏録音風景

日本伝統楽器の変遷研究 (①C02-01-2/6)

日本では縄文時代から多数の楽器が造られてきた。そのうちのかかりの数が各地の博物館や有力な寺社に所蔵されているが、その全貌が正確に把握されているとはいいがたく、一部の楽器をのぞいては精密な調査も行われていない。総合的な楽器研究のための基盤を整えるべく、本研究では次のようなプロジェクトを立てることにした。

1 博物館・社寺の所蔵楽器調査

目 的

博物館や社寺の所蔵状況についてデータ化をおこない、そのなかの主要なコレクションについて、調査研究をおこなう。

成 果

関東・関西・九州・四国方面の博物館へアンケートを送付し、各博物館が所蔵する楽器について、データを収集した。今年度は、そのうち佐賀県鍋島報効会徴古館所蔵の楽器について実地調査を行い、写真資料を収集した。所蔵楽器の中で独自のものは、和琴を模して製作された太平琴である。和琴の定型化以後にあえて変形を製作した意図などについて、当研究所主催の第25回国際研究集会で発表した。

学会等での発表件数 1点 野川美穂子「和琴の形態とその変遷」 於第25回文化財の保存と修復に関する国際研究集会

収集資料数 400点 アンケート有効回答数 303

鍋島報効会徴古館所蔵楽器の写真等 97



鍋島報効会徴古館所蔵の太平琴 和琴の形態を模して製作された琴

2 琉球楽器復元のための調査研究

目 的

琉球楽器復元の協力として、博物館などが所蔵する関連楽器の調査を行う。

成 果

徳川美術館蔵の琉球楽器、東京芸術大学資料館蔵明楽器の調査をおこない、写真資料等を収集した。前者は琉球使節団より献納されたものだが、管楽器の音程測定の結果、ピッチが二種類あることが判明した。二種類の合奏が行われていたことは文献に記録されているが、楽器の点で確認できた意義は大きく、復元へ向けて貴重な助言となった。

収集資料数 45点 (写真資料)

3 楽器の変遷研究

目 的

時代の変遷や他ジャンルとの交流等の影響を受けて楽器の形態がどのように変化したか、文献を交えながら調査研究を行い、音楽史研究の新しい方法論を確立する。

成 果

鼓胴の変遷資料として個人蔵の鼓胴を調査した。この鼓胴は法量がずばぬけて大きく、製作年代も奈良時代と比定されるので、これまで史料のみで知られており、平安初期に退転した四ノ鼓の遺品であろうと位置づけた。調査結果は、第25回国際研究集会で発表した。MIHO MUSEUM 所蔵の「雷雲蒔絵大鼓胴」についても調査を行った。この鼓胴は雅楽から能へ至る過渡期の形態を残しているが、X線撮影の結果、表面はすでに能の鼓胴風に作られていることが判明した。成果は、第6回世阿弥忌研究セミナー等で口頭発表した。生田流の箏曲についても調査を行い、成果を『芸能の科学』29号に公表した。

学術雑誌等への掲載論文2点 野川美穂子「東北大学狩野文庫蔵本『箏曲示例』をめぐって」『芸能の科学』29号
高桑いづみ「益田鈍翁旧蔵鼓胴について—東大寺旧蔵四ノ鼓の可能性—」第25回文化財の保存と修復に関する国際研究集会プレプリント

学会等での発表4点 高桑いづみ「世阿弥時代の鼓胴」 於第6回世阿弥忌研究セミナー
高桑いづみ「能の楽器考—雅楽から能へ—」 於第6回法政大学能楽セミナー
高桑いづみ「益田鈍翁旧蔵鼓胴について—東大寺旧蔵四ノ鼓の可能性—」 於第25回文化財の保存と修復に関する国際研究集会
高桑いづみ「絵空事の合奏」 於京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究プロジェクト

収集資料数 42点 (写真資料)

4 三の丸尚蔵館の楽器調査

目 的

三の丸尚蔵館所蔵楽器の調査を行う。

成 果

一部の弦楽器について調査を行い、文献資料との整合性や、その後の修理状況について確認した。

収集資料数 30点 (写真資料)

研究組織

○高桑いづみ (芸能部)、野川美穂子 (調査員)



個人蔵 四ノ鼓 全高55センチ
(ほぼ同時代に制作された法隆寺
宝物館蔵鼓胴の全高は43.6センチ)

民俗芸能の上演目的や上演場所の歴史的変遷に関する調査研究 (①C03-01-1/5)

従来その歴史的意義が十分解明されていない民俗芸能の芸能史上の価値を明確化することにより、その有効な保存継承施策に資する。また上演の場所のあるべき姿についても考察する。

1 歴史的意義の解明が不十分な民俗芸能の調査研究

目 的

現代における社会経済的激変の中で変容・消滅の危機に直面している全国各地の民俗芸能に対し、その歴史的・文化的価値を明確にすることや社会的変遷を把握することを目指して、基礎的資料収集・調査分析を行い、その無形の民俗文化財としての保存継承施策に資する。

成 果

従来無意識に伝承してきたため、その価値が認識されることもなく変容や消滅の危機に直面している民俗芸能に対し、芸能史的評価を明確にする事を目指し、平成 13 年度は「床板上で踊られる盆踊」（調査対象地 徳島県）と「掛け合い歌」（調査対象地 秋田県）について、現地調査と資料収集を実施し、その成果を「芸能の科学」等で公表した。

収集資料数 35 点

文献 19 点

ビデオ 4 点 「堂上の盆踊り」 3 点、「金沢八幡の掛唄」 1 点

写真 フィルム 5 本 徳島県の盆踊り関係 3 本、金沢八幡宮の掛唄関係 2 本

その他 7 点 金沢八幡宮奉納伝統掛唄に関する伝承者メモ

記録作成数 0 件

学術雑誌等への掲載数 3 件

星野 紘「民俗音楽と地域・学校・行政—民俗音楽の復活再生への方策」日本民俗音楽学会編『民俗音楽の底力』

星野 紘「盆踊りの場所の変容とその本来」星野紘著『歌い踊る民』勉誠社

小野寺節子「民俗芸能のマニュアル作成における成果と課題」『芸能の科学』29 号

学会、研究会等での発表件数 1 件

小野寺節子「総合的な資料作成—東京都豊島区长崎獅子舞の場合を事例に」第 4 回民俗芸能研究協議会調査・報告書等刊行数 1 件

『第 4 回民俗芸能研究協議会報告書』

2 民俗芸能のイベント出演と現地公開の比較調査

目 的

近年民俗芸能の新たな上演の場として各地で盛んなフェスティバルや民俗芸能大会などのイベントの実態と、出演芸能の現地公開とを比較調査し、文化財保護的見地から現地公開以外の民俗芸能のあるべき上演のあり方を考察する。

成 果

平成 13 年度は、イベントの実態調査として、「第 40 回北上みちのく芸能まつり」（岩手県北上市）、「第 1 回堺芸術芸能フェスティバル」（大阪府堺市）、「第 9 回地域伝統芸能全国フェスティバル」（静岡県静岡市）、「第 51 回全国民俗芸能大会」（東京都）の現地調査を行い、資料を収集した。また、イベントに出演する芸能の現地公開状況を確認するため、「広瀬のかんこ踊り」（三重県鈴鹿市）の現地調査を実施した。さらに、イベント主催者に対する面談調査として、北上市及び堺市の各担当部局を訪問し、必要な情報収集を行い、その成果を総合研究会等で発表した。

収集資料数 82 点

デジタル写真 82 コマ 「広瀬のかんこ踊り」 19 コマ
「第 40 回北上みちのく芸能まつり」 20 コマ
「地域伝統芸能全国フェスティバル 静岡大会」 14 コマ
「堺国際芸術芸能フェスティバル」 12 コマ
「全国民俗芸能大会」 17 コマ

記録作成数 0 件

学術雑誌等への掲載数 0 件

学会、研究会での発表件数 2 件

宮田 繁幸「民俗芸能とイベント」 東京文化財研究所総合研究会

宮田 繁幸「無形の文化財保護における可能性」立命館大学アトリサーチセンター主催のシンポジウム：モーションキャプチャーと舞踏研究

調査・報告書等刊行数 0 件

研究組織

○星野 紘、宮田 繁幸、俵木 悟（以上、芸能部）、小野寺節子（調査員）



近年まで床板の上で踊られていた「廻り踊り」
(徳島県美馬郡半田町)



第 40 回北上みちのく芸能まつり

画像形成技術の開発に関する研究 (①A01-01-1/5)

目 的

近年におけるコンピュータ技術の深化と普及は、文化財に関する画像形成についても、大きな変革を迫っており、このような変革に即応しうる体制の整備と技術開発とは、緊急の課題といってもよい。また文化財研究の諸分野で、デジタル技術を応用した文化財画像の定量的解析法が一般化する一方で、意外なほどに画像形成時における諸条件の整合性は十分に計られていない。本研究ではこのような現況をふまえ、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、1) 光に対する物性の検討、2) 光物性の画像化に関わる技術開発、3) 形成画像の汎用的な活用法(表示・出力)に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成することを目的とする。

概 要

1. 画像形成ルーチーンフルカラー化及びデジタル化

プロジェクトの第一年次であることに鑑み、既存の画像形成ルーチーンをフルカラー化することで器機類・作業手順等の大幅な見直しをはかり、画像の入力(撮影)から処理・出力・管理までの過程全般にデジタル技術を応用し徹底をはかることにした。新ルーチーンによるシステムは、一部、さらに効率化を進める必要もあるが、全体として、これまで以上のきわめて質の高い研究画像を提供し、かつ永続的な保管が可能となった。

2. 光に対する物性の検討

鉍物系顔料・天然有機色料・合成染料・油彩絵具などの文化財に使用される色料が、可視光域から赤外線域におよぶ波長域の光に対して、どのような特性を保有し、どのような論理のもとで、その特性の画像化ができるのかについて、すでに基本的条件の検討を終えた。

3. 光物性の画像化に関わる技術開発

複数の材料が複合的・重層的に混合あるいは重なりあう形で形成されている文化財の表面は、任意の厚みをもった構造体として把握される必要がある。こうした観点から、絵具層の表面から支持体にもっとも近い面までを断層的に撮影する基本的な技術を開発し、実際の調査で応用しつつある。また、あわせてマイクロな観察の結果を画像化する技術として、高精細デジタルカメラによる近接撮影を応用し、これまでの顕微鏡撮影に勝る拡大画像の形成を日常化している。

絵具層の表面→フルカラー撮影、偏光撮影、可視光励起による蛍光撮影、

絵具層と支持体との中間層→反射赤外線撮影(複数のフィルタを使用)

支持体にもっとも近い層→透過赤外線撮影(複数のファイルを使用)

4. 調査作品

油彩: 黒田清輝筆「智・感・情」(東京文化財研究所)ほか5点、板絵着色: 伝与謝蕪村筆「人物図」杉戸絵(茨城・個人蔵)ほか1点、絹本着色: 「水月観音図」(高麗時代、佐賀・鏡神社)ほか4点、絹本墨画: 牧谿筆「羅漢図」(静嘉堂文庫美術館)など。

5. 研究発表

・井手誠之輔、城野誠治 画像形成技術の開発に関する研究 所内総合研究会 2001年7月3日

・井手誠之輔 美術史における研究画像の現在 シンポジウム「人文科学情報とIT」 東京大学総合図書館会議室 2001年11月19日

・井手誠之輔 「智・感・情」の調査に用いた光学的手法について 美術部研究会 2001年11月21日

6. 論文

・井手誠之輔、城野誠治(共同執筆) 美術史における研究画像の現在、『人文社会情報とIT』(全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ no.11) 2001年11月

・城野誠治 光学的手法による可視画像の形成と利用、『第30回文化財保存修復研究協議会—光学的方法の明日—』2002年3月

・城野誠治 近赤外線画像の形成と利用 『美術研究』376号 2002年3月

研究組織

○大塚英明(協力調整官)、井手誠之輔、塩谷純、城野誠治(以上、情報調整室)、山梨絵美子(美術部)

光学的手法による美術工芸品の彩色についての調査研究 (①B09-01-1/5)

目 的

この研究では、画像形成技法の開発に関する研究（情報調整室）、非破壊測定法の改良研究及び新手法の研究（保存科学部）で開発された分析及び画像形成技術を、美術工芸品に適用し、美術史等人文科学の分野を含むより総合的な研究のための基礎を築くことを目標とする。具体的には、X線撮影・エミシオグラフィ・蛍光X線分析・赤外線撮影・蛍光撮影・顕微鏡撮影などの光学的手法を用いて、絵画や彫刻・工芸の彩色顔料の材質・技法を分析し、そこで得られたデータをもとに、美術工芸品が本来どのような表現をもっていたのか、それを実現するためにどのような材料や技術が用いられていたのかなどの問題を追求し、作品が生まれてから現在に至るまで生きてきた歴史を考える。

概 要

1) 国宝「源氏物語絵巻」の調査研究

受託研究を含め、過去3年間行ってきた国宝「源氏物語絵巻」（五島美術館・徳川美術館）の調査研究を継続し、徳川美術館蔵の15面について2回の補充調査を行うとともに、データ解析のための研究会を開催し、平成15年度の報告書刊行を目指して集積したデータの整理を行った。現在までに得られた主な新知見は、以下の通り。

- ①「御法」「宿木（三）」等で目視では確認できない秋草等の図様を画像化し、その表現と材質についてのデータを得ることができた。
- ②「竹河（二）」「早蕨」に描かれた目視では確認できない女房の装束の文様を画像化するとともに、有機色料の使用を想定できた。
- ③白色顔料について、鉛・水銀・カルシウムを主成分とするもの、また大気中の蛍光X線分析では検出できないものの四種があることが判明した。そのうち水銀を主成分とする顔料は、従来知られていなかったものである。
- ④緑色顔料についても従来知られていなかった亜鉛が検出されるものがある。

2) その他、千葉・観音教寺蔵「焰口餓鬼図」、東大寺戒壇院「四天王像」、奈良国立博物館蔵「愛染明王像」について調査を行った。

<関連論文>

三浦定俊 光学的方法の歴史と現在

早川泰弘 ポータブル蛍光X線分析装置の利用

城野誠治 ポリライトを用いた蛍光画像の調査

佐野千絵 蛍光画像の三次元蛍光分析

島尾 新 美術史研究と光学的方法

以上、第30回文化財保存修復研究協議会「光学的方法の明日」報告書 2002年3月

研究組織

○島尾 新、津田 徹英（以上、美術部）、三浦 定俊、早川 泰弘、佐野 千絵（以上、保存科学部）、
城野 誠治（情報調整室）

非破壊測定法の改良研究及び新手法の研究 (①D01-01-1/5)

目 的

文化財の材質や彩色を様々な科学的な手法で調査・解析し、その材料のキャラクタリゼーションを行うための基礎的研究を行う。文化財を構成している無機材料・有機材料に関する新たな調査・測定法の開発およびその適用を目標とし、実験室規模からのダウンサイジングを指向した可搬型機器およびその周辺技術等に関する研究を行う。さらに、これまでに開発されたポータブル蛍光X線分析装置および種々の光学的手法の改良と、これらの手法による無機および有機標準物質のデータ取得、データベース構築・公開を併せて行う。

概 要

今年度は本研究課題の初年度として、1) 従来機器の改良と従来機器による標準物質の測定、2) 新規手法に関するシーズ探索・調査および基礎的実験、3) 研究会開催等によるヒアリングおよびニーズ調査、の3点に重点を置いて研究を実施し、以下の成果を得た。

(1) 改良型のポータブル蛍光X線分析装置として、従来のコリメータを用いたX線照射方式に代わり、モノクロメータによる単色X線照射方式を採用した機器の性能評価を行った。従来機器に比べ、軽元素検出の可能性が高い結果を得た。さらに、バッテリー駆動(AC電源等不要)のハンディー型蛍光X線分析装置の特性評価を行った。重量2kg程度で、操作性には非常に優れるが、安定性・資料像観察・定量計算等の点でさらに検討が必要であることが明らかになった。

(2) 非破壊測定法として化学発光法およびレーザーラマン法について、情報収集を行った。化学発光法については基礎実験を行い、研究会や学会発表を通して成果公開を行った。また研究会を開催し、専門の研究者とともに、各手法の限界について検討した結果、いずれの手法も有機質材料の劣化や材質同定への応用可能性が高いが、未だ基礎実験の途上であり、集中的に基礎実験を行う必要があること、また現場へ応用するためには小型化とともに光軸の安定性の保証など、大きな変更が必要であるとの結論を得た。

(3) 研究会の開催

平成13年6月22日 「文化財の劣化研究へのCL技術の応用可能性」(於：セミナー室、参加者49名)

平成13年12月10日 「非破壊による構造解析の限界」(於：会議室、参加者12名)

学術雑誌等への掲載論文数 1 件

K.Sugihara, K.Tamura, M.Satoh, Y.Hayakawa, Y.Hirao, S.Miura, H.Yotsutsuji, Y.Tokugawa: Analysis of the Pigments Used in the Scroll Paintings of the Tale of Genji, National Treasure, by Portable X-ray Fluorescence Spectrometer, "Advances in X-ray Analysis", 44, pp.432-441, Kluwer Academic / Plenum (2002)

学会研究会等での発表件数 2 件

早川泰弘、三浦定俊、津田徹英：ポータブル蛍光X線分析装置による彫刻の表面彩色の分析、日本分析化学会第50年会(2001年11月 熊本)(ほか1報)

調査・研究報告書等刊行数 0 件

研究組織

○三浦 定俊、早川 泰弘、平尾 良光、石崎 武志、佐野 千絵、木川 りか(以上、保存科学部)

臭化メチル燻蒸代替法の開発に関する研究 (①D02-01-1/3)

目 的

オゾン層の保護のため、かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの全廃時期が2004年末に前倒しとなることが決まり、これに変わる方法が以前にも増して緊急に求められている。世界的にも種々の代替法が検討されるなか、わが国においても薬剤を使用しない方法、薬剤を使用する方法のそれぞれについて今後の使い分けを明確にし、種々の臭化メチル燻蒸代替法の具体的な使用法を確立することが急務である。

概 要

(1) 種々の臭化メチル燻蒸代替法についての基礎研究

当研究所ではかねてより薬剤を使用しない代替法として、低酸素濃度殺虫法、二酸化炭素による殺虫法や低温処理法などについて、具体的な処理仕様案をさらに充実させ、学会等においてその成果を発表してきた。また、種々の代替法のおおまかな使い分けを一覧として整理し、虫害の予防を主とした管理法についての研究成果は「文化財の生物被害防止に関する日常管理の手引き」(文化庁文化財部、平成13年3月)などに公表されている。また、その集大成として、『文化財害虫事典』を編集し公刊した。しかし、今後、緊急性のある大規模な虫害については、場合によっては薬剤を使用する方法についてもその適正な活用法を明確にしていく必要がある。そこで、本年度は現在文化財への使用が検討されている臭化メチル以外のいくつかの燻蒸剤について、性状等の比較検討を行った。

(2) 研究会の開催

平成13年9月18日 テーマ「新規燻蒸剤の効力と性状」(於：会議室、参加者 約50名)

薬剤を使用する方法の検討の一環として、臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会を行った。わが国における化学物質対策の最近の動向や、今後の文化財の害虫防除における燻蒸剤の役割のほか、各メーカーより、フッ化スルフリル、酸化プロピレン燻蒸剤、酸化エチレン製剤、ヨウ化メチルの4種類の代替燻蒸剤についてそれぞれ発表が行われ、積極的な討論を通して、問題点の把握を行う機会を得た。

学術雑誌等への掲載論文数 2 件

Rika Kigawa, Yoshiko Miyazawa, Katsuji Yamano, Sadatoshi Miura, Hidiaki Nochide, Hiroshi Kimura, and Bunshiro Tomita: Practical Methods of Low Oxygen Atmosphere and Carbon Dioxide Treatments for Eradication of Insect Pests in Japan, "Integrated Pest Management for Collections, Proceedings of 2001: Pest Odyssey", pp. 81-88, James and James (2001)

日高真吾、伊達仁美、後出秀聡、木村広、木川りか、三浦定俊：民俗資料等の二酸化炭素による殺虫処理の実例、『文化財保存修復学会誌』46、印刷中、文化財保存修復学会(2002)

学会研究会等での発表件数 2 件

木川りか、宮澤淑子、山野勝次、三浦定俊、後出秀聡、木村広、富田文四郎：低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫—日本の文化財害虫についての実用化(3)—、文化財保存修復学会第23回大会、(2001年6月、金沢)

Takeshi Ishizaki: Experimental Study of the Physical Effects of the Freezing Method for Insect Control on Artefact Materials, 5th International Conference on Biodeterioration of Cultural Property, ICBCP—5, Australian Museum, (Nov.,2001, Sydney)

調査・研究報告書等刊行数 1 件

『文化財害虫事典』(2001年12月)

研究組織

○三浦 定俊、佐野 千絵、木川 りか、山野 勝次、石崎 武志 (以上、保存科学部)

文化財施設の保存環境の研究 (①D03-01-1/5)

目 的

社寺仏閣に納められていた文化財や移築民家などで公開されている資料は、博物館・美術館などで文化財の公開を目的として建設・運営されている単独の施設とは異なる状況で保管・管理されている。このように公開活用の状況が異なっていたり、また施設設備が不十分なため外界の影響を受けやすい環境下で保存されている文化財に対して適切な保存対策を講じるためには、その保存環境を的確に評価できる計測手法を確立する必要がある。また、曳山や曳舟など高さのある大型木製資料の保存など、大空間における大型資料の保存に、従来の研究手法がそのまま適応できないため、大空間の展示環境に関する研究を進めることが必要になってきた。

本研究では、従来保存科学部が行ってきた博物館等文化財公開施設の調査方法の研究成果を基に、より厳しい条件下での保存環境や大型資料の保存環境の調査手法に関する研究を行い、併せて、適切な保存対策の構築に資する。

概 要

本年度は、山車、曳山、曳舟を収蔵展示している博物館の環境、山倉の環境調査を行った（長浜市曳山博物館収蔵庫・山蔵、大阪市住まいのミュージアム展示室、川越市山車保管庫）。長浜市の山倉での温湿度調査から、気密性が高く換気回数の少ない山倉では高さ方向に湿度分布ができていて、下部で湿度が高く上部で湿度が低くなること、一方、換気口が設けられていて換気回数の高い山倉では、上下の湿度差が小さいことが分かった。

また川越市では6カ所の山倉の温湿度を測定した。山倉内部の温湿度は、外気の温湿度変化より著しく小さくなっていた。山倉の構造によっては、年間を通じてほぼ一定の湿度に保たれているものもあった。一方、湿度を高める目的で水バケツを置いている倉もあるが、換気回数の大きい場合はあまり効果が見られなかった。この点に関して、倉内の湿度伝搬に関する3次元シミュレーションにより検討を行った。

研究会 平成13年11月27日「倉の環境、博物館の環境」（於：会議室、参加者20名）

現地調査件数 3 件

長浜市曳山博物館収蔵庫・山蔵、大阪市すまいのミュージアム展示室、川越市山車保管庫

学術雑誌等への掲載論文数 4 件

T. Ishizaki, J. Simunek and M. Th. van Genuchten: Deterioration Mechanism of Stone, Brick and Soil Building Materials, "Proc. Corrosion & Prevention-01, Durability of Materials, 41," pp.1-13, (Nov., 2001, New Castle, Australia) (ほか3報)

学会研究会等での発表件数 5 件

瀧野沢聡子、石崎武志、三浦定俊：日本壁の凍結による劣化機構の研究、文化財保存修復学会第23回大会、(2001年6月、金沢)

石崎武志：土の凍結膨張率、凍上速度と凍結速度、温度勾配の関係、2001年度日本雪氷学会全国大会、(2001年10月、帯広)

Chie SANO: Study on Indoor Air Quality in Japan, "IAP Copenhagen 2001, 4th meeting of the Indoor Air Pollution Working Group", (Nov., 2001, Copenhagen, Denmark) (ほか2報)

調査・研究報告書等刊行数 0 件

研究組織

○三浦 定俊、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘、木川 りか (以上、保存科学部)、孫 喜山 (外国人特別研究員)、秀平 文忠 (曳山博物館)、田中 敦子 (川越市教育委員会)

周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 (①E03-01-1/5)

目 的

温湿度変化や大気中有害物質の移動など周辺環境の影響は、屋外文化財の主な劣化要因のひとつであり早急な対策が求められている。本プロジェクトでは、周辺環境の影響について現地観測による定量的な評価を行うと共に、その影響を軽減するための修復材料、技法に関する評価、開発を行なっている。また、本プロジェクトは韓国文化財研究所と共同研究を行っており、詳細には、両国内の研究サイトにおける成果を持ち寄り評価するかたちで協力を行っている。

概 要

研究対象としては、石造文化財として臼杵磨崖仏群、海浜に立地する木造建造物群として巖島神社、広域に分布する建造物群として日光社寺群を取り上げ、温湿度・日照の時系列変化などの気象計測および修復材料、技法の開発評価を行っている。また、測定項目の絞込み、地方公共団体側担当者に対する観測手法の指導を行うなど、環境影響評価に関する技術の移転にも取り組んでいる。

今年度は、以上に述べた3地域にて現地観測、現地試験を実施し、以下の成果を得た。

a) 磨崖仏群

臼杵磨崖仏群では、次期修復事業のための基礎データ収集を目的として、前年度に引き続き、覆屋内外の温湿度、降水量、岩体表面温度、岩体水分量、湧水量、亀裂変化などの長期連続観測を行っている。また、岩石表面の改質や生物制御のための材料の評価試験も引き続き行っている。さらに、平成13年秋には、磨崖仏周辺のより詳細な気象について把握するため、総合気象観測システムを史跡公園予定地内に導入し、石仏周辺の環境変化における周辺風の影響についても調査をスタートした。

b) 巖島神社

巖島神社では、木造建造物の外装に用いる漆・丹の耐候性向上を目的として材料開発および、それらの劣化原因・機構の解明を行っている。今年度は、漆を原料とした新しい塗料を用いて修復した高舞台について、塗料の劣化状態の観察や温湿度・日照の計測など経過観察を行った。また、丹塗り柱の変色機構解明のために、西回廊柱にて柱内水分量の時系列観測を行った。

c) 日光社寺群

日光社寺群では、広領域の環境監視システムの整備とデータ評価方法の指導・提案を行っている。今年度は、前年度に引き続き、山内全域を対象とした温湿度広域観測および二酸化窒素濃度の広域観測を実施、観測に関する技術指導を行った。

学術雑誌への掲載論文等数 4件

「外装用漆塗装法の耐候性向上に関する試み(2)」(島津ら)、『保存科学』41

「臨海環境における丹塗りの変色に関する研究」(島津ら)、『保存科学』41

「国宝臼杵磨崖仏群次期保存修復計画のための調査研究」(森井ら)、『保存科学』41

「敬天寺石塔試料分析結果」(朽津)、『日韓共同研究報告書』2002/03/29

学会研究会等への発表件数 2件

「国宝・臼杵石仏の保存に関する応用地質学的調査(2)」(朽津)、日本応用地質学会平成13年度研究発表会

「文化財修復研究の問題点と展望」(青木)、韓国保存科学学会、2001/11/17

調査・報告書等刊行数 1件

『日韓共同研究報告書』2002/03/29

研究組織

○青木 繁夫、川野邊 渉、早川 典子、森井 順之、高橋 千恵、島津 美子(以上、修復技術部)、朽津 信明(国際文化財保存修復協力センター)

伝統的修復材料に関する調査研究 (①E06-01-1/5)

目 的

各種の文化財に使用されている伝統的材料は、天然素材をもとに例えば膠と顔料、漆と顔料、繊維と糊などいくつかの材料を組み合わせた複合的な構造をしている。従来、これらの伝統的材料は、制作者や修復家の経験的な技術によって使用されているに過ぎず、各材料の基本的な物性や特性に関する研究はなされていない。本研究は、文化財を構成する伝統的材料の中からとくに修復材料に関して、基本的な物性と特性の統計的な調査を行い、修復材料としての改良と再評価を行い、より作業性の高い修復材料のあり方を解明するものである。なお、本研究では文化財の保存修復に際して使用する代表的な材料である漆、膠、古糊、布海苔を対象として年次を追って進めてゆく。さらに、紙および布におこりやすい foxing (褐色斑点) に関する調査と抑制に関する研究も併せて行う。

概 要

今年度、本研究では焼付漆および古糊を中心に調査研究をおこなった。各研究の経過について次に報告する。

(1) 焼付漆に関しては、耐候性試験を中心とした研究をおこなった。7×15cm の銅板に生漆を焼付けた後、サミラス漆 (商品名; 斉藤 (株)) を塗布した、白、黒、朱、黄、青の 5 色の試料を作成した。漆は一般に紫外線に弱いことが知られている。そこで、今回、使用したサンプルは、漆の特性を活かし、紫外線への強度を増大させた漆類似塗料である。実験は、当研究所の屋上の太陽追尾曝露試験機および伊勢神宮内宮内の特設曝露台で行った。また、研究所実験室では劣化促進試験器 (ウェザーメーターおよびフェードメーター) による試験も併せて行った。実験経過については、伊勢神宮では、設置場所が杜の中ということもあり、日照時間が制限された可能性がある。一方、東文研屋上の曝露システムは周囲に日照を妨げるものがなかったため、十分な日照量が確保できたと推測できた。

以上の日射条件の違いはサンプルの劣化度合いに明確な差をもたらした。ほぼ同期間の設置にも関わらず、東文研屋上曝露のサンプルは赤、黒を含むすべてのサンプルで艶の減少が目視および光沢度測定において確認できた。一方、伊勢神宮曝露サンプルでは白、青、黄はわずかな艶の減少と色味の違いが目視で確認できたが、黒、赤のサンプルでは曝露前との差異はほとんど確認できなかった。

劣化促進試験器による曝露では、とくにウェザーメーターによる照射実験での艶の減少が著しく、フェードメーターによる照射実験では若干の艶の減少が見られるものの大きな変化はないといえる。ウェザーメーターおよびフェードメーターともに、色差変化はほとんど確認できなかった。いずれの条件の曝露においても、青、黄のサンプルの色差変化、光沢度の減少が短期間で確認でき、今回の実験では一般に、青と黄の劣化が早いといえる。

(2) 古糊についての研究は、文化財装潢に使用する糊を対象に行った。古糊は小麦粉デンプン糊を原料として、十年前後発酵させて得られる低接着性の糊であり、pH 値も低い。今年度は、発酵条件の異なる古糊をサンプリングし、分子量分布測定や有機酸分析を行った。その結果、古糊は原料である生麩糊にくらべて分子量が数十分の一に落ちていること、この傾向は発酵条件が異なっても観察されること、原料のデンプンの分解物と思われる有機酸が検出されることなどが明らかになった。これらのことは、デンプンの生物分解により、古糊が生成されることを強く示唆している。今後は、古糊の接着性の評価や、生成過程の調査などを行う予定である。

学術雑誌への掲載論文数 2 件

「古糊の物性と化学組成に関する基礎的研究」(早川ら)、『保存科学』41

「伝統的焼付漆の応用的研究—蒔絵プラークの復元—」(堀ら)、『保存科学』41

学会研究会等での発表件数 1 件

「装潢における漆塗り」(加藤)、国宝修理装潢師連盟定期研修会、2001/11/15

研究組織

○加藤 寛、川野辺 渉、早川 典子、森井 順之 (以上、修復技術部)

レーザーによる文化財クリーニング法の開発研究 (①E07-01-1/5)

目 的

文化財には様々な汚れが付着している。これらの汚れの中には古色といわれて美的に評価され、文化財を保護する汚れも存在するが、建造物などの汚れのように不快で劣化の原因になる汚れも存在する。後者のような汚れにレーザーを使用して文化財に損傷を与えずに、しかもその作業によって周辺環境を悪化させないようなクリーニング技術の開発を目的としている。

概 要

文化財のレーザークリーニングの実験に使用しているレーザーは、クラス4のNd YAGレーザーである。このレーザーは赤外線領域の $1.06\mu\text{m}$ レーザー波長を発信する。Qスイッチ発振、平均出力値0.5ジュールである。

各出力やクリーニング対象物の汚れの種類や色の違いあるいはレーザー照射の焦点距離の違いによるクリーニング効果の差異などについて基礎的な研究を行っている。実際に品物では、木彫仏などの接着などに使用されている麦漆のクリーニング試験を試みている。麦漆は、硬化すると有機溶剤や薬品に極めて溶解しにくい特徴を持っていて接着した部分の解体は彫刻刀などを用いて機械的に除去していたが、レーザーを使用することによって損傷を少なくして除去することが可能であることが分かった。

研究組織

○青木 繁夫、森井 順之 (以上、修復技術部)



レーザーによる麦漆のクリーニング実験

焼損文化財の保存修復に関する研究 (①E08-01-1/2)

目 的

火災による文化財の消失は、法隆寺金堂や鹿苑寺金閣など貴重な歴史遺産の消滅を物語る。人類にとってかけがえない文化財が火災にあって消滅するほど悲しい出来事はない。とくに木材を素材として作り上げられた木質文化財や紙、布などの作品は、火災後の早期の処理により全てを失うことがさけられると考えられる。本研究は、焼損を受けた木質文化財をどのような処理で保存し、後世へ伝えてゆくことができるかの実験を重ねて進めてゆく。

概 要

焼損を受けた木質文化財は、表面が炭化して非常にもろく、移動などで手を触れられる状態ではない。そのために表面からの合成樹脂含浸により必要十分な強度を与えることができる。本研究では、従来行われている漆を使用した強化法のほかに、文化財表面を破損することなく、効率良く内部へ合成樹脂を含浸させ表面強化をはかるための樹脂の選定、含浸方法の検討などを行った。

含浸樹脂の選定は、市販されているアクリルエマルジョン、アクリル樹脂、ポリエチレングリコール、ウレタン樹脂エポキシ樹脂などを対象にして行った。さらに、樹脂濃度の設定を行うために樹脂と溶剤の関係も新たに調査しながら、炭化した表面への含浸強化の試験を行った。さらに、含浸方法については、従来行ってきた刷毛による樹脂の塗布以外に、減圧含浸を実験に採用しどの条件下での浸透方法が効果的であるかを調査した。なお、今後の実験については、炭化試験片を耐圧装置の中へ含浸樹脂溶液に入れ、液体窒素のトラップから真空ポンプへ引き出す減圧含浸を考えている。

研究組織

○川野辺 渉、板垣 義郎 (以上、修復技術部)



焼損木材の断面：内部まで亀裂が入っている



焼損文化財より脱落した炭化片

近代の文化遺産の保存修復に関する研究 (①E01-01-1/5)

目 的

近代の文化遺産は、従来の文化財とは、その規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるために、保存修復方法や材料に大きな違いがある。近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型煉瓦構造物の劣化機構の究明とその修復方法立案、航空機、船舶など大型機械類の修復保存上の問題点とその解決方法の究明などを目的としている。

概 要

大型の機械類のうち、今年度は、近代の文化遺産の保存修復研究会では、大型の金属船の保存修復を主題として、ヨーロッパの専門家から先進例の報告と国内の博物館などから保存修復上の問題点などに関して、多くの報告を頂き、今後船舶の保存修復を進める上で非常に貴重な経験をつむことができた。昨年度の成果とあわせて、これらの結果を「未来につなぐ人類の技2 船舶の保存と修復」としてまとめ刊行した。大型機械類の保存では、横須賀市に所在する重要文化財0.5t スチームハンマーと、同様の履歴を有する3t スチームハンマーの保存修復についてドイツ技術博物館の専門家の助けを受けながら、指導・助言を行い、大型機械類の保存修復の実例として貴重な経験をつむことができた。航空機の保存では、かかみがはら航空宇宙博物館の屋外展示機のうち、YS-11、US-1A、船の科学館の二式大艇の三機に、温湿度計や照度計を設置して屋外展示の環境の測定を行った。この結果を保存環境改善の基礎データとしたい。また、戦前からの日本航空業界の写真や書類など多くの貴重な資料の保存方法について日本航空協会との共同研究を通じて貴重な経験をつむことができた。

研究会の開催件数 2件

航空機資料保存研究会 (第1回: 2001/8/6 参加者 15名、第2回: 2002/2/28 参加者 8名)

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会「船舶の保存・修復についてII」(2001/10/16 参加者 50名)

学会研究会等での発表件数 2件

「文化財保存を目的とした煉瓦の樹脂処理効果に関する研究 ―重要文化財旧下野煉化製造会社煉瓦窯における試み―」(早川、朽津)、日本文化財科学会第18回大会

“Seasonal changes in salt efflorescence and brick damage at Shimoren Kiln, Japan Fifth International Conference on Geomorphology” (Kuchitsu et al)

調査・研究報告書等刊行数 1件

「未来につなぐ人類の技2 船舶の保存と修復」

研究組織

○川野邊 渉、早川 典子、森井 順之、高橋 千恵 (以上、修復技術部)、朽津 信明 (国際文化財保存修復協力センター)



日本丸で調査を行う研究会の参加者



翼を外すための専用工具：航空機のメンテナンスには、それぞれの機種に特有の各種工具が必要である。これらの工具を含めて保存することがこれらの機体を保存していく上で重要である。

文化財保存に関する国際情報の収集及び研究
—ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例— (①F01-01-1/5)

目 的

本プロジェクトは、海外の文化財および文化財保存の現状、特に文化財保護に関わる各国の法律や文化財保存事業を行っている機関など、文化財保護制度についての情報を、協力を行う側と受ける側それぞれについて広く収集整理し、相互に比較して特徴を明らかにすることを目的とする。この5年間では、文化財保存に関わる法体系、組織などがよく整備されているヨーロッパ諸国を対象とし、2001年度はドイツに関する調査研究を実施した。

成 果

ドイツにある16の州のうち、特に文化財保護制度が整備されているノルトラインヴェストファーレン州およびヘッセン州を対象として、文化財保護制度についての現地調査を行った。文化財保護関連法令の内容や、それらの制度の文化財保護への反映について、上記2州の文化財保護に携わる専門家に対して聞き取り調査を実施した。同時に、文化財建造物、歴史地区、考古学的な遺跡について、保護と活用の現場を視察した。また、文化財保護関連の法令や文化財保護行政に関する資料の収集を日本及びドイツで実施した。

ここでは特に指定制度について述べる。これらの州では博物館収蔵品などの動産文化財に対しては指定・保護制度はほとんど存在しないので、ほとんどが建造物や考古学的な遺跡などに関する制度である。歴史地区保存のための制度は、直接文化財の保護を目的とはしていないが、結果的に歴史的建造物の極端な改変を防止している。建造物を文化財として指定するには所有者の許諾は不要で、文化財に指定された建造物の改築を実施する際には、地方自治体の建設関係および文化財関係部署の許可が必要である。文化財建造物の修理費用には地方自治体の税制面での優遇措置があるが、文化財保護はその活用と関連づけて考えられており、居住性・利便性を上げるための改造費用も優遇措置の対象となりうる。このような優遇措置は、上記2州において建造物の保存に役立っている。

ドイツは連邦制をとっており、州の独立性が高い。文化財保護に関する連邦法は、文化財の輸出入に関する法令を除いて、ほとんどの法令は州ごとに独自に定められている。各州の法令は基本的な枠組みは相互に似かよってはいるが、細部については異なっており、上記2州の法令の具体的な内容をそのままドイツ全土の状況としてとらえることはできない。

研究組織

○岡田 健、二神 葉子、斎藤 英俊、西浦 忠輝、松本 修自、朽津 信明、井上 敏、秋山 純子
(以上、国際文化財保存修復協力センター)



ヘッセン州文化財局での聞き取り調査



19世紀末の発電所を利用したイベントホール

文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査・研究 (①F02-01-1/5)

目 的

近年急速に劣化が進んでいる国内外に所在するレンガ造文化財の保存、修復に資するため、レンガの劣化現象と保存対策についての調査、研究により、有効な保存対策を開発し、国内外のレンガ造文化財の保存技術の向上に貢献することを目的とする。

成 果

レンガの塩類風化と吸水率の変化に関する実験的研究を行っている。硫酸ソーダ水溶液浸漬←→乾燥を繰り返して強制劣化させたレンガの吸水率を測定する方法によるが、レンガ内部に入り込んだ硫酸ソーダ結晶の水への溶出速度はかなり遅いため実験には長時間を要する。試験片を小さくするなどの工夫により、システムティックな測定を進めている。

実際のレンガ造文化財については、まず国内においては、碓氷峠関連鉄道施設におけるレンガの劣化状況を観察し、その原因を考察した。同施設には、レンガ製の橋梁やトンネルが存在するが、そのいずれにおいても、レンガが傷んでいる様子が各所に観察される。特に冬季においては、トンネル内の湧水が凍結しているのが顕著に観察され(図1)、また表面には塩類の析出が観察される。つまり、石造文化財の主要な劣化原因である塩類と凍結の問題が同時に起きている状況と考えられ、両者の破壊力や劣化への関与の仕方の違いや、相互作用の有無などについて、適切な観察現場と考え、継続して調査を行っている。

一方海外においては、タイのアユタヤ遺跡において、塩類風化の著しい歴史的建造物を模し、その縮小模型(図2)をレンガで作製して観察を続けている。一年以上が経過し、表面を撥水剤で処理した方には目立った変化が見られないのに対して、処理していない方の表面が現在は顕著に黒ずんできており、樹脂処理の効果によって水の浸透が防がれている可能性が考えられる。建造物への水の浸透を防ぐことができれば、塩類風化は軽減されると考えられ、また現在までのところ処理した側には処理に伴う弊害は全く観察されないことから、実際の歴史的建造物についても同様に表面を撥水处理することにより、塩類風化を軽減できる可能性が期待される。

研究組織

○西浦 忠輝、朽津 信明、斎藤 英俊、二神 葉子、友田 正彦(以上、国際文化財保存修復協力センター)、石崎 武志(保存科学部)、大石不二夫(神奈川大学)



図1. 凍結したレンガ
(碓氷第6トンネル側壁)



図2. 縮小模型
(手前が樹脂処理あり)

国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
文化財の保存修復に関する国際共同研究 (F03)	国際文化財保存修復 協力センター	55
敦煌莫高窟壁画の保存修復研究 (E02)	修復技術部	56
龍門石窟の保存修復に関する調査研究 (F04)	国際文化財保存修復 協力センター	57
中南米諸国文化財保存協力事業 (F05)	国際文化財保存修復 協力センター	58
在外日本古美術品保存修復協力事業 (E05)	修復技術部	59
アジア文化財保存セミナーの実施 (F06)	国際文化財保存修復 協力センター	60
文化財保護に関する日独学术交流 (D04)	保存科学部	61
スミソニアン機構との国際研究交流 (D05)	保存科学部	62
エルミタージュ美術館・ベルン歴史博物館所蔵日本美術品調査 (B)	美術部	63
中国文物研究所との覚え書き締結 (F)	国際文化財保存修復 協力センター	64

文化財の保存修復に関する国際共同研究

東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究 (F03-01-1/5)

目 的

タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム等東南アジア諸国の遺跡の保存技術の向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とするもので、タイ国の芸術総局との共同研究、および、カンボジア国のAPSARA(カンボジア政府アンコール・シェムリアップ地域保護管理機構)との共同研究を行っている。

成 果

カンボジアのアンコール遺跡群の保存修復プロジェクトについては、現地調査とAPSARAとの協議を続けてきたが、2001年12月に覚書を取り交し、正式にスタートした。アンコール遺跡群のタ・ネイ(Ta Nei)遺跡を研究サイトとして「特に劣化の著しい部位の特殊環境の計測と解析」および「外観が著しく変化した石彫レリーフのクリーニングと保護処置」を行うもので、併せてタ・ネイ遺跡で行われる研修コースにも協力している。覚書の交換を受けて、早速、当地に無電源連続環境計測システムを設置し、計測を開始した。測定項目は、温度、湿度、日照強度、雨量、風向、風速と遺跡建造物の屋根部分および壁部分の内部1～3cmの温度である。1時間毎に測定を行い、データを蓄積している。2001年3月には、現地で石材表面のクリーニングの実験を開始した。遺跡の石材は、その多くが、表面に苔類、藻類、地衣類が着生し、また自然風化による変色が著しい。そこで、ジェルクリーニングパック法によるクリーニングのテストを行っている。今後、クリーニング後のシリコン樹脂含浸による強化防水処置についてもAPSARAの若手研究者と共同で研究を進めていく予定である。

日・タイ共同研究の成果を中心に関連の研究成果を発表し討論を行うための第2回日・タイ共同研究セミナー(Second Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand)をバンコクで開催した。日本側研究者による発表は下記の7件である。

H. Noguchi; Remarks on the Conservation of Monuments in Thailand through International Collaboration

H. Saito; Preservation of Historic Districts in Japan

T. Ishizaki, T. Nishiura, Jiri S. and M. Th. van Genuchten; Study on the Water Regime of Giant Buddha at Wat Sri Chum, Sukhothai after Conservation Treatment

T. Nishiura, T. Ishizaki, Chiraporn A.; Study on the Effect of a Shelter, by using Model Structure, for the Conservation of Giant Buddha at Wat Sri Chum, Sukhothai

N. Kuchitsu, and T. Nishiura; Countermeasures to Salt Weathering of Bricks - In Japan and in Ayutthaya, Thailand

Y. Futagami and T. Kumamoto; Application of Geographic Information System for Conservation of Historic Monuments Case Study and Current Problems at NRICPT

T. Nishiura, M. Masui and T. Ebisawa; New Conservation Method for Stone Remains Applying Traditional Mud-wall Technique; Conservation Treatment of Remains at Ranigat Site, Gandhara, Pakistan

研究組織

西浦 忠輝、斎藤 英俊、二神 葉子、朽津 信明、松本 修自、野口 英雄、友田 正彦(以上、国際文化財保存修復協力センター)、石崎 武志(保存科学部)

敦煌莫高窟壁画の保存修復研究 日中共同研究 (E02-01-1/5)

目 的

敦煌莫高窟の保存と修復技術の開発を目的として共同研究を行っている。53 窟を実験フィールドとして壁画修復履歴管理システム、壁画剥落止め材料の開発、修復用語集の編集などの研究を進めている。

概 要

壁画修復履歴管理システムは、デジタルカメラで撮影した放射投影画像を正射投影画像に変換して、その画像の上に GIS システムを用いて壁画の損傷状態や修復範囲などを記録し、他の文字情報などの属性を記録していくシステムである。中国語版のシステムが完成し、敦煌において試験運用を行うと共に保護研究所のスタッフに対して研修会を行った。さらに研究に来日した敦煌研究院保護研究所の職員のさらなる研修を行うとともに操作マニュアルの編集校正を行った。

昨年実施した粘土の吸水性実験の結果、粘土を主体として造られた壁画壁の保存には粘土中の水分移動について注目する必要があることが分かってきた。従来は、合成樹脂系の材料を使用して修復することを試みてきたが、膠などの天然系樹脂の検討することを開始した。日本製膠、ゼラチン、中国製膠、ゼラチンやウサギ膠などの表面張力、粘度、接着力などの基本的物性の研究を開始した。

研究組織

青木 繁夫（修復技術部） 中野 照男、勝木言一郎（以上、美術部） 井手誠之輔、城野 誠治（以上、情報調整室）、岡田 健（国際文化財保存修復協力センター）

学会・研究会等での発表件数 1 件

「デジタルオルソを用いた壁画修復履歴システムについて」(青木ら) 文化財保存修復学会第 23 回大会

調査・研究報告書等刊行件数 2 件

「敦煌莫高窟壁画の保存修復研究報告」

「日中壁画修復用語集」



壁画修復履歴管理システムの操作研修

龍門石窟の保存修復に関する調査研究 中国文化財保存修復に関する調査研究 (F04-01-1/5)

目 的

龍門石窟は河南省洛陽の南13km、伊水の東西両岸に対峙する石灰岩の岩山に開かれた仏教石窟寺院である。北魏の孝文帝による洛陽遷都（494年）に前後する頃に最初の造仏が行われ、6世紀初頭に盛期を迎えた。さらに7世紀半ば頃から8世紀にかけて、奉先寺大仏に代表される唐代造像の展開を見た。北魏から宋代時代までに2千余の大小仏龕が開かれ、仏像の数は10万体にのぼるといわれる。また造像銘記約2,800が現存しており書法芸術の宝庫としても知られている。しかし、この岩山はもともと無数の断層が走り、石質も場所によって精粗の差があり、長年の風雪、断層を通して洞窟内へ滲出してくる水などの厳しい自然環境によって、さまざまな傷みが生じている。加えて近年は、酸性雨の発生によって風化の進行は一層深刻な問題となっている。

当研究所は、すでに数年来龍門石窟研究所から保存修復担当者の養成についての協力要請を受けていたが、それとは別に、2001年度からユネスコ文化遺産保存日本信託基金による龍門石窟保存修復事業が始められることになり、そのコンサルタントとしての役割が求められることになった。このような状況のもとに、龍門石窟研究所との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成など、多角的で実効的な成果をあげようとするのが、本研究の目的である。

成 果

人材養成

龍門石窟研究所から毎年1名、保護研究室の研究員を受け入れ、研修を実施することになったが、その最初の人員として2000年11月から財団法人文化財保護振興財団の助成を受けて研修を行っていた馬朝龍氏が、10カ月の日程を終了し2001年9月に帰国した。研修の成果を龍門石窟の現場で活かすとともに、当研究所とのパイプ役としても今後の活躍が期待されている。これに続けて、本年度は国際協力事業団（JICA）の助成を受けた高東亮氏が、12月から9カ月間の研修に入った。神奈川県鎌倉市の丘陵部に現存する鎌倉時代から南北朝時代の洞窟、通称“やぐら”を対象に、洞窟内の温湿度の変化と窟内壁面の風化・劣化の関係について、という具体的な研究テーマを設定して、研修を進めている。

ユネスコ文化遺産保存日本信託基金

日本政府からのユネスコ文化遺産保存信託基金による事業として、2001年度から5カ年の予定で、龍門石窟保存修復事業が開始された。これは、ユネスコ、中国国家文物局、日本政府の共同によって推進されるもので、当研究所はその日本側のコンサルタントとして参加している。11月10日には、龍門石窟奉先寺洞においてユネスコと中国国家文物局による契約の調印式が挙行された。当研究所は2001年12月31日の日付をもって正式に第1年度分のユネスコとのコンサルタント契約を結んだが、すでに着々と5カ年の具体的な年次内容とその予算配分について、龍門石窟研究所、国家文物局に委嘱された中国側の専門家グループ、そして河南省及び洛陽市の文物局の担当者と意見を交換し、ユネスコ北京事務所と共同で最終的な作業計画を決定した。この作業計画に基づき、2002年春から、現地では測量調査、地質調査が開始され、6月には当研究所と龍門石窟研究所によって試験洞窟等への観測機器の設置が行われる予定である。なお、各種観測のデータをより有効なものとするため、当研究所では独自に財団法人文化財保護振興財団に助成を要請し、赤外線デジタルカメラ、定時観測カメラ等の機器類を購入し、6月の現地設置を目標に機械の調整を行った。

研究組織

岡田 健、西浦 忠輝、斎藤 英俊、朽津 信明、二神 葉子（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、中野 照男（美術部）、津田 豊（株ジオレスト）、中田 英史（株文化財保存計画協会）

パナマ歴史地区保存修復協力事業 中南米諸国文化財保存協力事業 第1期 (F05-01-1/5)

目 的

中南米諸国には、マヤ文明やアステカ文明の遺跡やスペイン植民地時代の中世都市など、世界的にみて価値の高い文化財が多く残されている。一方、これらの国々の遺跡や歴史的建造物は、木造・石造・レンガ造などであり、それらの多くは虫害、風化、劣化などによって文化財的価値が失われる危機に瀕している。東京文化財研究所は、これまでは主にアジアの文化遺産を中心に国際協力を実施し成果をあげているが、パナマ政府からの協力以来を契機に、中南米諸国との研究協力を推進しようとするものである。

中南米諸国の専門家と協力して文化財保存修復に関して研究を行うことは、研究所のこれまでとは異なった地域における経験を豊富にし、研究の進展と普遍化に役立つとともに、相手国の専門家養成と専門知識及び技術の移転に関して効果的な国際貢献ができると期待される。

協力事業の対象となっているパナマ市歴史地区カスコ・アンティグオは17世紀末期に形成されたもので、三本の東西道路を軸とした碁盤目状の街区には、19世紀初期の独立以前のものを含めた数百の伝統的建築が並び立ち、多様な中にも統一感のある歴史的価値の高い地区であり、世界文化遺産として登録されている。

成 果

1)木造建築修復計画の策定：歴史地区カスコ・アンティグオの旧市壁の西に隣接する街区にある政府所有の2棟の木造建築について、修復・活用基本計画を作成した。

2)パナマ人専門家の招聘：パナマの文化財保存専門家2名を、2001年7月に10日間の日程で招聘した。関西と東北地方7カ所の重要文化財建造物の修理現場を案内し、日本の保存修復の理念と方法の実際を理解してもらい、また、法隆寺・桂離宮等重要な歴史的建造物の見学を通じて、日本の建築文化の特質を知ってもらうよう努めた。招聘専門家も日本の修復理念・方法の長所を十分に認識かつ賞賛し、またそれらがパナマの木造建築にも適用し得るという双方の共通認識を得ることができた。

3)教会石造ファサード修理計画の策定：協力の対象となっているメルセーデ教会の石造ファサードは劣化が著しい。石造ファサードの破損状況調査を行い、修理仕様書を作成した。

4)パナマ文化庁との研究交流合意書の締結：両国の協力事業をより円滑かつ広汎なものとするために、研究交流の合意書を2002年2月に取り交わした。合意書は文化遺産の保存・修復・管理に関して、研究交流および技術移転の大枠を定めたものにとどめ、個別事業実現の際には個々に覚書を交わして実施することとした。またパナマ側専門家を日本において研修する事項も盛り込まれ、これについては次年度から実施する予定である。

研究組織

斎藤 英俊、西浦 忠輝、松本 修自、野口 英雄、宗田 好史（以上、国際文化財保存修復協力センター）、
苅谷 勇雅（文化庁）

在外日本古美術品保存修復協力事業（ E05-01 ）

目 的

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と協力して、保存修復に関連する研究を行う事業である。1991（平成3）年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、1997（平成9）年度から工芸品など欧米の修復技術で修理の困難な分野にも協力対象を拡げた。

この事業により修復した作品の公開によってわが国の修復技術に対する理解が深まり、修復技術の交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米に出張し、作品調査のほか修復技術について所蔵博物館と討議し、併せて輸送の手続きについても協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理、保存し、輸送手続きに責任を持って当たっている。

この修復協力事業によって修理された作品の公開が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する感心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間で協力関係を結ぶネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門科の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し、大きな役割を果たしている。

概 要

平成13年度は、継続修理を含む絵画7件、工芸品4件を修復した。絵画では、2年連続でネルソンアトキンス美術館所蔵の海北友松筆の「琴棋書画図屏風」の修復が始まった。また、ミネヤポリス美術館所蔵の伝狩野山楽筆「四季耕作図屏風」の修復では、現在の屏風装から当初の襖へ戻す復元も行われている。工芸品では、メトロポリタン美術館から輸入した刀剣類75口の修復が終了、今年度をもって同美術館の刀剣修復が終了した。アシュモリアン美術館の「風景蒔絵ナイフボックス」は、クリーニング、螺鈿の剥落止め、塗膜の剥落止めおよび復元、塗膜の強化など全ての工程を無事終了した。なお、ハンブルグ工芸美術館およびアシュモリアン美術館の作品には特性の保存箱を作成し、現地の低湿度の状態から作品を安全に保護することに努力した。

平成13年度、修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。また、この事業の企画と庶務を管理部が、また修復に関する調査および修復業務を修復技術部と美術部が、写真記録の作成および整理業務を情報調整室がそれぞれ担当した。

今年度、平成13年8月22～30日にかけて修復対象の工芸品候補選定のための事前調査をデンマーク国立博物館（コペンハーゲン）およびリンデン美術館（シュツツガルト）で行った。また、平成14年3月11日から絵画修復作品の候補選定のための事前調査をサンフランシスコ東洋美術館、シアトル美術館、ホノルル美術館でおこなった。

研究組織

青木 繁夫、加藤 寛（以上、修復技術部）中野 照男、鈴木 廣之（以上、美術部）大塚 英明、井手誠之輔、塩谷 純、城野 誠治（以上、協力調整官、情報調整室）斎藤 英俊、岡田 健（以上、国際文化財保存修復協力センター）岡本 親宣、臼井 国明、川柳 成巳、山岸 智幸（以上、管理部）

調査・研究報告書等刊行数 1件

在外日本古美術品保存修復協力事業（工芸品／絵画）

アジア文化財保存セミナーの実施（ F06-01-1/5 ）

アジア文化財保存セミナーは、アジアの文化財保存に関する種々の問題について報告と協議を行い、日本及びアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的として開催されている会議である。本年度からは、5カ年計画で、アジアの各地域における文化遺産保護の制度とその運用についての調査研究を行い、各国の文化遺産保護制度についての認識を広く共通のものとし、保護のための有効な理念の確立と、より強固な協力関係の構築をめざそうとしている。第10回となる本年度のアジア文化財保存セミナーは、次のような日程と内容で実施された。

第10回アジア文化財保存セミナー

趣 旨

文化遺産（文化財）の生成と伝存のありかたは、それぞれの地域によって千差万別の特徴を有するが、保護制度は自ら文化遺産の特徴を反映し、国ごとに特徴ある形態をとっている。また、保護制度が国家という枠組みにおいて構築される以上、それは必然的に個々の国家意識を強く反映したものとなる。第1年目は、各国の文化遺産保護制度について、制度の骨格となる法律の条文が意味する内容、機能、そして制度が構築された歴史などの比較検討を行い、それぞれの特徴を明らかにする。この作業を通して、各国、各地域の現在の状況、段階を共通の認識とし、今後の議論の基盤とする。

- 1．法律の内容と文化遺産（文化財）の枠組み、種類
- 2．保護制度の歴史
 - 1）文化財の歴史
 - 2）保護法の歴史
 - 3）保護の歴史

テーマ：各国の文化遺産保護制度 その国際比較

日 時：2002（平成14）年3月18日～3月22日

会 場：東京文化財研究所 会議室

出席者数：15名

内 容

3月18日 セミナー（東京文化財研究所）

10:30 開会式

主催者挨拶 東京文化財研究所 渡邊明義

11:00～11:40 趣旨説明 東京文化財研究所 岡田健

13:30～14:30 「韓国の文化財の管理と政策」 梨花女子大学校 姜友邦

14:40～15:40 「1949年以降の中国本土における文化財建造物の保存のための法令」 清華大学 呂舟

16:00～17:00 「ベトナムにおける文化財保護法制」 文化情報省保存博物館局 グエン・クォック・フン

3月19日 セミナー（東京文化財研究所）

10:30～11:30 「フィリピンにおける文化遺産の役割の展開」 国立歴史研究所 エメリタ・V・アルモサーラ

13:30～14:30 東京文化財研究所内視察ツアー

14:40～15:40 「スリランカにおける文化遺産 保護・歴史・方法及び理論」 ケラニア大学 ジャガット・ウェラーシンハ

16:00～17:00 「イランにおける文化財保護の概観」 イラン文化財機構 アデル・ファランギ・シャベスタリ

3月20日 セミナー（東京文化財研究所）

10:30～11:30 「タイにおける文化遺産の保存（過去・現在・未来）」タイ国芸術総局 ロナリット・ダナコセズ

13:30～14:30 「日本の文化財保護の歴史と文化財の概念」 東京文化財研究所 斎藤英俊

14:40～15:40 「インドの文化政策と21世紀に向けての可能性」 ワールドモニュメントファンド アミタ・ベイ

3月21日 現地見学（栃木県日光：旧田母沢御用邸、東照宮、輪王寺、二荒山神社）

3月22日

10:30～16:30 全体会議（東京文化財研究所）

16:30 閉会式

文化財保護に関する日独学术交流（ D04-01-1/5 ）

目 的

日独間では昭和 49（1974）年に科学技術に関する学术交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学术交流が行われてきたが、平成 2（1990）年第 13 回日独科学技術合同交流委員会で「文化財保護に関する日独学术交流」の独側提案があり、平成 4（1992）年から交流が開始された。本研究は日独両国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。日本側では東京文化財研究所が、ドイツ側ではミュンヘンのバイエルン州立文化財研究所が、それぞれ事務局となり、建造物の保護に関する学术交流は、ドイツ側ではヘッセン州文化財保護局が中心となっている。

概 要

平成 13 年 8 月 3-4 日にバイエルン州立文化財研究所で「日本とドイツにおける歴史的彩色」の共同研究会（研究発表数 16、参加者数約 80 名）。また平成 13 年 12 月 1 日に東京文化財研究所で「彩色文化財に関する日独共同研究会」を開催した（研究発表数 8、参加者 80 名）。また訪独時にバイエルン州立文化財研究所の共同研究者とともにドイツ連邦政府を訪問し、今後の共同研究の進め方について協議した。その他、日本の彩色文化財に関する論文翻訳を行い、共同研究報告書（平成 14 年度刊行予定）の出版準備を行った。

専門家等の派遣人数 1 名

研究組織

三浦 定俊、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘（以上、保存科学部）、渡邊 明義（所長）、津田 徹英（美術部）、加藤 寛（修復技術部）、斎藤 英俊、岡田 健、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）、沢田 正昭（奈良文化財研究所）



バイエルン州立文化財研究所での共同研究会

スミソニアン研究機構との国際研究交流（ D05-01-1/5 ）

目 的

アメリカのスミソニアン研究機構は、フリア・サックラー美術館のように東洋の美術品を集めた美術館や文化財の科学的研究を行っている保存分析研究所など様々な博物館、美術館、研究所を持つ、世界最大の文化財研究機関である。その研究者と文化庁の博物館・研究所の研究者が、文化財保存に関する共同研究を行うことを目的とする。

概 要

昭和 63 年（1988 年）5 月に文化庁大崎仁長官とスミソニアン研究機構アダムス長官（いずれも当時）が合意し、東京国立文化財研究所を中心に共同研究を開始した。平成 13 年度は当初、フリア・サックラー美術館で 9 月末に開催された 50 周年記念シンポジウム「アジア美術と科学研究」に参加する予定であったが、9 月 11 日に起きた同時多発テロのために参加を取りやめ、3 月にフリア美術館のウィンター氏が来日した折りに、彩色材料の分析について討議し情報交換を行った。これまで交流を行ってきた主要な研究機関の一つである Smithsonian Center for Material Research and Education が閉鎖されるために、今後、研究交流の対象をアメリカ、カナダの文化財研究機関に拡張することが検討された。

専門家等の受入人数 1 名

研究組織

○三浦 定俊、平尾 良光、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘、木川 りか（以上、保存科学部）、沢田 正昭、巽 淳一郎、肥塚 隆保、村上 隆（以上、奈良文化財研究所）



フリア美術館のウィンター氏との研究討議

エルミタージュ美術館・ベルン歴史博物館所蔵日本美術品調査（ B ）

近年、日本美術品を所蔵する外国の美術館・博物館から、さまざまなルートを通じて、作品の調査と評価、展示コーナーの開設あるいは充実、さらには保存修復処置、保存修復担当者の養成など、多岐にわたる内容での協力要請が寄せられている。本調査は、その要請にこたえ、所蔵作品の悉皆調査を実施して、修復や展示に関する有効な助言を行い、各国の人々の日本美術、日本文化理解に貢献することを目的とする。本年の調査は前年からの継続事業として行われた。

エルミタージュ美術館での調査は2001年9月17日から10月5日までの日程で行われ、同館が所蔵する日本美術品のうち、絵画、漆工芸品、浮世絵について調査を行った。この調査は、外務省の依頼により、国際交流基金の派遣事業として、昨年に引き続き行われたものである。エルミタージュ美術館は絹本、紙を支持体とする日本絵画の修復および修復家の育成を望んでおり、今回は、同館日本美術品担当学芸員ボゴリユーボフ氏および紙の修復担当者シュシュコーヴァ女史と共同で、修復の対象となる絵画の選定、また、他の日本美術品の美術史的位置付け、保存状態を調査した。

調査班の構成は以下のとおりである。

日本絵画：東京文化財研究所美術部 津田徹英・山梨絵美子

浮世絵： 神奈川県立歴史博物館 桑山童奈

漆工芸品：国立歴史民俗学博物館 日高薫

光学的調査・撮影： 東京文化財研究所情報調整室 城野誠治

10月5日、エルミタージュ美術館副館長ピリンバホフ氏、学芸部長ベルシャコフ氏、東洋部長デシュパンデ女史、川勝総領事、高橋副領事、東文研山梨・津田・城野が出席して行われた成果報告会では、修復対象として選定された日本絵画7点についての詳細な状態の報告書（和・英）、浮世絵160点、漆工芸品136点の調査報告書（和・英）および作品リストとそのデジタル・データファイル、漆工芸品の35ミリ写真、日本絵画・浮世絵のデジタルカラーイメージおよび赤外線撮影データのCD-ROMおよびインデックスファイルの打ち出しを提出した。エルミタージュ側からは今回の調査の成果を評価し、今後も日本美術品の調査・修復事業を継続したい旨が述べられ、ピリンバホフ副館長と川勝総領事とのあいだで、今回の調査成果の報告および今後3年のうちに日本絵画の修復を実現させる旨を記したメモランダムを交わすことが確認された。また、この成果およびメモランダムについて、10月8日にピアトロフスキ館長に報告する会を川勝総領事とともに持つことが約束された。

また、この滞在期間中、サンクトペテルブルグで日本文化財を所蔵する諸機関の研究者によって構成される白菊会が開催され、東京文化財研究所で現在行われている光学的調査方法の紹介が、山梨、津田によってなされた（9月25日15:00-17:30、ネフスキー通り、日本センターセミナー室）。ロシア側約30名、日本側約10名の出席があり、研究会の後茶話会が持たれて、研究者間の交流が図られた。これを契機として、今回の調査班に対し、クンスト・カメラから招待があり、10月3日13:00-17:00にクンスト・カメラ所蔵品の視察が行われた。

スイスのベルン歴史博物館での調査は2001年11月5日から同月21日までの日程で行われ、同館が所蔵する日本関係のコレクションのうち、浮世絵230点、刀剣172点について調査を実施した。当調査も上記の調査同様、外務省の依頼により国際交流基金の派遣事業として、昨年の彫刻・漆工・絵画の調査に引き続き行ったもので、2002年秋に開設される日本ギャラリーの構成をかんがみ、作品の価値と保存状態をチェックすることを主な目的とする。

派遣者は浅野秀剛氏（千葉市美術館）、原田一敏氏（東京国立博物館）、塩谷純（東京文化財研究所情報調整室）の三名。浮世絵については、磯田湖龍齋「若衆と奴（一富士二鷹三茄子）」、歌川国芳「列猛伝 宮本武三四」等、出来・保存ともに良質かつ稀少な作品が相当数確認された。また刀剣についても、幕末に将軍名代として渡欧した徳川昭武の献上品とされるもの等、展示可能な作品を確認することができた。

調査に際しては、同館学芸員トーマス・ブソータ氏と適宜話し合い、その中で展示・公開に向けての提言を行った。また前回調査した絵画作品中、傷みの激しい屏風3件について再調査し、うち六曲一双の「京洛名所図屏風」は当研究所の在外日本古美術品保存修復事業（2002年度）で修復する運びとなった。

中国文物研究所との覚え書き締結（ F ）

2001(平成13)年2月、中華人民共和国の中国文物研究所呉加安所長から、東京国立文化財研究所渡邊明義所長(当時)に対して、両研究所が将来にわたり共同して文化財保存のための研究交流を進めていく覚え書きを締結したいとの申し入れがあった。この問題は両者で基本的な合意に達し、4月以来内容と文言の調整をはかってきたが、独立行政法人への移行にともない、枠組みを東京、奈良の両文化財研究所を包括したものへと発展させることになり、今回「日本国独立行政法人文化財研究所と中華人民共和国中国文物研究所による文化財保護のための共同研究および交流に関する趣意書」として締結の運びとなり、独立行政法人文化財研究所渡邊明義理事長が北京へ出張し、9月26日中国文物研究所長室において、無事調印、交換を完了した。

中国文物研究所は、国家文物局に直属し、古建築・古跡保護研究センター、文物保護科学技術研究センター、文献・文物考古研究センター、文物資料情報センター、文物科学育成センター等をそなえた中国における文化財保存の専門機関である。この覚え書きの締結によって、東京、奈良の両文化財研究所は、中国文物研究所研究員とのこれまで以上に緊密なパートナーシップを構築するとともに、多方面にわたる研究交流を展開することが可能になった。

なお、この覚え書きにのっとり、東京文化財研究所では研究交流の最初の試みとして、中国文物研究所と北京智化寺壁画の保存に関する共同研究（科学研究費・受託研究等の項参照）を開始した。

資料作成・公開に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
データベースの作成と公開（*A03）	情報調整室	67
黒田記念室の公開（B10）	美術部	68
黒田清輝巡回展（B11）	美術部	69
所蔵作品の貸与（B12）	美術部	69
資料閲覧室運営（A04）	情報調整室	70
伝統芸能の画像・音声・映像資料のデジタル化（C06）	芸能部	71
国際資料室の整備・公開・活用（F08）	国際文化財保存修復 協力センター	71
文化財保存に関する国際情報の収集及び研究（F07）	国際文化財保存修復 協力センター	72
システム管理（A02）	情報調整室	73
ホームページの作成（*A03）	情報調整室	73
写真室の運営・設備（*A06、A07）	情報調整室	74

- * ・データベースの作成と公開及びホームページの作成は、広報企画事業（ A03 ）の一環として実施した。
 ・写真室の運営・設備は、写真室運営費（ A06 ）及び写真設備・調査等（ A07 ）の二つの事業の成果を総合して報告した。

データベースの作成と公開（ A03-01-1/5：広報企画事業の一環として実施）

東京文化財研究所では、情報調整室が中心となって各研究部が作成する研究情報を統合し、所内および外部での利用に供している。

内部公開データベース

内部公開データベースとは、所内のイントラネット上にサーバーを立て、ネットワーク上の端末上から検索するデータベースを指す。平成 11 年度以来、日常的に運用しており、適宜、データベースの種類が増加とデータの更新をはかっている。なお、資料閲覧室における閲覧申請は、内部公開データベースを利用している。

現在稼働中のデータベースシステム

- ・定期刊行物所載古美術文献データベース
- ・定期刊行物所載近現代美術文献データベース、平成 13 年度 5 月より運用開始
- ・和漢書データベース
- ・古美術展覧会カタログデータベース
- ・売立目録データベース
- ・近現代美術展覧会データベース、平成 13 年度 5 月より運用開始
- ・所蔵写真データベース（画像データベース）、平成 13 年 11 月より試験運用開始



古美術展覧会カタログデータベース



「雪舟」の検索結果



写真管理検索システム



「智・感・情」の検索結果

写真管理検索システムは、写真室運営費（ A6-01-1/5）の一環として作成した。

外部公開データベース

外部公開データベースとは、インターネットを通じて、外部からの検索を可能とするものを指している。東京文化財研究所で作成する共用データベースは、まず所内のイントラネット上で運用し、その運用実績を確認したのち、適宜、インターネットを通じて、外部へ公開するという手順を踏んでいる。このような手順を踏むことで、1) 内部公開の運用実績を通して、外部公開の前に、内部的な運用評価を経ることができ、2) 内部公開データベースのデータは外部公開データベースに何らかの支障が発生した場合のバックアップともなる。3) 内部公開データベースには、画像データベースのように、東文研所蔵資料以外の資料を中心とするものがあり、これらは、資料の所蔵者との関係から、現在の慣例では、外部公開することができないものもある。

現在、稼働中の外部公開データベース (<http://archives.tobunken.go.jp>)

- ・和漢書データベース、平成 14 年 3 月から試験運用開始
- ・売目録データベース、平成 14 年 3 月から試験運用開始



外部公開データベースのトップページ



和漢書の検索結果表示画面

黒田記念室の公開 (B10-01-1/5)

黒田記念室は当研究所の創設に深く関わった、帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油彩画、素描、写生帖等を収蔵公開している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油彩画 125 点、素描 170 点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なものは、「湖畔」「智・感・情」(以上二作品は、国指定重要文化財)「花野」「赤髪の少女」「もるる日影」「温室花壇」などである。

平成 13 年 1 月より、二階部分の改修工事がおこなわれ、従来の黒田記念室に加え、会議等に使用していた陳列室も展示室に改修され、二室がギャラリーとなり、黒田清輝の作品を約 50 点展示することができるようになった。また、旧美術研究所所長室も、公開のスペースに改め、美術研究所時代の写真を展示し、パーソナルコンピューターを設置し、来館者にホームページを見ていただくコーナーとして活用するようにした。工事完了後の 9 月 14 日には、特別招待日として関係者をまねき披露するとともに、9 月 20 日からは、これまで同様、毎週木曜日に一般に公開するようにした。

一般公開 (無料) 毎週木曜日 午後 1 時～4 時

特別公開 2001 年 (平成 13 年) 10 月 29 日～11 月 4 日

入場者数 2,743 人 (9 月 20 日～平成 14 年 3 月 28 日まで)

アンケート実施 360 枚を回収 336 名の回答が、「満足した」「勉強になった」「感動した」等の回答であった。

なお、リニューアルオープンにあわせ、黒田記念室のパンフレット (A4 サイズ、三つ折) を作成し、来館者に無料で配布した。

黒田清輝巡回展 (B11-01-1/5)

黒田清輝の作品を多数所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、あわせて地方文化の振興に資するために、昭和52年からの事業として「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回地方において開催してきた。

平成13年は下記のように開催された。

会 場：宮城県美術館 会 期：7月19日(木) - 9月2日(日)

主 催：東京文化財研究所 宮城県美術館 河北新報社

開館日数：40日

入場者：22,569人

陳列点数：油彩・パステル61点、木炭デッサン50点、写生帖17冊、書簡3通、日記5冊、
参考資料6点、記録写真16点、特別出品 黒田清輝筆「春」「秋」(油彩 個人蔵)

図 録：A4版変形、159頁、原色図版62頁、単色図版77頁

このたびの巡回展には、宮城県美術館の調査により所在が明らかになった黒田筆「春」「秋」の2点が特別出品された。これらの作品は1903年に白馬会展に出品されて以来、存在の確認がされていなかった作品である。黒田が日本に持ち来たらそうとした西洋的裸体表現を自ら試みた作例として重要である。同展図録にはこの作品についての解説パンフレット(A4変形 4ページ)が添付された。

会期中に行ったアンケートの結果、来館者の48.7%が仙台市内から、17.1%が仙台市以外の宮城県内から、34.2%が宮城県内から来ていたこと、情報源としては「新聞・雑誌」が29.4%、「知人に聞いて」が18.1%、「美術館に来て」が16.6%、「ポスター」が15.0%、美術館ニュースが7.5%、テレビが6.4%であった。来館者の74.9%が「黒田清輝展を見るため」に来館し、家族同伴が全体の44.9%を占めた。年齢層としては10代(18.7%)、20代(18.7%)、50代(17.6%)、40代(16.0%)、60代(11.8%)、30代(8.6%)の順で、夏休中の開催であったため、学生の入場者が多かった。それは、職業欄への回答が学生(小・中・高・大学)27.8%、主婦27.3%、会社員・公務員23.5%となったことにも現れる。性別は男性24.1%、女性75.4%となっている。意見欄には「デッサンも展示しており、制作過程がわかりやすかった」「実物を見て感動した」「見ごたえがあった」など、満足感を示す記述が多かった。

所蔵作品の貸与 (B12-01-1/5)

本年度の所蔵作品等の貸与は下記の通りであった。(件数：3件、作品点数：4点)

「正岡子規の絵」展

主催 松山市立子規記念博物館

会場 愛媛県美術館

会期 平成13年9月15日～10月14日

作品 黒田清輝 「パリー風景」(油彩画)

「残雪」(油彩画)

巴里憧憬展(高知県立文学館)平成14年2月8日～3月31日

作品 黒田清輝「裸体・女」(油彩画)

「開館記念展 未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」

東京国立近代美術館

平成14年1月16日～3月10日

作品 黒田清輝「湖畔」(油彩画)

資料閲覧室運営 (A04-01-01/5)

研究所が所蔵する文化財関係資料のなかで、情報調整室が管理する各種図書資料・写真資料等は、資料閲覧室にて文化財関係研究者・大学院生を対象に、原則として祝日・年末年始(12/25～1/7)を除く、毎週月・水・金(10:00～16:30)に閲覧に供している。

資料閲覧室に管理委託される購入及び寄贈図書資料は、その目録作成作業をネットワーク上のリレーショナルデータベースシステムで一元的に管理し、日常的にデータ入力作業を継続・更新している。また公開データは、一部、イントラネットシステムを活用して閲覧者の利用に供している。現在、図書・雑誌・展覧会カタログ等の目録データは、5年計画のもとで、適宜、原本照合を進め、冊子体の目録発行を行う計画である。また公開可能なデータはイントラネット上の運用評価を経た上で、インターネットを通して外部に提供していく予定である。

現在運用中の目録データベース(19種)

- ・所蔵和漢書データベース(2000年度まで)
- ・所蔵洋書データベース
- ・所蔵売立目録データベース
- ・所蔵和雑誌誌名データベース
- ・所蔵中国雑誌誌名データベース
- ・所蔵和雑誌巻号データベース
- ・所蔵中国雑誌巻号データベース
- ・所蔵古美術展覧会図録データベース
- ・所蔵近現代美術展覧会図録データベース(1998年まで)
- ・所蔵近現代美術展覧会図録データベース(1999年以降)
- ・所蔵戦前開催展覧会データベース
- ・地方公共団体刊行報告書データベース
- ・受入和漢書データベース(2001年度分)
- ・所蔵簡易図書データベース
- ・笹木氏寄贈現代美術資料データベース
- ・所蔵洋雑誌誌名データベース
- ・所蔵韓国雑誌誌名データベース
- ・所蔵洋雑誌巻号データベース
- ・所蔵韓国雑誌巻号データベース
- ・近現代展覧会開催情報データベース(1944-96)

なお、平成13年度より、美術部へ学術雑誌掲載古美術文献データベースを移管した。

目録所在情報に関する平成13年度の実績

目録所在情報の種類	19種
目録所在情報作成件数	12,799件
目録所在情報収録件数	167,695件
イントラネットで公開中の目録累計数	5種
目録所在情報公開件数	157,198件

平成13年度における閲覧資料室の利用状況(但し、所内閲覧者を除く外部閲覧者)

・4月	31人	・5月	40人
・6月	49人	・7月	67人
・8月	46人	・9月	40人
・10月	65人	・11月	60人
・12月	47人	・1月	44人
・2月	46人	・3月	63人
年間合計	598人	平成12年度の利用者数との対比	296人増

伝統芸能の画像・音声・映像資料のデジタル化（ C06-01-1/5 ）

目 的

芸能部では、文献資料のほかに、音声・画像資料を積極的に収集してきた。上演とともに瞬時に消え去る運命にある芸能を研究するために、これらの記録は極めて貴重であるが、記録メディアの進展に伴って、より好環境のもとに保存してゆく必要がある。このために芸能部では、画像・音声・映像資料のデジタル化の推進を計画している。

成 果

本年は、特に劣化の進みやすいオープンリール・テープに残された音声資料と、石井雅子氏によって寄託された舞台写真のフォト CD 化を進めた。

研究組織

星野 紘、高桑 いづみ、鎌倉 恵子、児玉 竜一、宮田 繁幸（以上、芸能部）

国際資料室の整備・公開・活用（ F08-01-1/5 ）

目 的

本プロジェクトは、国際文化財保存修復協力センターの国際資料室に配置する外国の文化財や文化財保存修復事業に関する蔵書・資料の質及び量を充実させ、国際文化財保存修復協力センターでの関連の研究や事業に利用するとともに、国内外の関連分野の専門家が閲覧・利用できるようにする。同時に、資料のデータベース化を行い、利用者の便を図る。

成 果

資料の充実

1)外国の文化財や文化財保存の現状および理念、2)文化財保存関連機関、3)文化財保護制度、4)日本および諸外国の文化財保護関連法令、5)各種文化論などの分野について、書籍や映像資料、デジタルデータの購入、資料交換などによる入手を行い、資料室の充実を図った。また、関野克氏旧蔵資料の受入と整理を行い、日本の文化財保護行政および国際協力に関する資料が利用できるようにした。さらに、文化財保護関連法令資料の収集・整理を行い、現在130の国および地域について法令の収集・データ入力が行われている。

資料目録の作成

文化財保護国際協力の分野の研究者が利用しやすいよう、所蔵資料に対して国際文化財保存修復協力センターとしての分類コードを作成した。次に、Microsoft Accessにより資料の名称、出版年、分類コード等の基礎データの入力・データベース化の作業を行った。今年度入力が完了した700点余りのデータについて、「国際資料室所蔵資料目録」を作成した。



各国の文化財保護関連資料



「国際資料室所蔵資料目録」と「関野克資料目録」

文化財保存に関する国際情報の収集及び研究 データベースの作成・公開 (F07-01-1/5)

目 的

本プロジェクトは、国際文化財保存修復協力センターで実施するさまざまな調査・研究により得られた情報を、空間データベースとしてインターネットを通じて広く公開し、文化財保存国際協力に役立てることを目的とする。

成 果

空間データベースの構築

タイ、カンボジアにおいて、デジタルカメラとGPS受信機を用いて調査地点の位置情報および時間情報、画像情報を取得した。これらの情報を、位置情報を与えたタイの官製地図の画像および電子地図と組み合わせ、地理情報ソフトウェア上でデータベース化した。

旧関野克氏所蔵書籍の整理・データベース化

関野克氏は、1946年から東京大学教授として建築史の研究と教育に携わるかたわら、文化財保護委員会建造物課長、東京国立文化財研究所所長を務めるなど、建築史学および文化財保護行政の分野の第一線で活躍した。2001年1月に関野先生が逝去された後、関野氏が所蔵していた国際関係資料は、東京文化財研究所に寄贈された。その資料には、関野先生が関与したUNESCO、ICCROM、ICOM、ICOMOS等の国際機関の会議やボロブドゥールなど個別の文化遺産保存に関わる記録も含まれている。特に、UNESCOの条約や勧告に関わる資料には、草案や日本政府の意見書なども含まれていて、その成立過程の経緯や日本政府の関与なども知ることができ、興味深い記録であるといえる。これらの資料について、国際文化財保存修復協力センターにおいて分類・基礎データの入力を行い、「東京文化財研究所所蔵関野克資料目録」として出版した。



関野克氏資料

システム管理 (A02-01-1/5)

東京文化財研究所のネットワークシステムは、平成 12 年度に導入し、順調に稼働している。所内ネットワークは、3階の LAN 機械室と各フロアーにそれぞれ 1GB スイッチングハブを設置し、その間のバックボーンに 1GBps 高速光軸ケーブル(SMF ケーブル)を配線している。各フロアーのスイッチングハブと研究室・居室等の間は、100MBps の光軸ケーブルで連絡し、研究活動及び日常業務が遅滞なく円滑に遂行できる環境にある。

外部との間には Firewall を構築し、外部からの不正アクセス・ウイルス感染等に対処している。

所内システムの運用については、システム管理者を情報調整室長が担当し、各部・センターから選出された委員とともに LAN 委員会を構成し、新規メールアドレスの所得やシステム全体の日常的な運用・中長期的な更新計画、保守契約等について協議している。

ネットワーク上のサーバーシステム一覧

- ・外部 DNS/Mail/WWW サーバー
- ・外部 NEWS サーバー
- ・内部 DNS/Mail サーバー
- ・内部 DNS/File/Group Ware サーバー
- ・代理要求サーバー
- ・ドメインコントローラサーバー
- ・DHCP サーバー
- ・ファイヤーウォールサーバー
- ・外部データ交換用 FTP サーバー
- ・Map 情報公開用 WWW サーバー
- ・データ公開用代理要求サーバー

ほかにイントラネット上で運用する画像サーバー、データベースサーバー等がある。

東京文化財研究所のホームページ (A03-01-1/5 : 広報企画事業の一環として実施)

当研究所のホームページは広報の場であるとともに、研究のための基礎資料を網羅し、さらにそれが有機的に関連づけられたデジタル・アーカイブ構想のひとつに位置づけられている。各研究部内のページは、各部で担当者が新規コンテンツを作成している。研究所全体にかかわるページと黒田記念館のホームページは、情報調整室がその作成を担当している。平成 13 年度末には、外部公開データベースの試験運用を開始し、今後も、研究性の高いコンテンツを広く提供していく予定である。

平成 13 年度のホームページのアクセス数一覧

・4月 26,032 件	・5月 26,442 件
・6月 31,364 件	・7月 32,481 件
・8月 34,315 件	・9月 32,323 件
・10月 36,664 件	・11月 36,239 件
・12月 36,503 件	・1月 42,781 件
・2月 39,181 件	・3月 42,613 件

年間アクセス数合計 412,938 件

平成 12 年度アクセス総数との対比 13,2618 件増

写真室の運営・設備 (A06-01-1/5、 A07-01-1/5)

写真室では、各研究部門の要請にしたがって、文化財の研究に必要な画像を形成している。写真室の日常業務は、写真室運営費 (A06)、撮影機材、写場の設備等については、写真設備・調査等 (写真 A07) の二つのプロジェクトを主体とし、適宜、他部のプロジェクトの協力を仰ぎながら、常時、最新の技術開発に即応できる体制を維持している。

平成 13 年度は、画像の入力から出力、画像データの管理、形成画像の公開などのルーチンについて、フルカラー化とデジタル技術の応用という観点から、大幅な見直しを行った。これまで行っていた現像過程は、すべてコンピュータによる画像処理に代わり、廃液等の環境問題を解決した。(口絵参照)

(1) データ入力

画像入力となる文化財の撮影にあたっては、シングル CCD タイプで 1600 画素の高精細デジタルカメラを導入し、出力画像の実用面からの評価を行った。画像の入力は、現段階で、すでにほぼ 9 割近い頻度でデジタル撮影を行っている。アナログ撮影した場合は、適宜、スキャナーでデジタル・データ化している。

(2) 画像処理

入力されたデジタルデータについて、画像の枠の修正、色調・コントラストの調整等を行う。

(3) カラープリンターへの出力

現有機器で A3 サイズまでを出力できる。出力したカラー画像は、黒地の台紙上にパウチングによるラミネート処理を行い、画像の保存性を高めている。

(4) CD 保存と画像データベースへの登録

処理の終わった画像は、CD 一枚に 5 カットを原則として、コンタクト画像データとともに保存する。またイントラネット上で運用する画像管理検索システムの画像サーバにインデックス画像を登録する。個々の画像データは、調査者がイントラネット上から直接入力できるよう、現在、システムを構築中である。

(5) 資料閲覧室への配架

ラミネート加工を施したカラー画像は、入力された作品データを裏面に貼り付けた後、資料閲覧室に配架し、内外の閲覧者に公開する。

主要機材一覧

(1) カメラ

*アナログ用

ジナー P2 8×10 (SINAR 社製)

4×5 (SINAR 社製)

*デジタル用

ハッセルブラッド 555 E L D (HASSELBLAD 社製)

コンタックス 645 (京セラ社製)

*デジタルバック

LIGHTPHASE (PHASE ONE 社製) 600 万画素シングルショットタイプ

DCS Pro Back Plus (Kodak 社製) 1600 万画素シングルショットタイプ

ジナー Back44HR (SINAR 社製) 1600 万画素マルチショットタイプ

(2) 照明器具

GRAFIT A2 PLUS (broncolor 社製)

*アナログ・デジタルマルチショット対応型

GRAFIT A4 (broncolor 社製)

*アナログ・デジタルマルチショットタイプ対応型

Primo4 (broncolor 社製)

*アナログ・デジタルシングルショットタイプ対応型

MOBIL (broncolor 社製)

*コードレスタイプ/アナログ・デジタルシングルショットタイプ対応型

TOPASA4 (broncolor 社製)

* マルチボルテージタイプ/アナログ・デジタルシングルショットタイプ対応型

(3) スキャナー (フィルム・ガラス乾板デジタル入力機器)

EVER smart Supreme (CreoScitex 社製)

(4) プリント出力機器

ピクトグラフィ-4000 (フジフィルム社製)

(5) 画像処理

PowerMacG4 1GHz×2 (apple 社製)

PowerBookG4 (屋外撮影用)

(6) モニター

シネマディスプレイ (apple 社製)

PRO CALIX (東京特殊電線株式会社製)

(7) キャリブレーター X-Rite Color Monitor Optimizer (X-Rite 社製)

研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
国際シンポジウム (G01)	芸能部	79
国際文化財保存修復研究会の実施 (F09)	国際文化財保存修復 協力センター	80
美術部オープンレクチャー (B13)	美術部	81
芸能部研究集会・講座 (C05)	芸能部	82
文化財保存修復研究協議会の開催 (F10)	国際文化財保存修復 協力センター	84
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (E01)	修復技術部	84
総合研究会 (A)	協力調整官 情報調 整室	85
美術部研究会 (B)	美術部	86
保存科学部研究会 (D)	保存科学部	87
各国の文化財保護制度に関する研究会 (F10)	国際文化財保存修復 協力センター	88

第 25 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会
「日本の楽器 新しい楽器学へ向けて」(G01-01-1/1)

昭和 52 年に開始した国際研究集会も第 25 回を数え、芸能部の担当で下記のように行われた。

開催主旨

日本では、今まで楽器を総合的にとらえる研究が多くなかった。音楽学の立場では音を奏でる道具として、美術工芸の研究ではもっぱら加飾に目を向けてきたのである。今回のシンポジウムは、音楽、美術工芸に加えて絵画資料を用いた図像学的研究、古楽器の修復や博物館での展示などさまざまな視点から楽器をとらえ直し、海外の研究者を交えて「文化遺産」としての楽器の意義を問い直そうと試みるものである。

今回のトピックは、東京国立博物館の協力をいただいて同館の所蔵楽器 120 点あまりの展観が実現したことである。楽器は保存・修復等の取り扱いがむずかしく、製作年代など位置づけも不確定なためこれまでほとんど展示される機会がなかった。所蔵品の中には明治年間に製作された正倉院模造楽器をはじめ、蜂須賀家伝来の堆黒の琵琶、信貴山行円作の笙、筑後善道寺僧法水に由来するといわれる車箏など貴重な楽器も含まれており、今回、間近で目にした意義は大きい。日程と各セッションでの発表は、下記の通りである。

13 日 開会式

< 基調講演 >

- 1 笠原潔 (放送大学) 「新たな楽器学へ向けて 音楽考古学からの提言」
- 2 ケン・ムーア (メトロポリタン美術館) 「楽器学と博物館の環境 メトロポリタン美術館における日本楽器コレクションをめぐる」

東京国立博物館特別展観

レセプション

14 日 < セッション 楽器学の現在 >

野川美穂子 (東京文化財研究所・芸能部) 「和琴の形態とその変遷」

高桑いづみ (東京文化財研究所・芸能部) 「益田鈍翁旧蔵鼓胴について 東大寺旧蔵四ノ鼓の可能性」

薦田治子 (お茶の水女子大学) 「琵琶 - 楽器の種類と変遷 - 」

志村哲 (大阪芸術大学) 「古管尺八とその奏法の特徴について」

< セッション 図像学から見た楽器 >

勝木言一郎 (東京文化財研究所・美術部) 「敦煌壁画に見る『舞』と『楽』のイメージ 美術史研究者の立場からの音楽図像学」

スティーブン・ネルソン (京都市立芸術大学) 「描かれた楽 日本伝統音楽の歴史的研究における音楽図像学の可能性と限界について」

デイビッド・ウオーターハウス (トロント大学) 「日本宮廷舞踊の描写 『信西古楽図』とその後の絵画資料」

オノ・メンシク (ハーグ博物館) 「浮世絵に見る楽器」

15 日 < セッション 工芸品としての楽器 >

加藤寛 (東京文化財研究所・修復技術部) 「鼓の装飾」

木村 法光 (京都市立芸術大学) 「正倉院楽器の保存と修復について」

北村昭斎 (漆芸家) 「春日大社国宝蒔絵箏と三つの黒漆鼓胴について」

< セッション 楽器の修復と展示 >

エステル・フォンタナ (ライプティヒ楽器博物館) 「グラスヒ博物館における日本の楽器」

齋藤 望 (彦根城博物館) 「彦根藩主井伊家伝来の雅楽器」

討論

国際文化財保存修復研究会 (F09-01-1/5)

開催趣旨

「文化財は人類共通の遺産であり、その保存修復には、国家、民族の違いを越えた国際協力が不可欠である。」この理念は、いまや各国で文化財保存に従事する人びと、文化財保存に関心のある人びとにとって共通のものとなりつつある。しかし、そのようなグローバルな呼びかけに反して、個々の国々や地域では、多様な文化財に対する多様な考え方が存在し、"国際協力"の呼びかけが必ずしも通用しない現実があることも事実である。個々の地域には"自己の文化財"に対する独自の視点があり、その視点を生み出す歴史的、文化的背景がある。それによって規定されている"文化財"そのものに、そもそも大きな違いがある。そしてその文化財を守ろうとする目的、意識にも違いがある。それが、文化財保護の"制度"にそれぞれの特色を与えてもいる。そのような違いを乗り越えた"人類共通の遺産"とはどのようなものだろうか？

本研究会は、これまで主に外国の文化財保存修復に関わっている研究者・専門家を招き、具体的な事例紹介を通して、保存修復の技術的、あるいは国際協力事業推進における様々な状況について、情報交換と討議をすすめてきた。それによって、我々はすでに数多くの地域の問題について認識を深めてきた。本年度は、さらに一步踏み込んで、"民族""宗教""政治"をキーワードに、2回にわたって研究会を開催した。これは、世界の各地でこれらの分野を研究している専門家に講演を依頼し、文化財が存在する"地域社会"と"その文化"に対する認識を深めようとしたものである。

第10回国際文化財保存修復研究会

テーマ：地域社会と文化遺産 : 民族、宗教、政治

日時：2001 (平成13)年10月18日 10:00 ~ 17:00

会場：東京文化財研究所 セミナー室

出席者数：86名

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 「イスラム社会と"文化"の構造」 | 一橋大学 内藤正典 (社会地理学) |
| 「アジアにおける政治経済と"地域文化"」 | 拓殖大学 岩崎育夫 (政治経済学) |
| 「ベトナム社会と文化の多様性」 | 東洋大学 未成道男 (社会学) |

第11回国際文化財保存修復研究会

テーマ：地域社会と文化遺産 : 民俗、言語、異文化理解

日時：2002 (平成14)年2月22日 10:00 ~ 17:00

会場：東京文化財研究所 セミナー室

出席者数：57名

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 「民俗学は"異文化"をとらえうるか」 | 法政大学 川村湊 (日本文学・民俗学) |
| 「言語の違いとその橋わたし」 | 女子美術大学 林正寛 (言語学・言語接触論) |
| 「清末中国知識人の日本"発見" 東洋と西洋の間に囲まれて」 | 大妻女子大学 銭国紅 (東アジア比較文化論) |

第35回美術部オープンレクチャー 「日本における外来美術の受容について」(B13-01-1/5)

美術部では、毎年秋に美術史研究の成果を一般に公表するための講座を開催し、本年度で35回目を迎えた。当オープンレクチャーは従来、公開学術講座の名で親しまれてきたが、当研究所の新庁舎と美術部の活動を外部に知ってもらうために、美術部オープンレクチャーと名称を改め、当研究所のセミナー室において開催するとともに、聴講者の要望に応じて開催日時を従来の水曜日の午後から土曜日の午後に変更した。また、ひとつのテーマのもとに3回の連続講座の形態をとることを試みた。すなわち、今年度は美術部の研究プロジェクトのひとつである「日本における外来の美術の受容に関する調査研究」をとりあげ、連続講演のかたちをとりながら多角的に標記のテーマについて考えてみた。聴講者は153名に及んだ。各回の日時・発表者・題名・内容は以下の通りである。なお、この美術部オープンレクチャーは台東区と共催の形態をとり「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の一環として開催した。

第1回：10月20日(土)午後2時から3時半まで

発表者：奥健夫(文化庁文化財部美術学芸課調査官)

題名：「着装する仏像 仏像と人形のあいだ」

発表要旨：平安時代末期から鎌倉時代にかけて、仏像を裸形もしくは下着のみをつけた姿に造り、これに実際に布で作った装束を着せることがしばしば行われた。こうしたいわゆる着装像は、仏像の「人形」化などと評され、時代性としての現実主義が過度にはたらいた結果、彫刻の本質からの逸脱をもたらした例として語られるのが常であり、しかも、多くの鎌倉彫刻史の記述において着装像のことは最後に短く言及されるにとどまるのが実情である。しかしながら、仏像という存在について当時の人々がどのような意識を抱いていたかを考えようとするとき、仏像に着装させるという行為は大きな手がかりとなり得るものとみられる。本発表ではこの問題を着装像を法会とのかかわり、中国受容、さらには人形との関係などの点から多角的に考察を試みた。

第2回：10月27日(土)午後2時から3時半まで

発表者：田中淳(美術部黒田記念近代現代美術研究室長)

題名：「明治絵画再考 青木繁を中心に -」

発表要旨：明治中期の美術界に彗星のごとく登場し、また不遇のうちに夭折した画家・青木繁(1882-1911)は「海の幸」などの作品によって、現在もなお広く親しまれている。そうした青木の生涯と作品によって、彼とその作品を取り囲んだ「明治」の絵画の本質を逆に照らしだすことを目的に発表を行った。

第3回：11月3日(土)午後2時から3時半まで

発表者：鈴木廣之(美術部日本東洋美術研究室長)

題名：「エドワード・モースと蜷川式胤 明治初期の美術研究と交流」

発表要旨：大森貝塚の発掘でよく知られているエドワード・モース(Edward S. Morse, 1838-1925)は明治10年(1877)に来日し、東京大学理学部で動物学を教えた。一方、^{にながわのりたね}蜷川式胤(1835-1882)はモースほど有名ではないが、明治初期の文化財保護行政の中心にあり、明治5年(1872)の正倉院宝物調査はよく知られている。この立場の違う二人は、古い物、とくに陶磁器の収集と研究に共通の関心があった。そして、モースの日記『日本その日その日』は同世代の蜷川との友情をよく伝えており、蜷川は体系的な収集と研究の方法をモースから学び、モースは収集に欠かせない鑑識の方法を蜷川から手ほどきを受けていた。開国後2~30年を経た時期に江戸時代からつづく学問は大きく変貌する。その様子をこの二人の活躍から辿ってみた。

第 32 回芸能部公開学術講座
「変身の技法 能・浄瑠璃にみる菅原道真」(C05-01-1/5)

日 時 2001 (平成 13) 年 12 月 20 日 (木)
場 所 矢来能楽堂
入場者数 230 名
満 足 度 アンケート有効回答数の 95%が有意義と回答

プログラム

講演 1 「近世演劇に見る道真像」鎌倉恵子 (演劇研究室長)

浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』(1746年初演)四段目天拝山の段は、左遷された菅原道真が雷神に変身する場面があり、初演当時は現在よりも重要視されていた。道真は本作に先行する作品では、自分を讒言し左遷させた藤原時平に復讐すべく自ら命を絶ち、雷神となる。『菅原伝授手習鑑』では、時平の帝への叛逆を知り、帝を守るべく雷神となる。この場で道真は怒りをあらわにし、激しい動きを見せる。その模様は義太夫節の語りと三味線でも表現するが、演奏は躍動的な中に、道真の高位と神性を感じさせなければならない難しさがある。

講演 2 「能の鬼の変身 道真を中心に」小田幸子 (演劇研究室調査員)

道真伝説を初めて舞台化したのが中世の能である。道真(天神)を素材にした能は、観阿弥時代から作られており、10 曲以上存在する。このうち室町時代後期の作と推定される『菅丞相』と、その翻案曲と推定される『雷電』の二つの鬼能は、同じ道真伝説(法性房をめぐる一連のエピソード、なかでも「石榴天神伝説」)に取材しているながら、道真の描き方に大きな相違が見られ、前者は御霊神的要素が強く、後者は退治される鬼の性格が強い。その理由を、鬼能の時代的变化、道真像の時代的变化などからめて考察した。

実演 浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』より 天拝山の段(部分) 豊竹呂勢大夫 鶴澤燕二郎
能 『雷電』より 中入り、後場 粟谷明生

夏期学術講座 (C05-01-1/5)

第 26 回夏期学術講座 「歌舞伎の基礎資料 研究史と展望」

期 間 2001 (平成 13) 年 7 月 16 日 (月) ~ 19 日 (木)
10:30 ~ 12:00、 13:15 ~ 14:45、 15:00 ~ 16:30

場 所 東京文化財研究所 セミナー室

参 加 者 35 名

満 足 度 アンケート有効回答数の 98%が有意義と回答

担当講師 児玉竜一 (演劇研究室研究員)

鎌倉恵子 (演劇研究室長)

小田幸子 (演劇研究室調査員)

テ ー マ 歌舞伎の基礎資料 研究史と展望

趣 旨 歌舞伎研究では、二十数年来「資料整理の時代」と呼ばれ、基礎資料の整備が進められてきたが、同時に研究分野があまりにも細分化された傾向もある。このため、基礎資料を総合的かつ具体的に扱うとともに、各分野の研究史を詳細に紹介して、歌舞伎を専攻する受講生はもとより、隣接分野からの受講生にも益する講義を企画した。

プログラム 第 1 日 歌舞伎の番付、 歌舞伎と絵画資料、 絵入狂言本と挿絵
第 2 日 歌舞伎台帳の性格、 歌舞伎台帳の周辺、 歌舞伎台帳と上演

- 第3日 役者評判記から劇評へ、 演劇雑誌の系譜、 演出史の研究
 第4日 歌舞伎と複製メディア、 歌舞伎の記録、 質疑

民俗芸能研究協議会 (C05-01-1/5)

第4回民俗芸能研究協議会 「民俗芸能の記録作成の方法と活用について」

日時 2001 (平成13) 年9月11日 (火) 10:00 ~ 17:30

会場 東京文化財研究所セミナー室

参加者 71名

満足度 アンケート有効回答数中 97%が有意義と回答

テーマ 民俗芸能の記録作成の方法と活用について

趣旨 時代の推移とともに衰滅や変容を余儀なくされている民俗芸能について、かねてより、文書・スケッチ・音楽譜・舞踊譜・映像・録音等による記録作成が各方面で進められてきた。民俗芸能は、芸能としての上演の部分だけでなく、伝承の精神的側面・社会組織的環境なども関連している複雑な対象であり、その全てにわたっての完全な記録を期することは困難な対象であるが、それにもかかわらずよりよい記録を求めて、様々な努力が積み重ねられてきている。また、情報の積極的開示が求められる今日においては、作成された記録の活用についても大いに意を用いる必要がある。

第4回民俗芸能研究協議会では、以上の2点についてこれまで先進的な取り組みを行ってきた内外の専門家による5件の事例報告と、アドバイザーを交えた総合討議を実施し、その結果を報告書として刊行した。

プログラム

- | | | |
|---------------|--|-----------------------------------|
| 10:10 ~ 10:50 | 総合的な記録作成 - 東京都豊島区长崎獅子舞の場合を事例に -
東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室調査員 | 小野寺節子 |
| 10:50 ~ 11:30 | 映像記録作成 - 滋賀県の太鼓踊りの場合を事例に -
滋賀県教育委員会文化財保護課主幹 | 長谷川嘉和 |
| 11:30 ~ 12:10 | 新メディアによる記録作成 - 田沢湖芸術村の場合を事例に -
財団法人 民族芸術研究所
たざわこ芸術村デジタルアートファクトリー | 荒木一
長瀬一男 |
| 12:10 ~ 13:10 | (昼 食) | |
| 13:10 ~ 13:50 | 記録の活用にあたっての著作権の問題
文化庁長官官房著作権課庶務係長 | 兼定孝 |
| 13:50 ~ 14:30 | 韓国における民俗芸能の記録作成について
韓国国立文化財研究所芸能民俗研究室學藝研究士 | 李在弼 |
| 14:30 ~ 14:50 | (休 憩) | |
| 14:50 ~ 16:50 | 総合討議
アドバイザー
文化審議会文化財分科会 専門委員
埼玉県立民俗文化センター民俗芸能室主任学芸員
國學院大学助教授
コーディネーター
総合司会 | 植木行宣
大明敦
茂木栄
星野紘
宮田繁幸 |

文化財保存修復研究協議会（ F10-01-1/1 ）

この研究協議会は、文化財の保存と修復に関する調査研究の方法、修理修復の技術、方法等について、毎年各種のテーマを設定して発表と討議を行ってきた。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交替で担当しているが、2001度は、国際文化財保存修復協力センターが担当した。

中国の文物、文化財の保存については、日中国交正常化以来、政府レベル、民間レベル等さまざまな交流がおこなわれてきたが、中国には日本の文化財とは性質、内容の異なる多様な文化財が存在している。また中国の文化財保護と日本の文化財保護におけるシステムや考え方の違いに直面して、円滑な交流を進めることができないという話を、しばしば耳にすることがある。そこで今回の研究協議会は、文化庁の招へいで来日中の山西省博物館の夏路館長と劉軍陳列部主任にお願いし、最近も重要な古代壁画墓等の発見が相次ぎ、また現在新博物館の建設を進めている山西省における文化財保護の制度と現状、そして今後の課題等について、詳細な報告をしていただいた。これを通じて、山西省における文化財保護の状況についての認識を深めるとともに、中国では地域ごとに文化財の内容、保存状況が異なるため、「中華人民共和国文物保護法」という国が決めた法律を実施するための条例が各省ごとに制定され、それに基づいた施策がなされていることを、具体的に知ることができた。中国との国際協力による文化財保護活動が非常に活発に進められる中、国の枠組みと地域の枠組みを丹念に理解していくことも、十分に意義あることである。

テーマ：中国・山西省の文化財と文化財保護の現状

日時：2001（平成13）年11月28日

会場：東京文化財研究所 会議室

出席者数：42名

「山西省の文物と文物保護の概況」	山西省博物館長 夏路
「山西省博物館の概要と新館建設について」	山西省博物館陳列部主任 劉軍
「報告・雲岡石窟保護の現状」	東京文化財研究所 岡田健

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（ E01-01-1/5 の一環として実施 ）

平成13年度は、平成12年度に続き、船舶の保存と活用に関する研究会を行った。平成12年度の研究会が主に木造船を扱ったものに対して、平成13年度は大型の金属船舶を扱ったものとなっている。両年度の成果を中心に報告書である「未来につなぐ人類の技2 - 船舶の保存と修復 - 」を刊行した。

研究会「船舶の保存・修復についてⅡ」 特に大型金属船に関して

日時：平成13年10月16日（火） 9:00～18:00

会場：東京文化財研究所 セミナー室

講演者：EMH（欧州海事遺産会議） ヨーロッパにおける歴史的船舶の保護活動

アンダース・ベルク（Mr. Anders Berg） 欧州海事遺産会議長

廃棄か保存か ドイツにおける大型金属船の保存 歴史、理念上の検討、実例と経験

インゴ・ハイドブリック（Dr. Ingo Heidbrink） ドイツ海洋博物館保存専門家

スカンジナビアにおける金属船の保存 伝統は生きている

トム・ラスムセン（Mr. Tom Rasmussen） デンマーク船舶保存トラストアドバイザー

海事文化財の保護に関するこれからの課題

田良島 哲 文化庁美術学芸課

船の科学館所蔵「宗谷」「羊蹄丸」の保存整備について

中山 俊介 M E S特機（株）技術部

船舶の保存と修復の手法

ドロテ・ミュンスターマン（Mrs. Dorte Munstermann） ドイツ国内船舶協会会長

船舶の保存と活用

ヘンドリック・ボールド（Mr. Hendrik Boland） 船舶船員協会理事

総合研究会（ A ）

所内で開催する総合研究会は、協力調整官 情報調整室が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式をとっている。平成 13 年度は、以下のスケジュールで実施した。

第 1 回 平成 13 年 7 月 3 日（火） 於：セミナー室

画像形成技術の開発に関する研究

発表者：井手誠之輔・城野誠治（情報調整室）

討論司会：島尾新（美術部）

第 2 回 平成 13 年 9 月 4 日（火） 於：セミナー室

彩色文化財に関する日独共同研究

三浦定俊（保存科学部）「南ドイツ地方のパロック・ロココ時代彩色彫刻の科学的研究」

津田徹英（美術部）「ドイツの彩色文化財（木彫像）の共同研究から見えてくる日本の彩色彫刻研究をめぐる 2、3 の問題」

討論司会：井手誠之輔（情報調整室）

第 3 回 平成 13 年 11 月 6 日（火） 於：セミナー室

国宝白杵磨崖仏の保存修復調査について

奥 健夫（文化庁）「白杵磨崖仏の保存修復事業の現状と今後について」

朽津信明（国際文化財保存修復協力センター）「白杵磨崖仏における白杵市との共同保存対策調査 調査結果報告」

森井順之（修復技術部）「白杵磨崖仏保存対策調査 新たな試み」

討論司会：川野辺 渉（修復技術部）

第 4 回 平成 13 年 12 月 4 日（火） 於：セミナー室

宮田繁幸（芸能部民俗芸能研究室長）「民俗芸能とイベント」

討論司会：児玉竜一（芸能部）

第 5 回 平成 14 年 1 月 8 日（火） 於：セミナー室

文化財保護制度の研究

井上敏（日本学術振興財団特別研究員）「法制度から見た我が国の文化財保護—その特質と問題点—」

岡田健（国際文化財保存修復協力センター）「文化財保護制度の比較研究—その意味と国際文化財保存修復協力センターの今後—」

討論司会：岡田健

平成 14 年 2 月 5 日（火） 於：セミナー室

新しい美術資料学

鈴木廣之（美術部）「美術資料学の現状と課題」

山梨絵美子（美術部）「新しい美術資料学 黒田清輝筆「智・感・情」の光学的調査」

討論司会：島尾新（美術部）

美術部研究会（ B ）

美術部では、ほぼ月に一度のペースで、所内の美術史研究者による研究会を開き、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、また問題を提起して議論している。

とくに2001年度は、2002年12月に行われる予定の国際シンポジウム「うごくモノ 時間・空間・コンテクスト」に向けて、そのテーマと内容について議論を行った。

- 4月25日 津田 徹英 「光明本尊考」
- 5月31日 勝木言一郎 「中国における共命鳥の図像について」
- 6月27日 山梨絵美子 「黒田清輝筆「智・感・情」について」
- 7月25日 異文化受容と美術 第1回ミニシンポジウム
「鎌倉・南北朝時代における外来美術の受容 宋風の問題を中心に」
島尾 新 初期水墨画と宋風
山本 勉（東京国立博物館） 宋風彫刻の基本的問題
林 温（文化庁） 絵画における宋風
津田 徹英 鎌倉地方における宋風
ディスカッション 司会 井手誠之輔
- 11月21日 『黒田清輝筆「智・感・情」の資料学』
山梨絵美子 黒田清輝筆「智・感・情」について
井手誠之輔 「智・感・情」の調査に用いた光学的手法について
- 1月30日 中野照男 クムトラ石窟の現状と美術史的な課題
- 2月20日 中国壁画研究協議会
中野 照男 「中国壁画の研究」の目的と研究対象 北京智化寺の壁画を例として
早川 泰弘 蛍光X線による壁画顔料のその場分析
山崎 淑子（成城大学） 敦煌莫高窟・唐前期窟における仏龕の形状変化とそれをめぐる問題
勝木言一郎 浄土景観を構成するモチーフとしての鐘楼 敦煌壁画の阿弥陀浄土変相・観経変相を
中心に
- 2月27日 グレイシャ・ウィリアムス（パークファウンデーション学芸員） 詫磨栄賀に関連する14世紀の絵
画について
島尾 新 「珠光筆と伝えられる絵について」
- 3月27日 異文化受容と美術 第2回ミニシンポジウム
「江戸時代後期から幕末・明治初期における「漢」と「洋」 南蘋派と洋風画を中心に」
金子 信久（府中市美術館） 司馬江漢の風景画をめぐって
伊藤 紫織（千葉市美術館） 江戸の異国趣味 南蘋派大流行
山梨絵美子 開成所画学局再考
ロバート・キャンベル（東京大学） 幕末に人はなぜ絵を見たか
ディスカッション 司会 鈴木廣之

国際シンポジウムについての研究会（2001年度）

- 第1回 （4月11日） 国際シンポジウム開催へ向けて
- 第2回～第5回（4月18日・6月13日・6月20日・7月4日） テーマと内容についてのブレインストーミング
- 第6回 （7月18日）方向性の決定「モノの移動と価値形成の問題」
- 第7回～第10回（7月31日・8月15日・8月23日・9月12日）タイトルと内容の確定へ向けて
- 第11回～第13回（9月26日・10月3日・10月10日）タイトル・趣旨説明の作成 「うごくモノ - 時間・空間・コンテクスト」
- 第14回～第16回（10月19日・11月7日・11月28日） 発表者と構成について
- 第17回・第18回（12月19日・12月26日） 進行状況の報告と様々な問題について

保存科学部研究会 (D)

(1) 平成13年6月22日 「文化財の劣化研究へのCL技術の応用可能性」(於: セミナー室、参加者49名)

循環型社会における高分子材料の役割 - 高分子劣化研究の動向と将来展望 大澤善次郎(群馬大学)
 文化財の劣化研究へのCL技術の応用可能性 佐野 千絵(東京文化財研究所)
 歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究 青木 睦(国文学研究資料館)
 化学発光に及ぼす隠れ酸素の影響 木村 潤一(防衛庁第一研究所)

(2) 平成13年9月18日 「新規燻蒸剤の効力と性状」(於: 会議室、参加者50名)

わが国における化学物質対策の最近の動向について 太田 志津子(横浜市環境保全局総務部)
 今後の文化財の害虫防除における燻蒸剤の役割 山野 勝次((財)文化財虫害研究所)
 「ヴァイケーン」(ふっ化スルフリル)について 加藤 寛也(三共株式会社特品開発部)
 酸化プロピレン燻蒸剤「アルプ」の性状と適用性 柴田 仁(エアウォーター(株)医療事業部)
 酸化エチレン製剤の性状と適用性 後出 秀聡(液化炭酸株式会社開発部)
 ヨウ化メチルの性状と適用性 田口 信洋(日宝化学株式会社技術研究所)

(3) 平成13年11月27日 「倉の環境、博物館の環境」(於: 会議室、参加者20名)

倉の環境と博物館の環境 - 曳山博物館、住まいのミュージアムの事例 -
 石崎武志(東京文化財研究所) 辻 重和、秀平 文忠(曳山博物館) 明珍 健二(住まいのミュージアム)
 川越町並みの再生 加藤 忠正(川越市教育委員会)
 山倉の温湿度と博物館の保存環境 秀平 文忠(曳山博物館)
 土壁の吸放湿特性を考慮した熱・湿気解析手法 孫 喜山(外国人特別研究員)

(4) 平成13年12月1日 「彩色文化財に関する日独共同研究会」(於: セミナー室、参加者80名)

日独共同による中世の彩色文化財研究から見えてくる日本彫刻史研究における二、三の問題と展望
 津田 徹英(東京文化財研究所)
 教会の祭壇・彫刻の彩色とその意味について M.キューレントール(前バイエルン州文化財研究所)
 木彫像の肌色の表現方法 マルティン・ヘス(バイエルン州文化財研究所)
 箔を用いた彩色技法 マーク・リヒター(修復技術者)
 彩色彫刻の系譜 中村 康(京都国立博物館)
 仏像彫刻の金泥塗 山本 勉(東京国立博物館)
 古代檀像彫刻の一遺例 - 静岡鉄舟寺の千手観音立像 浅湫 毅(京都国立博物館)
 ポータブル蛍光X線分析装置を用いた彩色文化財の調査 早川泰弘(東京文化財研究所)

(5) 平成13年12月10日 「非破壊による構造解析の限界」(於: 会議室、参加者12名)

ラマン分光法の原理と限界 岡本 裕巳(分子科学研究所)
 HUMI プロジェクト/稀観書の物理化学的観察・分析 井上 秀成(慶応義塾大学)
 Infrared and Raman Users' Groupの動き 塚田 全彦(国立西洋美術館)
 討論 - 非破壊による材質同定/構造解析の限界について

(6) 平成14年1月28日 「多孔質中の水分移動解析と水分特性の測定法」(於: 会議室、参加者15名)

TDRを用いた土壁中の水分移動測定に関するモデル実験と解析
 石崎 武志(東京文化財研究所) J.グルネワルド、L.ブラーゲ、H.フェヒナー(ドレスデン工科大学)
 水分移動解析プログラム(DOLPHIN4)への材料データベースの導入 J.グルネワルド
 多孔質建築材料の水分特性へのマルチ空隙構造モデルの適用 L.ブラーゲ
 異なった調湿特性をもった木造建造物中の湿度変化 H.フェヒナー、P.ハウプ(ドレスデン工科大学)
 多孔質材料の熱伝導率に及ぼす含水量、塩分量の影響 望月 秀俊(東京大学大学院)

各国の文化財保護制度に関する研究会（ F ）

各国の文化財保護は、国ごとに構築された保護の制度に基づいて進められている。国際文化財保存修復協力センターでは、東京文化財研究所が国際協力による文化財保存活動を進めていく上での情報を収集するために、また関係する諸機関、団体の活動に役立てていただくために、世界各国の文化財保護制度に関する調査研究をすすめている。これは、各国の文化財保護制度を、文化財保護のための法律、その特徴、法律が成り立った歴史的経緯と文化的背景、文化財そのものの内容と特質、制度を実際に運営していく機構・組織とその機能など、広範な視点から比較研究し、同時に各国の関係機関と情報の交換をはかって双方の文化財保護制度についての認識を深め、今後の国際協力活動のための基盤を築いていこうとするものである。

2001年11月28日には、「中国・山西省の文化財と文化財保護の現状」をテーマとして文化財保存修復研究協議会を開催し、中国・山西省の文化財保護の状況を文化財の内容と制度の両面から研究した。それに引き続いて、来日中の陝西省考古研究所隋唐研究室主任張建林氏と西安文物保護修復センター副主任張在明氏に依頼し、これを第2回目の「各国の文化財保護制度に関する研究会」として、陝西省の文化財保護の状況について報告を受けた。発掘、出土遺物の保存処理という現場で活躍する2人の専門家によって、陝西省の特色ある文化遺産の保護について、具体的な話を聞くことができた。

テーマ：中国・陝西省の文化財保護の現状

日時：2002（平成14）年1月23日 13:00～17:00

会場：東京文化財研究所 会議室

出席者数：38名

「陝西省における考古発掘と文物保護の現状」 陝西省考古研究所 張建林

「西安文物保護修復センターの概況」 西安文物保護修復センター 張在明

研究指導・研修等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
国際研修会「漆の保存と修復」(E04)	修復技術部	91
博物館・美術館等の保存担当学芸員研修(D06)	保存科学部	92
連携大学院(G)	保存科学部	94
博物館学実習(B14)	美術部	95
文化財の材質に関する調査(D)	保存科学部	96
文化財の修復及び整備に関する調査指導(E)	修復技術部	98
美術館・博物館等館内の環境調査(D)	保存科学部	98
文化財の生物被害に対する調査指導(D)	保存科学部	101
龍門石窟研究所保護研究室研究員の研修(F)	国際文化財保存修復 協力センター	101

国際研修「漆の保存と修復」2001 (E04-01-1/5)

目 的

東洋を代表する工芸品である漆芸品は、16世紀以来、ヨーロッパ・アメリカを中心に輸出され、美術館・博物館・城郭・寺院などに保管されてきた。とくに、蒔絵・螺鈿などで飾られた豪華な家具や調度などの日本製漆器は、ヨーロッパの人々にとって憧れの的であった。近年、これらの漆器の保存と修復についての研究が進み、各地で研究発表が行われるようになった。しかし、日本製漆器の保存修復を行うには、素材・木地・塗り・装飾などの基礎的理解と実技研修が必要である。本研修は、漆芸品の基礎的な演習を通して、研修参加者に漆に関わる基礎知識を伝えるものである。

研修日程 2001年10月3日(火)～10月19日(金)
 研修場所 東京文化財研究所修復技術第二修復アトリエ
 研修対象 漆芸品に興味のある学芸員および修理担当者
 研修内容

講 義

日本漆器の歴史	高橋 隆博	関西大学教授
日本の文化財修復について	室瀬 和美	目白漆芸文化財研究所所長
「大般若経厨子(クリーブランド美術館蔵)」の修復について	北村 昭斎	漆芸修復家、漆芸作家
Japanese Crafts Collection of Budapest National Museum in Hungary	LENCZ, Balazs	ブタペスト国立博物館
「樹下鳥獣蒔絵螺鈿洋櫃」の修復について	山下 好彦	漆芸修復家
「黒漆兜(雑賀鉢)」の修復について	田口 善明	漆芸修復家
「鳳凰文蒔絵螺鈿矢筒」の修復について	勝又 智志	漆芸修復家
高分子化学から見た漆の世界	川野邊 涉	修復技術部・室長
世界の漆	加藤 寛	修復技術部・室長

実技	塗り	平蒔絵	螺鈿
10月3日	木地固め		
4日	布貼り		
5日	布目擦り	上塗り	
(7日～9日 Excursion (石川県立輪島漆芸美術館、印籠製作北村工房、石川県立美術館))			
10日	地付け	置目取り	置目取り
11日	切粉付け		薄貝貼り
12日			梨地 高上げ
15日	錆付け		上塗り
16日	錆研ぎ 下塗り	平蒔絵 針描	平蒔絵 針描
17日	下塗り研ぎ 中塗り	粉固め	粉固め
18日	上塗り	磨き 仕上げ	磨き 仕上げ

Participant's list	JOHNSON, Benita	オーストラリア国立美術館
	BAUMEISTER, Mechthild	メトロポリタン美術館
	REUSS, Margrit Elisabeth	ライデン国立民俗学博物館
	KIRCHNER, Margarita	ARQ-INFAD
	ALLODI, Elena	ENAIIP
	CHOI, Yunsun	ドゥ・モントフォート大学
	TAIE, Robert	パプアニューギニア国立博物館
	BRUNSKOG, Maria	ゲーテボルグ大学
	MALENKA, Sally	フィラデルフィア美術館

< 報告書 > 国際研修「漆の保存と修復」

博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 (D06-01-1/5)

(1) 保存担当学芸員研修 期間：平成13年7月9日(月)～19日(金) 参加者数 23名

近年博物館・美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理などの保存に関する設備が整備されて保存部門を担当する職員が配置されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場がないのが現状である。そのために博物館、美術館などの学芸員の保存担当者を対象に、文化財の科学的保存に関する基本的な知識及び技術について研修を行い、その資質の向上を持って文化財の保護に資することを目的とし、第18回研修会を開催した。

7月9日(月)

保存科学	総論		三浦定俊
保存環境	各論	文化財の材質と構造	佐野千絵
保存環境	各論	温湿度	石崎武志
保存環境	実習	温湿度測定機器の取扱い	石崎武志

7月10日(火)

保存環境	各論	大気汚染とその影響	平尾良光
保存環境	各論	室内汚染	佐野千絵
保存環境	各論	展示・梱包ケースの温湿度調節	東京国立博物館 神庭信幸
保存環境	実習	湿度の制御法	石崎武志
保存環境	各論	光と劣化・照度基準	佐野千絵

7月11日(水)

生物被害	概論		木川りか・山野勝次
生物被害	各論	生物防除法	木川りか
生物被害	実習	文化財害虫同定	山野勝次・木川りか
生物被害	実習	殺虫処置1	木川りか・石崎武志

7月12日(木)

調査手法	各論	画像計測	三浦定俊
調査手法	各論	材質調査	早川泰弘
劣化と保存	各論	日本画	増田勝彦
劣化と保存	各論	紙	増田勝彦
劣化と保存	各論	漆工品	加藤寛

7月13日(金)

生物被害	実習	殺虫処置2	木川りか・石崎武志
生物被害	各論	日常管理	木川りか・佐野千絵
生物被害	実習	各館の現状についての討論	佐野千絵・木川りか

7月16日(月)

劣化と保存	各論	油彩画	東京芸術大学 歌田真介
劣化と保存	各論	木造品	西浦忠輝
劣化と保存	各論	繊維	佐野千絵
保存環境	実習	調査1	石崎武志・佐野千絵・木川りか

7月17日(火)

ケーススタディ	博物館・美術館における収蔵・展示の問題とその対策		三浦定俊・石崎武志・佐野千絵・木川りか
---------	--------------------------	--	---------------------

7月18日(水)

劣化と保存	各論	修復材料	川野邊渉
劣化と保存	各論	考古資料(無機)	青木繁夫

劣化と保存 各論 考古資料(有機)
 保存環境 実習 調査2
 7月19日(木)
 博物館の設計と防災計画

青木繁夫
 石崎武志・佐野千絵・木川りか

三浦定俊

研修参加者名及び所属

岩尾徳信	大分市美術館	富坂 賢	文化庁文化財部美術学芸課
大下芳博	(財)出光美術館	新田太郎	東京都江戸東京博物館
梶 光信	高知県立美術館	野口 文	福岡市博物館
可児光生	美濃加市民ミュージアム	橋口文雄	和泊町歴史文化管理センター和泊町歴史民俗資料館
北村仁美	東京国立近代美術館	長谷川祥子	(財)静嘉堂文庫美術館
紺野浩幸	伊能忠敬記念館	福富 幸	岡山県立美術館
佐藤直樹	国立西洋美術館	古川史隆	滋賀県立安土城考古博物館
篠崎茂雄	栃木県立博物館	森下貴久美	石川県輪島漆芸美術館
杉田真珠	川崎市市民ミュージアム	安井裕雄	岩手県教育委員会事務局美術館整備室
杉山左近	(財)今日庵茶道資料館	吉井隆雄	光記念館
高木敬子	香川県歴史博物館	吉岡栄美子	国文学研究資料館
田中正夫	埼玉県立博物館		

(2) 資料保存地域研修

博物館・美術館などの文化財公開施設における資料の保存は、保存を担当する学芸員の努力によっていることはもちろんであるが、学芸員以外の館長、事務官や警備員、監視員、空調機器の管理・保守作業員など、博物館の様々な業務にたずさわる多くの人々の理解がなければ、円滑に進まない。特に2004年末の臭化メチルの全廃に向け、IPM(総合的害虫管理)を実施するためには、できるだけ多くの館関係者に文化財の保存に関する基礎的な知識を理解してもらふ必要がある。本研修は文化財保護に関する基礎的な知識を、文化財公開施設に勤務するできるだけ多くの職員に短い日数で学んでもらうため、各地の博物館協議会などの協力を得て1998年度より開催するものである。

[第5回] 平成13年9月5日、於：神奈川県立歴史博物館、共催：神奈川県博物館協会、参加者数 約 50名
 プログラム・講師

保存環境調査の概要	三浦 定俊
温湿度の制御と管理	三浦 定俊
照明の制御と管理	佐野 千絵
空気汚染物質の制御と管理	佐野 千絵
生物劣化の制御と管理	木川 りか

[第6回] 平成13年12月14日、於：滋賀県立琵琶湖博物館、共催：滋賀県博物館協議会、
 後援 滋賀県教育委員会、参加者数 約 85名

プログラム・講師

保存環境調査の概要	三浦 定俊
温湿度の制御と管理	三浦 定俊
照明の制御と管理	三浦 定俊
空気汚染物質の制御と管理	佐野 千絵
生物劣化の制御と管理	佐野 千絵

[第7回] 平成13年1月17日～18日、於：長野県立歴史館、共催：長野県博物館協議会、
後援 長野県教育委員会、参加者数 約 111名

プログラム・講師

保存環境調査の概要	三浦 定俊
温湿度の制御と管理	石崎 武志
照明の制御と管理	石崎 武志
空気汚染物質の制御と管理	佐野 千絵
生物劣化の制御と管理	佐野 千絵

(3) 博物館・美術館等保存担当学芸員フォローアップ研修、平成13年6月6-7日、於：東文研、参加者 15名

当研究所で開催している博物館・美術館等保存担当学芸員研修は、昭和59年に始まる長い歴史を持ち、これまでの修了者数も350名以上にのぼる。それら修了生の活躍により、当研修は保存科学の知識の普及のために大きな役割を果たしてきた。しかし2004年末の殺虫燻蒸剤臭化メチル全廃を前に、生物被害防止対策が予防を中心にしたものになりつつあるなど、時代の進展に伴いこれまでとは違った新しい知識が学芸員に要求されている。そこで本研修は、これまでの保存担当学芸員研修修了者を対象に、その職務に必要な最新の知識を常に持てるよう、再研修を行おうとするものである。平成13年度は試行版として、平成12年度の保存担当学芸員研修検討会参加者を中心に行った。平成14年度以降は、研修修了生に対して募集する。

プログラム・講師

温湿度制御の新しい考え方 - 資料の水分量調節	石崎 武志
照明の新技术 - 累積照度	三浦 定俊
空気環境の諸問題 - 室内汚染物質	佐野 千絵
生物被害防除の新しい考え方 - IPM	木川 りか

連携大学院 東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学教室 (G)

1995(平成7)年4月より東京芸術大学大学院と連携して大学院教育に従事し、21世紀の文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学教室は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座の2講座から成っている。各講座3名の研究所所員が併任教官として研究教育指導に当たっている。

大学院学生の定員は、修士・博士課程ともに各学年2名である。2001(平成13)年度は2名の修士課程大学院生が在籍した。

(1) 併任教官及び主たる担当授業

保存環境学講座

併任教授	三浦 定俊 (保存科学部長)	保存環境計画論 (前期)
併任教授	石崎 武志 (保存科学部物理研究室長)	保存環境学特論 I (後期)
併任助教授	佐野 千絵 (保存科学部生物科学研究室長)	保存環境学 (後期)

修復材料学講座

併任教授	青木 繁夫 (修復技術部長)	修復計画論 (後期)
併任教授	加藤 寛 (伝統技術研究室長)	修復材料学特論 (前期)
併任助教授	川野邊 渉 (修復材料研究室長)	修復材料学演習 (前期)

客員教授 渡邊 明義 (所長)

助手 谷口 陽子 (平成11年9月～平成13年10月)

是澤 紀子 (平成13年11月～)

(2) 文化財保存学演習

平成 13 年 4 月 24 日

「伝統的材料 漆・糊についての講義と実習」(於：東京文化財研究所)

- 1)さまざまな糊について 川野邊 渉 助教授
- 2)さまざまな漆について 日本産漆から東南アジアの漆まで 加藤 寛 併任教授

(3) 修士論文指導

保存環境学講座(指導教官 佐野 千絵 助教授)

森 克之 題目「赤色有機色素の保存に関する研究
- 室内環境における色料の変色」

修復材料学講座(指導教官 川野邊 渉 助教授)

沓名 貴彦 題目「焼損木材の強化処理に関する研究」



芸大に於ける講義風景

博物館学実習(B14-01/1/5)

日本近代の画家黒田清輝の作品、資料を所蔵・展示する黒田記念館を持つ美術部では、博物館学教育に資するため、毎年、博物館学実習を開催している。黒田記念館の性格上、実習内容は日本の近代美術資料に関するものが主となっている。13年度は下記の日程で行われた。

期日：8月27日 9月1日 会場：東京文化財研究所 参加者：10名

プログラム <日本近代美術資料を中心とした実習>

第1日 8月27日(月)

10:00	オリエンテーション	美術部主任研究官	山梨絵美子
10:30	展示について	美術部黒田記念近代現代美術研究室長	田中 淳
11:30	東京国立文化財研究所所蔵の美術資料	美術部主任研究官	山梨絵美子
13:00~14:00	近・現代美術資料の収集・作成の意義と現状	美術部黒田記念近代現代美術研究室	
14:00~17:00	近・現代美術資料の収集・作成	美術部黒田記念近代現代美術研究室	

第2日 8月28日(火)

10:00~11:00	美術史学研究と情報処理	情報調整室研究員	塩谷 純
11:00~12:00	美術史研究と画像処理	美術部広領域研究室長	島尾 新
13:00~17:00	近・現代美術資料の収集・作成	美術部黒田記念近代現代美術研究室	

第3日 8月29日(水)

全日	近・現代美術資料の収集・作成	美術部黒田記念近代現代美術研究室	
----	----------------	------------------	--

第4日 8月30日(木)

10:00~11:00	文化財の保存について	保存科学部長	三浦 定俊
11:00~12:00	文化財の修復について	修復技術部長	青木 繁夫
13:00~17:00	近・現代美術資料の収集・作成	美術部黒田記念近代現代美術研究室	

第5日 8月31日(金)

10:00～12:00 近・現代美術資料の収集・作成
 13:00～15:00 近・現代美術資料の収集・作成
 15:20～17:00 美術品の調査について

美術部黒田記念近代現代美術研究室
 美術部黒田記念近代現代美術研究室
 美術部主任研究官 勝木言一郎
 美術部広領域研究室研究員 津田 徹英

第6日 9月1日(土)

全日 展覧会見学とまとめ

今年度は5大学から10名の参加者があった。最終日に行ったアンケート調査の結果、内容等について、下記のような回答が得られた。

- 1 内容の範囲について
 画像処理、保存・修復などの講義も含まれていて研究所の特色が理解できた。
 美術館と異なる研究機関のあり方を知ることが出来る内容だった。
 多岐に渡り、盛りだくさんでよかった。
- 2 内容の難易度について
 大変わかりやすかった。
 実際の作業を見学できたのも理解を深めるのに役立った。
 大変興味深い内容だったので、もう少し1単元の時間を伸ばして内容的にも深めてほしい。
- 3 実習環境について
 とても綺麗な建物で、部屋も環境も快適だった。
- 4 その他、実習についての意見
 漆の修復を見ることができ、感動した。
 実際の作業をしている所を見、現場で活動している人から話を聞けてよい体験になった。
 黒田記念館が改修のために見学できず、残念だった。

以上、内容、実施形態について実習生の8割以上の満足感が得られるものであったことがうかがえる。

文化財の材質・構造に関する調査 (D)

(1) 文化財の材質調査

金属製文化財を中心に、その材質やさび・付着物等に関する化学組成および構造解析の測定、さらには材料の産地推定等に関する調査を行った。

総依頼件数 43件 約280試料 (2001.04～2002.03)

	受付日	分析依頼元	主な資料	試料数
1	2001.04	東京大学	楽浪土城出土青銅器	32
2	2001.05	愛知県埋文センター	耳環、銅鏝	17
3	2001.05	目白漆芸文化財研究所	蒔絵螺鈿製品	3
4	2001.05	修復技術部	銅釘	6
5	2001.05	東京文化財研究所美術部	在外日本美術品・絵画	1
6	2001.06	元興寺文化財研究所	連弧紋銘帯鏡	1
7	2001.06	愛知県埋文センター	帯金具	6

	受付日	分析依頼元	主な資料	試料数
8	2001.06	島根県埋文センター	三稜鏃	1
9	2001.06	長崎県芦辺町教育委員会	分銅	1
10	2001.06	奈良大学	和鏡	1
11	2001.06	東京文化財研究所美術部	仏像彩色	1
12	2001.06	沖縄海洋博記念公園	琉球漆器	15
13	2001.06	東京芸術大学	薬師三尊十二神将図	1
14	2001.07	小西美術工藝社	蒔絵扉	1
15	2001.07	元興寺文化財研究所	耳環	38
16	2001.08	東博小沢修理所	鋌の足(室町時代)	8
17	2001.08	東都文化財保存研究所 / 北区教育委員会	珠文鏡	1
18	2001.08	福島県立博物館	鉄剣象嵌	1
19	2001.08	東京文化財研究所美術部	在外日本美術品・絵画	1
20	2001.08	根津美術館	青銅製品鏤	3
21	2001.09	東京大学・東京国立博物館	楽浪土城出土品	15
22	2001.09	三重県四日市市立博物館	青銅製仏像	2
23	2001.10	福岡県春日市教育委員会	銅剣・銅鏃・銅鏡	4
24	2001.10	元興寺文化財研究所	細形銅剣	2
25	2001.10	元興寺文化財研究所	銅鏃	3
26	2001.10	元興寺文化財研究所	銅剣・銅釧	6
27	2001.10	文化財保存支援機構	台湾・建築彩色	
28	2001.11	東京国立博物館	青銅器	27
29	2001.11	文京区教育委員会	耳環	1
30	2001.11	東京芸術大学	銅製目貫	1
31	2001.11	滋賀県 MIHO MUSEUM	とんぼ玉	3
32	2001.11	岡山県大原美術館	油彩画	3
33	2001.12	京都府・正伝寺	襖絵断片	5
34	2001.12	埼玉県さきたま資料館	鉄剣	1
35	2002.01	文化財エオ	出土鉄製品	1
36	2002.01	文化財エオ	銅鏃 他	2
37	2002.01	三の丸尚蔵館	日本画	5
38	2002.01	静嘉堂文庫美術館	日本画	1
39	2002.01	東京芸術大学	彫刻彩色	1
40	2002.02	中近東文化センター	カマン(2001)出土品	23
41	2002.02	東京国立博物館	中国青銅器	29
42	2002.02	文化庁	銅製品鏤	1
43	2002.02	東京文化財研究所修復技術部	銅剣、環状銅製品、鏡片	5

(2) X線透視撮影による調査

	作品名	所蔵者(依頼者)
絵画	南蛮人渡来図屏風	ソアレス・ドス・レイス国立博物館(ポルトガル)
	羅漢図	静嘉堂文庫美術館
工芸品	琉球漆器(食籠他)	首里城公園管理センター
	琉球漆器(食籠、丸櫃)	浦添美術館
	刀剣	日本美術刀剣保存協会

文化財の修復及び整備に関する調査指導（ E ）

- (1) 国宝高松塚壁画の保存点検（青木繁夫・三浦定俊・佐野千絵・木川りか・石崎武志）
- (2) 史跡キトラ古墳の保存活用等に関する調査委員会（青木繁夫・三浦定俊）
- (3) 史跡宮崎県西都原古墳保存整備指導（青木繁夫）
発掘された横穴古墳を保存するための覆屋と遺構保存処理の指導を行った。
- (4) 史跡千葉市加曽利貝塚住居跡保存整備指導（青木繁夫）
発掘された遺構の保存処理の指導を行った。
- (5) 群馬県指定梨の水平敷石住居跡の保存整備指導（青木繁夫）
発掘された住居跡を保存するための覆屋と遺構保存処理の指導を行った。
- (6) 大阪市中央公会堂の外壁クリーニングについて指導を行った。（青木繁夫）
外壁石材の汚れに対してレーザーを使用したクリーニングを行った。
- (7) 重要文化財鉄湯釜（熊野本宮大社）の保存について指導を行った。（青木繁夫）
- (8) 史跡原爆ドームの保存技術指導委員会（川野邊渉・三浦定俊）
原爆ドームの従来の修理工事を評価し、将来の修復工事の仕様を決定するための助言を行った。
- (9) 重要文化財スチームハンマー（横須賀市）の保存修復指導（川野邊渉・森井順之）
横須賀市に所在する国指定重要文化財 0.5t スチームハンマーおよび、同年に輸入され 1997 年までアメリカ軍横須賀基地内で稼働していた 3t スチームハンマーが、ヴェルニー公園に移送されるのに伴い、その保存修復方法、材料に関する指導助言を行った。
- (10) 重要文化財平井家住宅解体修理に関する指導助言（川野邊渉）
特異な形態の梁が用いられており、虫損によって強度が損なわれており、同形態の部材を入手することもこんなであったために、当該梁の損傷部分を取り除き、内部にカーボンファイバー補強プラスチックによる補強層を形成して再用を可能とした。
- (11) 美浦村川岸屋旅館壁の保存修復に関する指導（川野邊渉）
当該旅館解体時に壁体に描かれた絵の保存方法の指導を行ったが、来年度その絵のある壁体部分を公開することとなったため、展示方法と修復材料と技法を指導している。
- (12) 浦安市郷土博物館所蔵「焼玉エンジン設計図」の保存修復のための指導助言（川野邊渉・早川典子）
近代資料の例として、酸性紙のクリーニングと安定化処置について実験・指導を行った。

美術館・博物館等館内の環境調査（ D ）

国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物館収蔵資料の借用に関して館内環境調査を行い、報告書を作成・提出した。

山形	米沢市新博物館	福井	織田町文化歴史館
福島	福島県文化財センター白河館	静岡	富士市立博物館
茨城	茨城県陶芸美術館	三重	朝日町歴史博物館
千葉	伊能忠敬記念館	京都	宮津市歴史資料館
東京	東京国立近代美術館	京都	(財)細見美術財団細見美術館
神奈川	箱根町郷土資料館	大阪	大阪歴史博物館
新潟	新潟県立歴史博物館	大阪	和泉市いずみの国歴史館
新潟	新潟市美術館	兵庫	兵庫県立美術館(芸術の館)
新潟	上越市総合博物館小林古溪記念館	広島	三原市リージョンプラザ
富山	砺波市美術館	沖縄	沖縄県立公文書館
石川	薬師寺収蔵庫		

現地調査は青森県立美術館（仮称）、秋田市立千秋美術館、川越市山車保管庫、戸定歴史館、谷保天満宮宝物館、明治神宮宝物館、東京国立近代美術館、（財）三康図書館、箱根神社収蔵庫、箱根町立郷土資料館、ポーラ美術館、三方町縄文博物館、松本市美術館、MOA美術館、朝日町歴史博物館、曳山博物館、細見美術館、大阪府立狭山池ダム資料館、大阪市立住まいのミュージアム、大阪歴史博物館、都城市立美術館の21館。また青森県立美術館（仮）など、全国133館の新設既設美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け、助言を行った。これらの館については各館ごとに環境調査ファイルを作成して調査を行っている。

青森	青森県立美術館（仮）	埼玉	川越市美術館（仮）
岩手	岩手県立美術館		川越市山車保管庫
	花巻市博物館（仮）	千葉	伊能忠敬記念館
	一戸町埋蔵文化財センター		大原幽学記念館
	日本現代詩歌文学館		戸定歴史館
宮城	雄勝硯伝統産業会館		城西国際大学水田美術館
秋田	秋田市立千秋美術館	東京	衆議院憲政記念館
山形	米沢市新博物館		日本銀行金融研究所貨幣博物館
	山形市新博物館		国立西洋美術館
福島	福島県文化財センター白河館		東京国立近代美術館
	郡山市立美術館		（財）江戸東京たてもの園
茨城	国土地理院地図と測量の科学館		日本刀装具美術館
	茨城県陶芸美術館		松岡美術館
	茨城県立近代美術館		泉屋博古館東京分館（仮）
	（財）水府明徳会彰考館徳川博物館		明治神宮宝物館
栃木	栃木県立博物館		谷保天満宮宝物館
	栃木市美術館		出光美術館
	西那須野町郷土資料館		物流博物館
	葛生町美術館建設準備室		（財）三康図書館
群馬	藤岡市埋蔵文化財センター		松下電工（株）美術館（仮）
神奈川	箱根町立郷土資料館	京都	宇治市源氏物語ミュージアム
	箱根神社収蔵庫		宮津市歴史資料館
	八剣神社収蔵庫		八幡市松花堂交流施設博物館（仮）
	ポーラ美術館		京都服飾文化研究財団
	川崎市岡本太郎美術館		（財）今日庵茶道資料館
	三溪園保勝会		許波多神社収蔵庫
	日本郵船歴史博物館		（財）細見美術館
	彫刻の森美術館	大阪	大阪府立狭山池博物館
新潟	新潟県立歴史博物館		大阪市すまいのミュージアム
	新潟市美術館		大阪歴史博物館
	上越市立総合博物館小林古溪記念館		和泉市いずみの国歴史館
富山	砺波市美術館		大阪府立大型児童館ビッグバン
石川	薬師寺収蔵庫	兵庫	兵庫県立美術館芸術の館（仮）
福井	福井県公文書館準備室		小野市好古館
	福井市郷土資料館	奈良	万葉文化館
	三方町縄文博物館	和歌山	和歌山県立近代美術館
	織田町文化歴史館		高野山宝物館
山梨	山梨県立美術館		紀州博物館
	山梨県立博物館	島根	島根県立博物館

長野	長野県立歴史館 松本市美術館 坂城町教育委員会 善光寺宝物殿 田中本家博物館 サンリツ服部美術館 マリーローランサン美術館 水野美術館		島根県立美術館 島根県芸術センター 成羽町美術館 勝央町美術館（仮） 岡山県立吉備路郷土館 大原美術館
岐阜	岐阜県立博物館 セラミックパーク MINO 美濃加茂市民ミュージアム 飛騨世界生活文化センター 中山道広重美術館	岡山	三原リージョンプラザ 大田荘歴史館 吉備国際大学 蘭島閣美術館 王舎城美術宝物館
静岡	富士市立博物館 MOA 美術館	広島	山口県立萩美術館・浦上記念館 下関市立考古博物館 萩市郷土資料館
愛知	名古屋市蓬左文庫 豊橋市二宿本陣資料館 田原町博物館 名古屋ボストン美術館	山口	愛媛 風の博物館歌麿館 高知 高知県立文学館 福岡 北九州市自然史歴史博物館 春日市奴国の丘歴史資料館 伊都歴史資料館
三重	松阪市文化財資料館 朝日町歴史博物館 西来寺収蔵庫 西蓮寺収蔵庫 伊勢神宮神宮文庫	愛媛	佐賀 伊万里市有田焼伝統産業会館 長崎 長崎県立博物館（仮） 長崎県立美術館（仮）
滋賀	滋賀県立安土城考古博物館 （財）長浜曳山文化協会曳山博物館 五個荘町歴史博物館	高知	熊本 熊本県伝統工芸館 大分 大分県立先哲史料館 宮崎 西都原考古博物館 都城市立美術館 清武町埋蔵文化財センター
鹿児島	奄美パーク・田中一村記念館 上野原縄文の森展示施設（仮）	福岡	沖縄 沖縄県公文書館

文化財の生物被害に対する調査指導（ D ）

文化財の虫・カビ等の被害について問い合わせを受け、指導・助言を行った。（佐野千絵・木川りか・山野勝次・三浦定俊）

- (1) 文化財の虫菌害に対する調査指導 4 件
 (2) 相談受付件数 55 件

龍門石窟研究所保護研究室研究員の研修（ F ）

目 的

東京文化財研究所では、世界の貴重な文化遺産である中国の龍門石窟の保存について、中国・龍門石窟研究所と協力して調査、研究をしているが、その協力事業の中で、特に龍門石窟研究所の人材育成は極めて重要な課題であるため、若手の研究者を日本に招聘し、石窟の保存修復に関する種々のテーマについて研修を行っている。

研修内容

一人目の研修生として、財団法人文化財保護振興財団の助成により、2000年11月から2001年9月までの10ヶ月間、馬朝龍研究員を研修した。2001年度前半の研修では、龍門石窟で問題となっている環境整備を念頭に置き、近々龍門石窟で採用予定の野外の環境変化を測定できるDATAMARK観測機器の使用手法とデータ処理技術の習得に努めた。また、科学的な分析手法を研修するため、龍門石窟の彫像表面の彩色や風化生成物の科学分析を行った。

続いて2001年12月からは、国際協力事業団（JICA）の助成により、2002年8月までの予定で、二人目の研修生として高東亮研究員を研修している。2001年度後半の研修では、龍門石窟の状況と類似した問題を持つ日本国内の遺跡として、鎌倉市の「やぐら群」をフィールドとし、そこで起きている遺跡の劣化現象に関して自らの問題意識で解明し、それに対する保存対策を考察していく過程を訓練している。



環境データを読み出す龍門石窟研究所・高東亮研究員
（鎌倉市百八やぐら群にて）

刊行物に関する事業一覧

刊行物の名称	担当部門	頁
『美術研究』(B15)	美術部	105
『日本美術年鑑』(B16)	美術部	105
『芸能の科学』(* C04)	芸能部	105
『保存科学』(D07)	保存科学部	106
『東京文化財研究所年報』(* A03)	情報調整室	107
『文化財害虫事典』(D08)	保存科学部	107
『文化財保護法 50 周年記念国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」報告書』(F11)	国際文化財保存修復協力センター	107
第 7 回アジア文化財保存セミナー「アジア諸国の世界文化遺産 持続的発展と保存」報告書 (F12)	国際文化財保存修復協力センター	108
第 8 回アジア文化財保存セミナー「アジアの世界文化遺産 考古遺跡の活用しながらの保存」報告書 (F13)	国際文化財保存修復協力センター	109
『国際文化財保存修復研究会報告書』(F14)	国際文化財保存修復協力センター	109
『文化財保存修復研究協議会報告書』(G02)	保存科学部	109
『民俗芸能研究協議会報告書』(* C04)	芸能部	110
『近代歌舞伎の伝承に関する研究』報告書 (* C01)	芸能部	111
『独立行政法人東京文化財研究所所蔵 X 線フィルム目録 II』(E)	修復技術部	111
『林忠正宛書簡集』(B17)	美術部	111
『大正期美術展覧会出品目録』(B18)	美術部	112
『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書』(* E05)	修復技術部	112
『蔵書目録』(A05)	情報調整室	112
『黒田清輝《智・感・情》 美術研究作品資料 第 1 冊』(* B01)	美術部	113
『日韓共同研究報告書』(* E03)	修復技術部	113
『敦煌莫高窟壁画保存修復に関する日中共同研究報告』(* E02)	修復技術部	113
『日中壁画修復用語集』(* E02)	修復技術部	113
ユネスコ国際ワークショップ報告書 (C07)	芸能部	113
『未来につなぐ人類の技 2 船舶の保存と修復』(* E01)	修復技術部	114
国際研修「漆の保存と修復」報告書 (* E04)	修復技術部	114
『東文研 NEWS』(* A03)	情報調整室	115
『東京文化財研究所概要』(* A03)	情報調整室	115

* 注 ・『芸能の科学』及び『民俗芸能研究協議会報告書』は、芸能部出版関係事業（ C04 ）の一環として実施した。

・『東京文化財研究所年報』及び『東文研 NEWS』・『東京文化財研究所概要』は、広報企画事業（ A03 ）の一環として実施した。

- ・『近代歌舞伎の伝承に関する研究』報告書は、伝統芸能の特殊上演に関する調査研究 能・狂言の特殊技法、歌舞伎・文楽の稀少演目の上演実態に関する調査研究（ C01 ）の一環として実施した。
- ・『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書』は、在外日本古美術品保存修復協力事業（ E05 ）の一環として実施した。
- ・『黒田清輝《智・感・情》 美術作品研究資料 第一冊』は、重要美術作品資料集成に関する研究（ B01 ）の一環として実施した。
- ・『日韓共同研究報告書』は、文化財の周辺環境の影響等に関する研究（ E03 ）の一環として実施した。
- ・『敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究報告』及び『日中壁画修復用語集』は、敦煌莫高窟壁画の保存修復研究 日中共同研究（ E02 ）の一環として実施した。
- ・『未来につなぐ人類の技 2 船舶の保存と修復』は、近代の文化遺産の保存修復に関する研究（ E01 ）の一環として実施した。
- ・国際研修『漆の保存と修復』報告書は、国際研究集会 漆の保存と修復（ E04 ）の一環として実施した。

『美術研究』(B15-01-1/5)

昭和7年1月、東京文化財研究所の前身である美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第1号を刊行。以来、70年近くにわたって、日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について、研究論文・図版解説・研究資料等を掲載し続けている。本年度は374、375、376号を刊行した。



・『美術研究』第374号

(論 文) 朝鮮王朝肖像画の類型及び社会的機能
(論 文) 後期印象派・考 - 一九一二年前後を中心に(中の三)
部 報

『美術研究』

趙 善美
田中 淳

・『美術研究』第375号

(論 文) 親鸞の面影 - 中世真宗肖像彫刻研究序説 -
(論 文) 日本のセザンヌ - 一九二〇年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について -

津田徹英

永井隆則

・『美術研究』第376号

(論 文) 雪舟等楊の研究(四) - 秋冬山水図の情報学(下) -
(論 文) 近赤外線画像の形成と利用
(図版解説) 焰口餓鬼図 千葉・観音教寺所蔵
(研究資料) 珊瑚会資料集

島尾 新

城野誠治

中野照男

菊屋吉生・塩谷 純編

『日本美術年鑑』(B16-01-1/5)

日本美術年鑑は各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録する刊行物である。美術部では当所の前身である帝国美術院附属美術研究所が昭和11年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。平成12年版は、近年の情報量の増大にともない編集作業が限界に近付きつつあるため、より精選した情報収集を試みたこと、および近年の美術研究の動向にかんがみ、従来の年史、主要美術展覧会、美術文献目録、物故者による構成、および古美術と近現代美術の分類を見直したことにより、刊行を1年繰り延べ、平成13年度の刊行となった。独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所編集・発行の第1号となる平成12年版は下記のような構成・編集に改められた。

平成11年美術界年史

美術展覧会(企画展、作家展、団体展)

美術文献目録

定期刊行物所載文献

美術展覧会図録所載文献(企画展、作家展)

物故者

従来、美術展覧会の欄は古美術と近現代美術に分けて編集していたが、平成12年版からはデータの統合を行った。美術展覧会図録所載文献についても同様である。また、定期刊行物所載文献目録においても、総説とその他(美術関係者、書評、時評、海外展)の部分は古美術と近現代美術のデータの統合を行った。内容の厳選と重複の削減により、B5版264頁での刊行となった。



「日本美術年鑑」

『芸能の科学』(C04-01-1/5 : 芸能部出版関係事業の一環として実施)

芸能の科学は、古典芸能や民俗芸能に関する研究論文・調査報告・資料翻刻等を掲載している。

『芸能の科学』第29号

浄瑠璃と歌舞伎における知盛像の変遷 - 覚書き -

鎌倉 恵子

東北大学狩野文庫蔵『箏曲示例』をめくって

野川美穂子

追儼・修正会結願の鬼行事 その地方的受容と展開 - 九州地方を中心に -

中村 茂子

民俗芸能のマニュアル作成における成果と課題 - 青森県の『伝承マニュアル』を例に -

小野寺節子

[資料紹介]『間拍子舞』の翻刻と解題

小田 幸子



『芸能の科学』

『保存科学』(D07-01-1/5)

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査・研究、受託研究報告等の論文・報告および修復処置概報等を掲載している。

『保存科学』第41号 掲載論文一覧

国宝源氏物語絵巻に見られる彩色材料について

早川 泰弘・三浦 定俊・四辻 秀紀・徳川 義崇・名児耶 明

古糊の物性と化学組成に関する基礎的研究

早川 典子・木川 りか・川野邊 渉・樋口 恒・岡 泰央・岡 岩太郎

古糊生成過程の生物学的考察 物性値との関連において

木川 りか・早川 典子・川野邊 渉・樋口 恒・岡 泰央・岡 岩太郎

文化財害虫の低温処理法に関する研究 紙資料について

石崎 武志・木川 りか・松島 朝秀

国宝・大浦天主堂の漆喰壁着生生物の調査と対策について

木川 りか・三浦 定俊

フゴッペ洞窟における照明制御による緑色植物繁茂への対策

朽津 信明・浅野 敏昭・江本 匡・伊藤 尚久・田保(石原)知佳・三田 直樹・芳賀 卓・石田宏司

変色試験紙上に捕捉された化学種(3) 室内空気汚染物質の捕捉速度と限界

佐野 千絵・大村 佳子・大澤 知栄子・三浦 定俊

展示使用材料から発生する汚染物質とその対策(事例報告) 展示用ディスプレイと展示室改修の影響

佐野 千絵・早川 泰弘・三浦 定俊

唐招提寺御影堂厨子内の温湿度

三浦 定俊

外装用漆塗装法の耐候性向上に関する試み(2)

島津 美子・井口 智子・川野邊 渉・加藤 寛・板垣 義郎・館川 修

臨海環境における丹塗りの変色に関する研究

島津 美子・森井 順之・川野邊 渉

幕末期の絵馬に観察される青色顔料の変化について 岩手県中部地方に伝わる「供養絵額」の例

朽津 信明・霜村 紀子

龍門石窟の彩色および風化生成物に関する研究

秋山 純子・馬 朝龍・早川 泰弘

国宝白杵磨崖仏群次期保存修復計画のための調査研究



『保存科学』

森井 順之・朽津 信明・神田 高士・川野邊 渉
 伝統的焼付漆の応用的研究 蒔絵ブランクの復元
 堀 聖子・加藤 寛・高橋 千恵
 展示公開施設の館内環境調査報告 平成12年度
 石崎 武志・佐野 千絵・三浦 定俊
 平成13年度修復処置概報
 修復技術部

『東京文化財研究所年報』(A03 の一環として実施)

年報は、毎年、前年度における研究活動の経過や成果をまとめて報告する。研究活動に対する評価委員会の資料としても活用できるよう編集している。2000 年度版は、独立行政法人化以前の東京国立文化財研究所における平成 12 年度の活動を報告した。



2000 年度版 2001 年 11 月
 発行 A4 版、全 149 頁

『文化財害虫事典』(D08-01-1/1)

文化財害虫の殺虫に使用されてきた燻蒸剤である臭化メチルの 2004 年末全廃を控え、世界中で予防を主とする総合的な害虫管理法、IPM が対策の中心になりつつある。これは、環境条件を整えて害虫による被害を未然に防ぎ、また害虫の発生をモニタリングしながら適切に対応・管理する方法であり、そのためには文化財害虫の種類、その生態、加害材質の知識が欠かせない。

そこで保存科学部では、多くの美術館・博物館・文書館等の担当の方々に文化財害虫をよりよく知ってもらうための「文化財害虫事典」を編集した。この本は文化財に関する初めての害虫事典で、加害された材質から害虫をさがせる工夫や、各害虫の実物大イラスト・豊富な被害状況のカラー写真により、害虫の具体的なイメージがつかめるようになっていることを大きな特長とする。また、各害虫の生態や防除法などのほか、文化財害虫全般についての解説、予防法、駆除法について最新の知識、トピックスを扱ったコラムなどが盛り込まれ、学芸員室などの壁に貼れるように、主要な文化財害虫のカラーポスターも付録とした。編集に際しては、現場で活用していただけるものになることを第一に心がけた。各県立図書館や各県立博物館等、文化財保護に携わる方々に利用していただけるよう、公開性の高い施設に寄贈する予定である(クバプロより 2001 年 12 月公開、5,000 円外税)。



『文化財保護法 50 周年記念国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」(第 24 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会) 報告書』(英文)(F11-01-1/1)

(英文) Report of International Symposium in Commemoration of the 50th Anniversary of Japanese Law for Protection of Cultural Properties "Cultural Diversity and Heritage"

平成12年12月18日～21日に、文化庁との共催で東京国立博物館大講堂を会場として開催したシンポジウムの報告書である。本シンポジウムは、1950年に制定された文化財保護法の50周年を記念して開かれたものであり、基調講演・一般講演者、あるいはパネリスト・議長として海外から19名、日本から14名の登壇者を得、一般参加者は1日平均約200名を数える盛会であった。報告書は、講演とシンポジウム会場における発言記録を中心に編集した。内容は以下のとおりである。

Introduction	Hideo Noguchi
Tokyo Declaration on Cultural Diversity and Heritage	
Record of the Symposium	
DAY 1 Addresses	Akiyoshi Watanabe, Masamine Sasaki
Explanations	Hidetoshi Saito, Hideo Noguchi
Keynote Lectures	Senake Bandaranayake, Yoneo Ishii
DAY 2 Session1: Exploration of Cultural Diversity and Diverse Heritage	
Chairpersons	Said Zulficar, Tadateru Nishiura
Presentations	Augusto Villalon, Makoto Motonaka, Sylvie Guishard-Anguis, Doudou Diene
Session2: Understanding, Respecting, Sharing	
Chairpersons	Dinu Bumbaru, Shuji Matsumoto
Presentations	Jiro Sasamura, Gaye Sculthorpe, Omak Apang Azedine Beschouch
Panel Discussion 1: Cultural Diversity and the Role of Heritage	
Coordinator	Joan Domicelj
Panelists	Senake Bandaranayake, Lam Yiu-tong, Edi Sedyawati Dinu Bumbaru
DAY 3 Session3: Threatening or Enriching Cultural Diversity	
Chairpersons	Joan Domicelj, Yoshifumi Muneta
Presentations	Lazar Sumanov, Shuzo Ishimori, Bruno Pedretti Michael Jansen
Session4: Protection and Succession of Heritage	
Chairpersons	Edi Sedyawati, Satoshi Yamato
Presentations	Mali Voi, Said Zulficar, Akio Oshima, Herb Stovel
Panel Discussion 2: Sustainable Preservation of Heritage	
Coordinator	Hideo Noguchi
Panelists	Akiyoshi Watanabe, Olabiyi Yai Nobuko Inaba, Siegfried RCT Enders
DAY 4 General Discussion: Action Plan for Sustaining Diversity of Heritage	
Chairpersons	Hidetoshi Saito, Hideo Noguchi Joan Domicelj, Herb Stovel
Annex	UNESCO Declaration on Cultural Diversity, adopted by the General Conference at its 31st Session, Paris

第7回アジア文化財保存セミナー「アジア諸国の世界文化遺産 持続的発展と保存」報告書（英文）
 (F12-01-1/1)

Proceedings of the Seventh Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage "The World Cultural Heritage in Asian Countries --Sustainable Development and Conservation--"

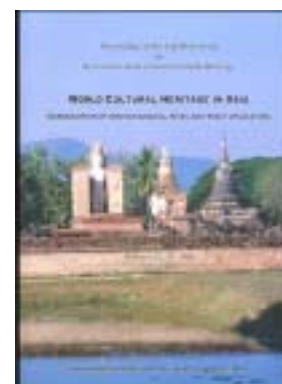
平成9年10月13日～18日に、京都（サイト・セミナー）および東京（代々木・国立オリンピック記念青少年総合センター）で開催された第7回アジアセミナーの報告書である。アジア各国の世界文化遺産のうち、都市遺産を中心に取り上げ、その今日的課題である持続的発展と保存との調和をテーマとした。会期中にコンクレーションを採択し、各国からの論文と共にセンターのホームページに掲載して、世界に発信した。

Preface	Akiyoshi Watanabe
Keynote Speeches	Serge Domicelj, Richard Engelhardt, Nobuko Inaba
General Chairperson	Yukio Nishimura
Country Reports	Young Hoon Kim(Korea), Amita Baig(India), Sounantha Kanlaya(Laos), Yuichi Ishikawa(Japan), Shinji Kawahara(Japan), Surya Sangachhe(Nepal), Truong Quock Binh(Vietnam), Prateep Phengtako(Thailand) Ihsan Nadiem(Pakistan), Dong Wei(China), Senake Bandaranayake(Sri Lanka)

Discussions & Conclusion

第8回アジア文化財保存セミナー「アジアの世界文化遺産 考古遺跡の活用しながらの保存」報告書（英文）
 (F13-01-1/1)

Eighth Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage:
 World Cultural Heritage in Asia
 Conservation of Archaeological Sites and Their Utilization



SUMMARY

KEYNOTE SPEECH

COUNTRY REPORTS: <Sukhothai; Thailand> <Borobudur; Indonesia>
 <Moenjodaro; Pakistan> <First Qin Emperor site, China> <Tumul; Korea> <Heijo
 Palace; Japan> <Ajanta and Ellora Caves; India> <Paharpur, Bnagladesh> <Angkor
 sites; Cambodia>

INTERNATIONAL REMARKS: <UNESCO> <ICCROM>

OVERALL QUESTION and ANSWER

OVERALL DISCUSSION

CONCLUSION

『国際文化財保存修復研究会報告書』（ F14-01-1/1）

この報告書は、国際文化財保存修復研究会で行われた報告、質疑応答、総合討議等の内容をまとめたものである。2001年度は第9回、第10回研究会について、それぞれ報告書を作成した。

第9回国際文化財保存修復研究会報告書（2001年10月発行）

「シリア・パルミラ東南墓地F号墓の修復と復元」

奈良県立橿原考古学研究所 西藤清秀

滋賀県立大学 濱崎一志
「イタリア・カッツァネッロ遺跡の発掘調査と保存」
京都造形芸術大学 内田俊秀
「東南アジアにおける埋蔵文化財の危機と保存」
鹿児島大学 新田栄治
「総合討議」



第10回国際文化財保存修復研究会報告書（2002年2月発行）

「本研究会の趣旨」
「イスラム社会と“文化”の構造」
「アジアの政治経済と“地域文化”」
「ベトナム文化の多様性：“真正な”ものとは何か」
「総合討議」
「“地域社会”の構造と文化財に対する“視点”」（第10回国際文化財保存修復研究会総括）

東京文化財研究所 岡田健
一橋大学 内藤正典
拓殖大学 岩崎育夫
東洋大学 末成道男

「ルーマニア・プロポタ修道院の保存修復事業報告書」（第8回国際文化財保存修復研究会から）

東京文化財研究所 岡田健
慶應義塾大学 三宅理一

『文化財保存修復研究協議会報告書』（G02-01-1/1）

本協議会は、文化財の保存・修復に関して各種のテーマを取り上げ、保存修復に関する研究成果を発表し、関係の専門家とともに協議をすることを目的として、毎年テーマを定めて開催している。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交代で担当しているが、第30回にあたる2000年度は保存科学部が担当した。なお、報告書の主題、主旨、内容は、以下の通りである。

主 題 光学的方法の明日

主 旨

X線、赤外線などを用いた文化財の画像計測は、「光学的方法」として呼び慣わされ、代表的な非破壊測定法として広く利用されてきた。この手法は1950年代に、東京国立文化財研究所が中心となり、日本美術へ応用し画期的な成果を上げた古くからの調査方法である。光学的方法は貴重な文化財を移動することなく現場で気軽に調査できる手法として、現在もその価値を失っていない。本研究会では近年開発された新しい手法も含めて、「光学的方法」と歴史研究との新たな結びつきの可能性を探ることを目的とする。

内 容

光学的方法の歴史と現在
ポータブル蛍光X線分析装置の利用
光学的手法による可視画像の形成と利用
蛍光画像と三次元蛍光分析
美術史研究と光学的方法
総合討論（司会 米倉 迪夫）

三浦 定俊
早川 泰弘
城野 誠治
佐野 千絵
島尾 新

『民俗芸能研究協議会報告書』（C04-01-1/5：芸能部出版関係事業の一環として実施）

第4回民俗芸能研究協議会報告書を刊行した。

テーマ「民俗芸能の記録作成の方法と活用について」

1. はじめに
2. 事例報告
 - * 報告1 総合的な記録作成 - 東京都豊島区长崎獅子舞の場合を事例に -
小野寺節子（東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室調査員）
 - * 報告2 映像記録作成 - 滋賀県の太鼓踊りの場合を事例に -
長谷川嘉和（滋賀県教育委員会文化財保護課主幹）
 - * 報告3 新メディアによる記録作成 - 田沢湖芸術村の場合を事例に -
荒木一（財団法人 民族芸術研究所）
長瀬一男（たざわこ芸術村デジタルアートファクトリー）
 - * 報告4 記録の活用にあたっての著作権の問題
兼定孝（文化庁長官官房著作権課庶務係長）
 - * 報告5 韓国における民俗芸能の記録作成について
李在弼（韓国国立文化財研究所芸能民俗研究室学藝研究士）
3. 総合討議
4. 参考資料
5. 報告者・アドバイザー一覧



『民俗芸能研究協議会報告書』

『近代歌舞伎の伝承に関する研究』報告書（C01の一環として実施）

近代芸能に関する調査研究報告書として、平成8年度から平成12年度まで、4年計画としておこなった「近代歌舞伎の伝承に関する研究」の報告書を刊行した。

近代歌舞伎と写真メディア

- * 近代のテクノロジーと歌舞伎の変質
神山彰（明治大学教授）
- * マルチメディア時代の芸能研究に関する著作権と入門
浅原恒男（日本俳優協会）
- * 歌舞伎と写真・絵はがき・プロマイド
児玉竜一（芸能部）
付録 東京文化財研究所芸能部所蔵 歌舞伎舞台写真フォト CD 目録
- * 歌舞伎写真の昭和三、四十年代
石井雅子（写真家）・鎌倉恵子（芸能部）

上方歌舞伎の伝承

- * 近代上方歌舞伎の伝承をめぐって
権藤芳一（元大阪学院大学）
- * 戦後の上方歌舞伎
中川芳三（元松竹株式会社）・児玉竜一
付録 雑誌『幕間』総目次



『近代歌舞伎の伝承に関する研究』報告書

『独立行政法人東京文化財研究所所蔵 X 線フィルム目録 工芸資料編 』(E)

東京文化財研究所には、調査等で撮影したかなりの数の X 線フィルムが所蔵されている。それらのフィルムをデジタル化して目録を作成する事業が進行している。この目録は工芸資料に関する X 線フィルムをデジタル化して目録としたものである。収録数は、「国宝」、「重要文化財」指定品を含む約 760 資料に及んでいる。

* 凡 例	iii
* 記載の要領	iv
* 図 版	p1 ~ p152
* 資料名別索引	p153 ~ p158

Correspondance adressée à Hayashi Tadamasu 『林忠正宛書簡集』(B17-01-1/1)

林忠正は、19 世紀後半にパリに日本美術品店を持ち、フランスのみならずヨーロッパのジャポニザンたちと交遊し、日本美術の紹介に努めた。当所には、欧米人から林忠正に宛てた書簡 722 通が、1930 年から保管されてきた。このたび、林の遺族である木々康子氏、および小山ブリジット氏（武蔵大学教授）、馬淵明子氏（日本女子大学教授）、高頭麻子氏（日本女子大学助教授）の協力により、当所の保管する全書簡を翻字、公刊した。本書は、林忠正研究の論考 5 本、書簡 722 通、年譜、事項人名解説、文献目録、索引から成り、A5 版 633 頁。全文フランス語による刊行である。300 部を各機関へ寄贈し、一部国書刊行会から市販となっている。



『林忠正宛書簡集』

当所の前身である帝国美術院附属美術研究所は洋画家黒田清輝の遺言によって設立されたが、法律を志してフランスに留学した黒田が画家志望へと転ずるのには林の影響も大きかったことが、『黒田清輝日記』（中央公論美術出版 昭和 41 年）によって知られる。林は、1900 年パリ万博の日本側コミッショナーを努めているが、同万博には黒田も「湖畔」「智・感・情」などを出品し、また、同年から翌年にかけて再渡欧もしている。こうしたことから、本書簡集の刊行は、黒田清輝研究にも寄与するものである。

『大正期美術展覧会出品目録』(B18-01-1/1)

『大正期美術展覧会出品目録』は平成 9 年度より 4 年間、東京国立文化財研究所美術部第二研究室が中長期研究計画としてあげた「明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品および作家の研究」と、平成 13 年度より独立行政法人化され、新たに開始した美術部黒田記念近代現代美術研究室の研究プロジェクト「昭和前期を中心とする日本近代美術の発達に関する調査研究」の研究成果の一部である。大正期を中心に明治 40 年から昭和 5 年にかけて開催された美術展覧会の出品作品をインデックスとして編集したもので、文展・帝展といった官設の展覧会から院展や二科会などの団体展、赤曜会・金鈴社のような小グループの展覧、そして諸々の博覧会に出品された美術作品をもその対象としている。

編集にあたっては、各団体の史料編纂や先行研究においてすでに出品作がデータ化されているものはそれを利用したが、原則として当時の出品目録・作品図録にあたり、目録を欠くものは開催時、雑誌・新聞に掲載された展評をもとに出品作を洗い出した。その結果、作品件数にして約 41,000 件のデータを収め、作家別の索引も付して複数の展覧会にまたがる出品状況も一覧できるなど、大正期の美術を作品データを通して総覧できる基礎資料集となっている。

収録展覧会

東京勸業博覧会、文部省美術展覧会、国画玉成会、日本彫刻会、仮面会、光風会、フユウザン会、東京大正博覧会、二科会、再興日本美術院、赤曜会、大阪美術展、珊瑚会、草土社、金鈴社、国画創作協会、日本創作版画協会、帝国美術院美術展覧会、中央美術展、新興大和絵会、東台彫塑会、平和記念東京博覧会、春陽会、曠原社、円鳥会、マヴォ、アクション、白日会、復興記念合同彫塑展、大阪市美術協会展、1930 年協会、聖徳太子奉賛展覧会、新樹社

『在外日本古美術品保存修復協力事業（工芸品／絵画）』（ E05 の一環として実施）

今年度、刊行した報告書「在外日本古美術品保存修復協力事業」は、平成 12 年に修復を完了した絵画および工芸品の報告と事業報告をまとめた。今回の修復ではメトロポリタン美術館所蔵の 43 件の刀剣類が含まれているために、修復報告では刀剣、工芸、絵画の 3 部構成とし、顕微鏡写真に納めた刀剣の研磨工程をカラー図版にまとめた。刀剣の修復で研磨工程の詳細な写真を使用したのは世界初の試みと言える。また、工芸編ではギメ美術館およびベルリン東洋美術館所蔵の洋櫃、食籠、鼓胴を掲載した。さらに、絵画ではロスアンジェルスカウンティ美術館、クリ - プランド美術館、ミネアポリス美術館など 7 件の絵画修復報告を行った。

『蔵書目録』（ A05-01-1/5）

現在、東京文化財研究所が所蔵する図書は約 10 万冊、雑誌は約 2700 種におよぶ 9 万冊を数える。資料閲覧室では、そうした図書資料の目録作成を五年計画で進めており、2001 年度はその第一冊目として、初代所長矢代幸雄の蔵書を中心とする『東京文化財研究所蔵書目録 1 西洋美術関係 欧文編・和文編』を刊行した。

東京文化財研究所の所蔵する西洋美術関係図書のうち、2001 年 7 月 31 日までに登録された欧文図書 1,467 件、和文図書 526 件を収録



『東京文化財研究所蔵書目録 1
西洋美術関係 欧文編・和文編』
2002 年 3 月発行 全 182 頁

『黒田清輝《智・感・情》 美術研究作品資料 第 1 冊』（ B01 の一環として包括的に実施）

美術部のプロジェクト研究「重要美術作品資料集成に関する研究」の調査報告書として毎年 1 冊刊行される。プロジェクト研究の 1 年目にあたる 2001 年度は『黒田清輝《智・感・情》 美術研究作品資料 第 1 冊』を刊行した。その構成は下記の通りである。

カラー図版

モノクロ図版（反射近赤外線画像 22、透過近赤外線画像 21）

論文 山梨絵美子「赤外線的眼で見る黒田清輝《智・感・情》」

参考文献



『黒田清輝《智・感・情》
美術研究作品資料 第 1 冊』

『日韓共同研究報告書』（ E03 の一環として包括的に実施）

環境汚染による文化財への影響と修復技術の開発研究

韓国国立文化財研究所と東京文化財研究所は「環境汚染による文化財への影響と修復技術の開発研究」をテーマに共同研究を行っている。本報告は第 1 次共同研究の成果をまとめたものである。

- 韓国における大理石文化財に対する酸性雨の影響 青木繁夫・姜大一・金眞思(p1 ~ p15)
韓国における環境要因に於ける屋外暴露金属の腐食 青木繁夫・姜大一・金眞思
(p32 ~ p40)
- 石窟庵の保存環境 金眞思・姜大一 (p41 ~ p48)
ソウルの気象および初期降雨の分析資料 金眞思・姜大一 (p133)



『敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究報告』(E02 の一環として包括的に実施)

この報告書は、第3期敦煌莫高窟壁画保存に関する共同研究の成果についてまとめたものである。従来に行われて
いる莫高窟壁画の修復方法の評価と記録のための修復履歴管理システムについて主として研究を行った。

- 敦煌莫高窟壁画修復方法の研究 青木繁夫・増田勝彦・王旭山・汪萬福・蘇伯民・樊再 (p1 ~ p26)
敦煌壁画の土壁分析結果報告 (p27 ~ p54)
敦煌修復用土壌溶出水および大泉河水の分析結果 (p55 ~ p64)
敦煌莫高窟第53窟の写真測量 青木繁夫・増田勝彦・本郷賢兒 (p65 ~ p78)
デジタルオルソ画像を用いた壁画修復履歴管理システム (p79 ~ p86)

『日中壁画修復用語集』(E02 の一環として包括的に実施)

敦煌莫高窟壁画保存に関する日中共同研究を行っているが、修復用語に関する日中双方の定義に差があるために
さまざまな問題があったため、双方が共通認識を持つために「顔料」「損傷状態」「土壁の構造」に関する用語集を編
集した。今後さらに項目を追加していく予定である。

『未来につなぐ人類の技2 船舶の保存と修復』(E02 の一環として実施)

表紙	
はじめに	渡邊 明義
刊行に当たって	川野邊 涉
目次	
part 1 船舶保存の現状	
"EMH(欧州海事遺産会議) ヨーロッパにおける歴史的船舶の保護活動 "	Anders Berg
船舶保存の現状と課題について	小堀 信幸
海事文化財の保護に関するこれからの課題	田良島 哲
part 2 海事文化財の保存哲学	
船の保存修復の理念・概念 文化財としての船舶の修復	John Robinson
オランダにおける船舶の保存と活用	Hendrik Boland
ノルウェーにおける船舶保存	Johan Kloster
"スカンジナビアにおける金属船の保存 伝統は生きている "	Tom Rasmussen
"廃棄か保存かドイツにおける大型金属船の保存 歴史、理念上の検討、実例と経験 "	Ingo Heidbrink

北日本地方における漁船の収集・保存について

昆 政明

part 3 保存修復の技術や手法

記録 船舶の保存と修復の手法

Doerte Muenstermann

"考古学と教育の間で ベルリンドイツ技術博物館での海洋文化財修復 2 例 "

Volker Koesling

船の科学館所蔵「宗谷」「羊蹄丸」の保存整備について

中山 俊介

「なにわの海の時空館」と菱垣廻船の復元

中村 陽一

小型木造漁船を保存する

平賀 大蔵

国際研修「漆の保存と修復」報告書《International Course on Conservation of Urushi 2001》(E04 の一環として実施)

Contents

Lectures

Introduction to the World of Urushi

KATO Hiroshi

History of the Japanese Urushiware

TAKAHASHI Takahiro

The Restoration of Cultural Property in Japan

MUROSE Kazumi

Urushi as seen from Polymer Chemistry

KAWANOBE Wataru

On the Restoration of "Kacho Raden Jikiro" in the Collection of the Museum of East Asian Art, Berlin

YAMASHITA Yoshihiko

Japanese Urushi Coated Works of Art in Hungarian Public Collections

LENCZ Balazs

Presentations Participants

Benita JOHNSON

Margarita KIRCHNER

Sally MALENKA

Mechthild BAUMEISTER

Margarita KIRCHNER

Maria BRUNSKOG

Margrit Elisabeth REUSS

Elena ALLODI

Yunsun CHOI

Robert TAIE

Reference

Glossary

Illustrations of Urushi Techniques

KATO Hiroshi

SHIMADSU Yoshiko

ユネスコ「無形の文化遺産の保存に関する国際ワークショップ」報告書《UNESCO International Training Workshop on the Protection of Intangible Cultural Heritage ("Living Human Treasures" System) 》
(C07-01-1/1)

2001 (平成13)年2月19日~23日に行った国際ワークショップの内容をまとめた英文報告書を刊行した。

I. General Information

II. Opening Ceremony

1. Address by the Commissioner of the Agency for Cultural Affairs

SASAKI Masamine

2. Address by the Secretary-General of the Japanese National Commission for UNESCO

SHIRAKAWA Tetsuhisa

3. "Protection of Intangible Heritage - 'Living Human Treasures' System"

AIKAWA Noriko

III. Keynote Lecture

1. The Handing Down of the Succession of Classical Performing Arts

KAWATAKE Toshio

2. Preservation and Perpetuation of Folk Performing Arts

UEKI Yukinobu

IV. Country Papers

Benin, Mexico, Ghana, France, Russia, Italy, Brazil, Czech Republic, Finland, Republic of Korea, China, Philippines, Thailand, Viet Nam

V. Details of the Discussion

VI. Appeal

VII. Closing Ceremony

1. Closing Address by the Director-General of the Tokyo National Research Institute of Cultural Properties

WATANABE Akiyoshi

VIII. Appendix

1. Annotated Agenda

2. "Protection Policies for Intangible Cultural Properties (In case of Performing Arts) in Japan"

3. Schedule

4. List of Participants



ユネスコ「無形の文化遺産の保関に関する国際ワークショップ」報告書

東文研 NEWS の発行 (A03 の一環として実施)

年 4 号を編集。研究所の研究活動のうち、速報性と公共性の高い情報を記事にして伝える。バックナンバーは、PDF 形式のファイルを作成し、ホームページ上で提供している。

- ・ 5 2001 年 6 月発行 A4 版、全 16 頁、カラー挿図等 15 点
- ・ 6 2001 年 10 月発行 A4 版、全 8 頁、カラー挿図等 11 点
- ・ 7 2002 年 1 月発行 A4 版、全 12 頁、カラー挿図等 19 点
- ・ 8 2002 年 3 月発行 A4 版、全 10 頁、カラー挿図等 21 点

ホームページ上の PDF ファイル

- ・ 東文研 NEWS No.4
- ・ 東文研 NEWS No.5
- ・ 東文研 NEWS No.6



東文研 NEWS No.8

『東京文化財研究所概要』(A03 の一環として実施)

概要は、各年度のはじめに編集し、研究所の組織や年次計画にもとづいた研究活動を視覚的にわかりやすく紹介する。



2001年度版 2001年6月発行
A4 版、全 32 頁、カラー挿図等 93 点